

すまいるん

季刊
2004
夏
号

(通巻第71号) 二〇〇四年七月一〇日発行 ©

花や幾何学模様を刺繍した華やかな衣装をまとう花モン族。ベトナム北部の山地で焼畑を行ない、移住を繰り返してきた彼らも定住し始めている。風紋より。



特集「伝統にはまる」

目次

〈風紋〉 民族衣装とアイデンティティの花モン族 藤井明……………2

〈焦点〉 伝統を美しく読みたい……………4

ローカリテイへの軌跡―組織事務所から民家再生へ、そして今 六車誠二……………6

伝統って何? 若い世代は、伝統をどう捉え、どう取り組んでいるか……………13

平原 匡十岸本 耕十北村佐絵子 司会「中谷礼」

民家のたなごころを探る 伝統にはまった研究者の軌跡 堀江亨……………36

宿命と保存 大工の家に生まれ、文化財保存を職とする 西澤正浩……………40

「伝統技術」の魅力と可能性 一軒の築つくりから 畔上順平……………44

〈すまいるのテクノロジー〉 城石垣考 小林善勝……………48

〈私のすまいるん〉 廊下と縁側を失ったとき 矢野誠一……………54

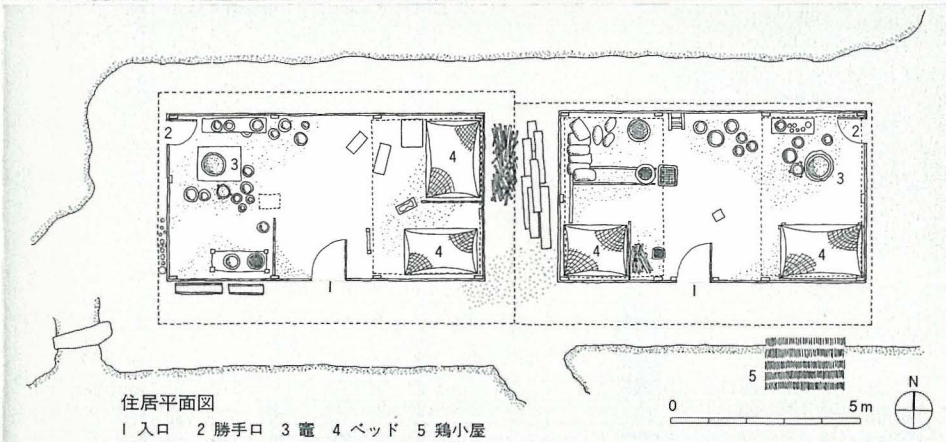
〈図書室だより〉 蔵書探訪 工学院大学図書館の自慢話 初田亨……………58

〈ひろば〉 建築道中―悩める求道者のかなり私的な戯言 松川真由美……………60

〈すまいる再発見〉 池辺陽 もう一つの最小限住宅 伊藤喜久……………66

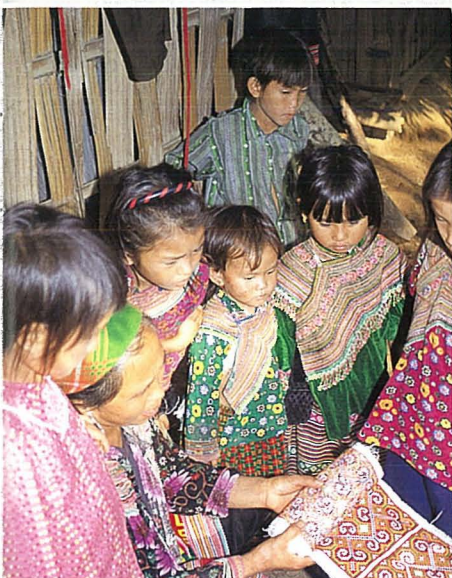
住総研ニュースレター……………62 編集後記……………68

風紋



住居平面図

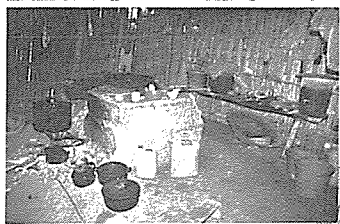
1 入口 2 勝手口 3 竈 4 ベッド 5 鶏小屋



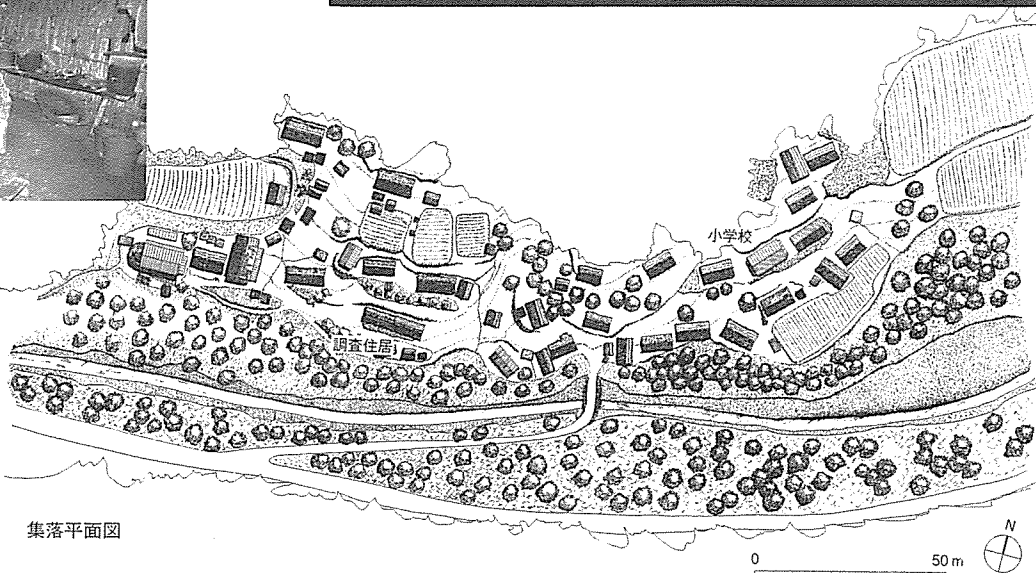
民族衣装とアイデンティティ

—ベトナム北部の花モン族

写真と文／藤井 明



右ページ写真——
上／左側の住居のベッドの置かれたコーナーを見る。
中／住居の妻側外観。
下右／軒下に干された華やかな衣装。
下左／民族衣装の子どもたち。
左ページ写真——
上／調査住居の外観。
下／左側の住居の竈まわり。



集落平面図

0 50m

ベトナムの人口の約九割を占めるキン族は主に海岸沿いの平坦地に住み、一方、少数民族は、中国やラオスに接する山岳地帯に住んでいる。この住み分けは、経済力と政治力を反映したものであるが、少数民族の間でも高度による住み分けがなされている。一般的に先住民族が低地に住み、遅れてきた民族が高地に住んでいる。そのために、ベトナムの民族分布図は、それぞれの民族の領域が連結しないで、モザイク状になっている。

モン族は中国では苗(ミャオ)族と呼ばれているが、その一部が清代の半ばから漢族の弾圧を避けて南下している。彼らはその衣装の基調となる色彩の違いにより、白モン、黒モン、青モン、花モンに分かれている。中でも華やかなのが花モン族で、女性はピンクや青地に花や幾何学模様を鮮やかに刺繍した衣装を日常的にまとうている。民族がそのアイデンティティを主張する方法には制度や儀礼、風習等さまざまなものがあるが、分かりやすいのは衣装や化粧、装身具といった視覚に訴えるものである。

ティエン・カン村は北部の町ラオ・カイから南東に約五〇キロの所にある小村である。モン族は従来は焼畑農業に従事し、畑が疲弊すると集落ごと新しい土地に移住するという生活を行っていたが、近年は次第に定住し始めている。この村落でも、小学校が造られ、また、屋根材がヤシの葉から瓦やスレートに替わり始めるなど、定住化が着実に進んでいる。村は渓谷の中に立地し、前面に河が流れ、背後に石灰岩の岩山が聳えるという急峻な斜面に造られている。建物は等高線に沿って造られているが、その並びに規則性はなく、平坦な場所を選んで住棟と畑が作られている。

住居は地床の平入りで、屋根は切妻の両妻面に差し掛けが付いたものである。壁は割竹を網代に編んだもので、窓はないが、編み目の隙間から陽光が射し込み室内は意外と明るい。谷に面する側の中央に入口があり、内部は三つの領域に区分されている。中央の部分が居間的な空間で、その両サイドに竈やベッドが置かれている。竈は造り付けて、その周囲に調理道具や壺が散乱している。ベッドは木製で、上に蚊帳が吊つてある。主な調度はこれだけで、穀物を入れた袋や農機具などは、梁の上に板を張った中二階に収納されている。この中二階の妻側は外部に開放されていて、空気が通り抜けるようになっている。軒下や物干しに円盤形の色鮮やかな衣類がいくつも干してあり、花モン族の集落であることを主張している。

伝統を美しく読みかえたい

若くして「伝統」にはまってしまった人たちに焦点をあてる、この特集について

最近ある家を改修した。とても上品な木製建具一列が延焼線に引っ掛かっていた。役所の担当からは、建具の性能が現法規に合わないので、変更を要請された。確かに一辺倒の「科学」的方法からすればそういうことになるだろう。建具のみならず同じ延焼線に引っ掛かった真壁はすべて変更する必要がある。しかしこの方法は理論から事物を作り出そうとする錯乱だと思ふ。最善ではないがそれら部材の前に、軒下に仕込みの防火シャッターを隠し込んで与条件をクリアした。こういう具体的な対処は、今ある存在を目の前にして、それらを前提としてから「科学的に」考える必要がある。

伝統的な住まいに住むこと、住もうとすること。これは科学的な選択ではなく、単に権利の問題ではないかと、最近つくづく思う。

日本の伝統的な住まいが危機を迎えた六〇年代を発端として現在にいたるまで、何とかそれを生き延びさせることに尽力されてきた何人かの同じ穴の「先輩」たちは、伝統的な住まいも、科学的にすぐれた存在であることを証明しようとする躍起になっていた。もちろんそうしないと伝統的な住まいは、全く理解もされず生き残ることもできなかつたのだろう。しかしそれはマイノリティが生き残るために、自分の言語を捨てて、「アメリカ語」をしやべ

ろうとすることと同義である。伝統も近代的な要素の一つとして認められる必要があったのだろう。でも実のところ、伝統は単に近代的な要素をも含むだけのものなのであり、伝統全体の射程はそれ以上に大きいはずである。

「伝」わったモノモノを「統」へる

誰が考案したのか知らないのだが、「伝統」はいい言葉だと思ふ。もちろんその内実はもろもろの因縁の重さを含んでいるわけであるから、あくまでも字づら上のみの意味である。過去に存在してしまったあらゆるモノを否定せず、そこから発想し、きちんとまとめあげていく。この行為は人間の文化のみならず、社会的環境的行動を行なう生物一般の、基本条件なのである。そういう意味で伝統は、ひろくサイエンスなのだとしても、過言ではないはずである。

「伝統」を、過去を守りぬくという極端から、早く解き放ってやりたい。先の意味での「伝統」を考えれば、「保守」はあとからついてくるのだから、いろんな人がいろんな分野で考えはじめているはずである。かくいう私もそうだからである。自分にも押し寄せてきた課題は必ず他者も共有してい

るものだ。この特集を試みた理由は、そのような静かだが確実な潮流をもつともよく体現しているはずの、

「若くして、「伝統」に、はまっつてしまった人」

を探しだして、彼らの日ごろの課題などから、その変化の正否を読みとつてみたいと思つたのだ。もう少し具体的にいうと、さまざまな仕事を実現することが求められる二〇代後半から三〇代までの実践的人びとに焦点を当てた。かくいう私もそういう世代の一人である。初めてこういう場所に登場する人もいれば、その着実な仕事で知名度を上げている人もいる。「伝統といえは大工！」とか、そういう紋切り型もやめて、なるべくいろいろな分野で活躍している人に参加をお願いした。お友達が欲しかったともいえるのだが、全く知らない人が同じ課題を共有していることが発見できれば、孤独であるかもしれない日々の作業にも、いきおいがつくというものだ。

筆者は個人的には、「すまいろん」のような自由な学的気風を持ち、また商業誌ほどドラスティックな性格を持つ必要のない機関誌には、研究成果の発表の他に、地味だろうが必ず必要な流れを生み出し、育んでいく役割を担ってくれることをも期待している。

そしてまた意味のある世代論の登場も期待する。世代論が成立するのは、以前とは何か構造的に異なる社会的潮流が、世代という層を通して分析可能な場合である。だから自分たちの職能についての課題が、半世紀ぐらい大同小異の業界では、それはほとんど意味をなさない。日本の現代建築業界は、皮肉にもそのような調和的かつ自閉的な歴史をすでに築き上げてしまったと、感じる。

それに比べて、「伝統」という言葉にこめられた過去と現在との関係、そしてその間にある矛盾は、実はなかなか解決しにくいがゆえに、常に新しい問題として立ち現れる可能性を持っているのである。今回の特集はそういう思いをなるべくストレートに出そうとした。伝統は「古い」のではなく、常に「新しい」課題を持つはずである。

さきほど、二〇代から三〇代と言ったが、自身の体験という牽強付会を許してもらえぬなら、この世代ほど、戦後の日本の住まいに主体性なく翻弄されてきた世代も珍しいだろう。

幼少時代を六〇年代の東京の下町で過ごしてきた当方の場合は、まさにそうであった。戦前の茶店、戦後のバラックはまだ残っていたし、遠く山の手では白亜のマンションが建ち始めた頃だった。確かに当時は、いま再生ブームの「民家」なんて、早く消滅させてしまふべき汚物のようなものだったと記憶している。

私自身は、父方のぼろぼろ木造の元旅館で生活し、体みには母が抽選で手に入れた湘南の出来たての団地で過ごした。砂漠のような砂浜にぼつんと建っていた団地をみて、そのありように子供心にしみじみとしたものだ。「モダン」はすでに新しくなかった。その後バブルで生家のまわりのコミュニティは歯抜けになり、基準法どおりの貧相な軽量鉄骨造が周囲を駆逐していった。

こういう状態では、すでにさまざまなすまいの様式に、一辺倒の優劣をつけることはナンセンスでしょう？ それらがすでに社会に存在してしまつたという事実は確かなのだから。

それでは、私たちはどのようにこの豊富な混乱に対処すればいいのだろうか。寛容であること、方法的改善を怠らないこと、そしてはだかの目を持つことだと思ふ。

今回の特集の執筆者の力のこもつた手記を読んで欲しい。そこに共通して感じられるのは、新しい課題を生み出す源としての「伝統」に向けられた、はだかの目である。刺激的にして沈着、体験への素直な反応。浅薄ではない哲学がここから生まれる可能性がありはしないですか？

中谷礼仁／なかに・のりひと

大阪市立大学工学部建築学科専任講師。略歴は13ページ参照。本誌編集委員。

ローカリティへの軌跡

組織事務所から民家再生へ、そして今

六車 誠二

はじめに

今、私は、四国・香川にて「国産材・伝統軸組構法での住まいづくり」というフィールドを中心に設計活動をしている。大工である父・弟、そして若い数人の大工で構成される小さな工務店（六車工務店）と仕事をすることが多く、一種の家内工業である。日本の木・地域の木で、木の家を建てる……このごくあたりまえの行為が、今、大変な努力をしないとできない、という現実がある。かつて日本中で機能していたであろう「山から町までの木の流通システム」は、時代の急激な変化に翻弄され今や瀕死の状態にあり、我々の仕事も、徳島や高知の林業家、製材所、材木店の特別な努力に支えられなければ、とても成り立つてはいない。また木の家を支えるさまざまな地域の技術——小舞十土壁・瓦・畳・建具・和紙——のそれぞれも、今や貴重となり次世代に繋ぐことが危ぶまれているのはご承知のとおりである。

国産材での家づくりに関わる設計者は、ただデザインや設計に通じているだけでなく、他の職能への理解やビジョンを持つことが求められ、山から町までのトータルなプロデュース的役割を自然と担わされる。その結果、いわゆる「建築家」といったイメージとは少し違う存在となるような気がする。ちなみに私は、よく「設計もできる大工」と間違えられる。実際、「大工も

できる設計者」というようなバイタリティあふれる設計者もいるようだが、私の場合、口は出しても手は出さない主義なので、やはり私の設計が大工っぽい？のか。これはよい例ではなかったかもしれないが、今、日本の各地で日本の木・地域の木が、家づくりの材料としてやはり一番心地よいのではないかと見直され、伝統軸組構法への評価も少しずつ見直されようとしてきている。私は、日本の各地に、今までのデザイナー的「建築家」とは少し違った、「ローカリティのある建築家」が、少数ながら確実に存在し、今後また、少しずつ増えようとしているのではないかと思っている。私が「伝統にまっぴらして」かどうかは自分ではわからないが、少数派設計者の事例のひとつとして、組織事務所をスタート地点にしながら、ある意味正反対のこのような地点に来たその軌跡と、現在どんな事を考えながら木の住まいづくりの現場に取り組んでいるかということ、少し書いてみたいと思う。

組織事務所から

二〇代の初め、私は組織事務所という入口から建築を始めた。バブル期に学生時代を過ごした、当時の熱意ある建築学生の多くがそう思ったように、私自身も建築家を志し、現代建築の最新のリアリティを学べる環境を求め、

組織事務所を選んだ。私の読みは当たり、そこは最高の「修行の場」であった。民間、公共の建築をはじめ、国際プロジェクト、土木、都市計画までを手掛け、年間に三六五もの現場が竣工するような、社会的責任の大きな事務所のひとつ。そこに働く一〇〇〇人を超える技術者はいわゆるエリート集団である。設計業務はきめこまかく細分化され、ひとつひとつのプロジェクトに、各分野のエキスパートがチームとして結集。詳細な技術・智慧が積み重ねられ、検討され、秩序ある建築へと仕立てられていく。そんな様を目の当たりにし、建築をつくるシステムが、非常に緻密で理性的であり、完成されているように感じられ、感動を覚えた。

とりわけ、各分野の第一人者といわれるような人々には舌を巻いた。彼らは初期の着想から、ディテール、構法、コスト、工程、現行法規にいたるまでを全て、同時並行的に考え解いていく。そのバランス感覚、思考のスピードや行動力は、理性というよりむしろ野性に近く、私は彼らの中に大工である自分の父親を思い出した。彼らは、まぎれもなく設計という分野の「職人」であり、この職人らが、この大きな集団の先頭を引っ張る原動力だと感じた。

入社二年目に小さな交番を担当することとなり、私は、彼らのもとに通い詰め、物事の原理や素材の見極めについて徹底的に仕込まれた。鉄・ガラス・コンクリートという素材が、熱・水・風・揺れ・時間……に対してどのようにふるまうのか。二種・三種の素材が組み合わせる時、そこにどんな現象が起こるのか。建築という長い時間を視野にいれた時、過酷な環境において、堅牢な素材たちの身にもさまざまなことが想定できる。例えば、鉄が延び、ガラスが曲がり、コンクリートが水に溶ける……というような。また、例えば「窓」ひとつについても、その枠の納まり等いわゆる「仕様」をただ覚えるのではなく、窓の働きをひとつひとつ分解して、原理的に考えることを教えられた。光を入れる・さえぎる、風を入れる・さえぎる、内外からの視線のあり方、そしてふさわしい開閉のあり方・程度・頻度、水をどう切るのか……、考えてみればあたりまえのことばかりである。建築において覚え

るようなことはむしろ少なく、常に原理的に思考すればいいのだ、ということがわかるにつれ、建築をするのが楽しくなったように思う。

木に向かう

非常に恵まれた環境であったが、私の頭には、独立するためには組織事務所以外の経験も必要であり長居は禁物、という戒めがあった。結局、交番の竣工後しばらくして退職した。あまりに全力疾走の三年であったがために、いささか疲れていたのもあったと思うが、何か別の経験をしたい、早く次へ行こうという気持ちが強かった。次は設計が細分化されていないところでトータルな経験ができないものかと、アトリエ事務所などをいくつか訪ねたが思うように就職は決まらなかった。蛇足であるが、それまでアトリエ事務所でも働く所員というのは独立を志す「狼」たちにはがいないと思っていたが、実際、所員たちと話してみると、意外に「羊」ばかりであった。結局、前から計画していた三か月程度のインド旅行に先の見えないまま出かける羽目となった。

旅の最初の頃は、仕事が決まっていなことにさすがに少し焦りを感じていたが、インドの建築や風土にどっぷりつかり、安宿で出会うバックパッカー相手にさまざまな議論をしているうちに、むしろ根本的な問題に突き当たった。

「インドには、インドの風土に合った建築が一番美しいように、日本の風土には、日本の風土に合った建築が一番魅力的であるはずだ」

「なぜ、日本人でありながら、木の建築を知らないのか、つくらないのか」「日本において建築を考えると、〈木〉を外して考えを進めることはむしろ不自然ではないか」

思えば、組織事務所での三年間、あれだけさまざまな素材と正面から向き合いながら、〈木〉という素材に向き合うことはついぞなかった。むしろ、意識的に避けられていた。現代建築の最先端の技術が結集しているような事

務所であるのに……若しくはそういう事務所だからこそ……「木」は扱えなかった。改めて考えてみても、事実として、現代建築のほとんどに、「木」は存在していなかった。そのことに對する疑問は、私の中で常にあったような気もするが、強く意識されることなく、なおざりになっていた。

「木」という日本古来の建築素材に對して、「鉄・ガラス・コンクリート」というような現代建築の素材が根本的に違うこと。それは、それらが「練り物」であるか否か、ということではないだろうか。「鉄・ガラス・コンクリート」は「練り物」である。つまり、どこを切っても同じ断面が現れる。組成が均質であり、管理できる素材。それに対し、「木」は「練り物」ではなく、細胞を抱える生物素材であり、どこをどう切っても違ったものになる。樹種によつて違い、また同じ樹種でも産地や生育環境によつて違い、極端にいうと一本一本が違う。また、製材や木取りによつて違い、乾燥状態によつて違ってくる。「木」という素材と向き合うためには、極めて具体的に關わる必要がある、机上の理論は現場においてほとんど意味をなさない。こういった一つ一つが均質でないものは、ある意味、現代の教育や社会が最も苦手とする分野であろう。高度経済成長期、日本社会が、「管理」ができないという理由で簡単に切り捨ててきたさまざまなものの象徴が、「木の文化」であるように思えてならない。あまりに簡単に切り捨てられてきた「木の文化」であるが、ひとたびこの「木」の世界に足を踏み入れたならば、我が国が一〇〇年かけて育んできたその膨大な技術的ノウハウのストックに、美意識の深さに驚くことになる。私は、次なる環境において、そのことに感じ入ることとなった。

古民家に学ぶ

私は、「木の文化」への手がかりを掴もうと、関西にて古民家再生を手掛ける設計事務所に入所した。決して「羊」ではない私を受け入れてくれた懐深い事務所である。正直、「再生」ということは、それほど私のテーマでは

なかったが、古民家の調査の機会がたびたび与えられる、ということに興味と期待があった。実際、百年、二百年の歳月を耐えて今に至る民家などを調査・体験できるということは、想像以上に得難いものであった。古き工人たちの智慧や技術は、時間を超えて我々に、この国の風土、そして「この国のかたち」というものを伝えようとしており、また、大切に手入れしながら住み継いできた家人たちからは、「住まう」という文化を教えられた。実感として、正しくつくられ正しく使われた家だけが長い歳月を超えることができるのだ、と思ひ知らされた。また、地域の民家が、長い時間をかけ風土や生活に寄り添いながら、少しずつ工夫され洗練されてきた過程の中に、現代に通じる多くの発見・教えがあり興味は尽きない。

この国のかたち……地震が多く、雨が多く、湿度が高く……という風土のなか、選択されてきたのが、「木」という素材であり、「継手・仕口」などのジョイントシステムであり、柱は石の上にボンと置いただけの「石場建て」であり、筋違いという斜材は存在せず「貫」という水平材を柱間に通した構造であり、「小舞」であり「土壁」であり「和紙」であり「畳」であり「瓦」であろう。

例えば「石場建て」であるが、現行法規の考え方では、地震時における引き抜き力を考慮し建物は基礎としつかり緊結していなければならぬことになっている。しかしこの国は、昔から地震大国であったのにもかかわらず、一〇〇年間、柱は石の上にボンと置いてきただけだ。それは、庶民の家だけの話ではない。京都御所までもがそうであった。そしてそれらは実際に大変長い歳月を超えているという事実。決して技術がなかったから置いただけ……ではない、ちゃんと選択された「かたち」であるように思えてならない。とにかく面白いことに、古のさまざまな技術のひとつひとつに、なぜだろうかと向き合うと、必ず理にかなった答えが見つかった。水に對して、揺れに對して、歳月での風化に對して、材料の有効利用に對して、用途に對して、文化に對して……の答え。それは、現代の技術の単純な考え方より、むしろ高度な考え方である場合も少なくなかった。そして、形や技術はすべて理に

かになったものであるだけでなく、それが地域の風景をつくってきたのであり、その佇まいは、誰もが素直に美しいと感じられる調和のとれたものである。古の日本人たちの「モノづくりの哲学」と「美意識」には、感服せざるを得ない。

帰郷、そして現代の木造へ

関西にて独立のタイミングを見計らっていた私が、故郷・香川に帰ろうかな、という気になったのは、父との会話がきっかけだった。「我々の仕事から何か得ようと思ったら今がぎりぎりのタイミングかもしれない。転職を見逃すな」という父の言葉に、「そうかもしれない」と単純にその気になった。

父・六車昭と建築家・戸塚元雄氏が出会い、この二人の協働による四国産木材での家づくりがスタートしたのは、遡ること私の高校時代である。大学時には「長炭の家」が発表され、私も帰省の際には友人らと見に行き、そのストイックで非常に整理された木造建築に、今までの木造とは全く違う新鮮な魅力を感じた。また、途中から五つ違いの弟が父に弟子入りし、「杉の家」の世界に足を踏み入れていた。父や弟からは頻繁に現在取り組んでいる現場のことや戸塚氏とのやり取りなどについて報告を受けていたが、とにかく「設計者主導型」が猛威を振るっているなか、設計者と大工が対等にやれているところが「ミソ」であり、それが建築におおいに反映されているようであった。つまり、「設計者の理論Ⅱ机上の理論」と「大工の理論Ⅱ現場の理論」の双方が揃った時、物事はイヤでも進化するようであった。ひとつひとつの現場の経験が次に活かされ、工夫され、蓄積され、皆おもしろくて仕方ない風であり、その進化はめざましかったようだ。私が帰郷した頃には、すでにひとつの完成形を迎えていたように思う。関西等で眼にしたさまざまな木造の現場と比べても、正直かなり高度なレベルだと感じられた。

そもそも関西に職を求めた理由のひとつには、古都ならば秀でた大工技術が集まっているだろうと期待したことがあった。しかし実際は、よほどの数

奇屋づくりか文化財でない限り大工技術のいいねいな仕事にはほとんどお目にかかることができないようで、少々期待はずれであった。また、「再生」といっても、「形態」だけはなんとか再生できても、技術まで再生することは困難であるのが現実であり、私には、構造的にむしろトドメを刺しているように思われてならないことも少なくなかった。本来、日本建築は「再生可能」建築であり、貴重な木材を大切に利用していた。今まで古民家を調査して、「転用材」を使っていない家にはついぞ巡り合ったことがないことからも、古の工人たちがいかに巧みに木を組んでいたか、利用していたかがわかる。一方、現代に再生若しくは新築した木造で、将来「再生可能」なものがあったいどれほどあるだろうか？ かと行って大工だけを悪く言うのは酷な話だろう。要するに日本の木造をめぐる状況が、昔とはすっかり変わってしまったているのだ。

ならば、「現代の木造」のあるべき姿とは、なんだろうか？ その問いに対して、実際に実践しながら答えを模索しているのが、日本の各地で草の根運動的になんばっているさまざまな「小さなチーム」であろう。父と戸塚氏のチームも、その中の貴重なひとつであった。帰郷した私は、正直、最初から身も心もがっぷり、という訳にもいかなかったが、徐々に国産木材での家づくりを知り、探求するにつれて、今、山にある木を使った、なんのてらいもないまっとうな家づくりの魅力と、また、現実、さまざまに広がる問題の奥深さを知った。

幼少期、私は、憧れを持って父の仕事をかたわらで見ていたものだったが、自分の道を求めるにつれていつの間にか違う世界へと離れていった。そして遠回りをしたが、結局は、大きく弧を描くようにして、「木」という出発点に帰ってきたのかもしれない。ともかく父・弟に合流することとなった。

すべては山から

設計者は木の建築をつくろうとする時、自らの仕事が山に苗木を植えた頃

より始まる、長い長い生産過程の末端に位置していることに気付くかもしれない。例えば、樹齢八〇年の木で建築をつくろうとした時、この建築行為は八〇年前より始まっているとはいえないだろうか。木の産地を二世代前まで遡れば、その木が苗木として植林された八〇年前から、枝打ち、間伐といった施業の過程、自然環境が与えた影響を知ることができる。と同時に、これら人の手および自然の手により加えられた痕跡は年輪に忠実に刻まれている。

「林業」という仕事を一言で要約すると、それは「密度管理」である。ある一定の密度で植林をし、その生育にしたがって間伐と呼ばれる間引きを行ない、山全体の密度を調整、管理する。この最初の植林の密度や間伐のタイミング、その度合いが、木の年輪の込み具合、しいては強度等、木材の品質を左右するのだが、「町側」に「木の文化」が消えた今、「山側」はその基準をどう考えたらよいかわからなくなり、船頭を失った舟のように投げ所がない。どういう木材を町側が望んでいるのか、どういうふうに着てたら経済的に成り立つのか、山側にはそれを探る意欲さえなく、国からの「補助金制度」だけを拠り所に、理念なき施業を続けているようにしか見えない。山に行けば必ず「トコ柱はいらないか?」「補助金がでるから」間伐はしているが、材の使い道は未定」もしくは「伐採してもむしろ赤字になるから伐る気はない」というような声を聞く。山と町とが全く分断されていると実感する。かつて、日本の林業は高い技術を持っていた。例えば、林業の歴史古く美林として知られる吉野では、一haあたり一万二千本の高密度の植林をし、常に最適な密度を保つために木の成長に合わせて小マメに間伐をしてきた。いわゆる「密植多間伐」である。そうやって育てられた二五〇年の森を訪ねたことがあるが、森の美しさ、尊厳さはいまでもなく、材の年輪の込み方、均一な整い方には眼を見張った。これが最高の施業技術か、と。

しかし、今、このような林業を実践している森は非常に稀であり、ごく一部でしかない。日本の山のはほとんどは、戦後いつせいに植林された「戦後造林」の山であり、現在もしくは今後、市場に流れる杉材のほとんどは、「戦後造林」である。戦前・戦中、ひたすら伐り出されハゲ山となったところ

に戦後復興の意を込めて植えられたのは、成長が早く建築などさまざまな用途の期待できる「杉」であった。しかしそれらは、戦前の材とはあきらかに違いがある。その植林の「密度」である。かつての林業の基本であった「密植多間伐」はあまりに手間がかかるため、あらかじめ低密度（一haあたり三千本程度）とし、間伐の回数を減らそうという方針である。

その合理的決断により何が変わったか? そもそも、手間にかかる高密度の植林は良材をつくるための技術であった。一本一本の樹を、日光をめぐる厳しく競争させ、太さへの成長よりも高さへの成長を促進させる。その結果、中心部分の年輪がすっかり詰まった良材となるのである。それに対し低密度で育った材は、成長により高密度状態が生まれるまでの間、太陽をたっぷり浴びてすくすくぬくぬくと育ち、結果、中心部分がふわふわの材が生まれてしまう。日本固有の軸組み建築において、材のジョイントシステム「継手」「仕口」、ことに「仕口」は、材の中心部の強度に負うところが大きい。つまり、今後、戦後材と向き合い建築をつくる場合、基本的に今までの「継手」「仕口」のシステムをそのまま使うわけにはいかず、戦後材ならではの構法を構築する必要がある。私たちも、この戦後材への取り組みを始めている。皮肉なことに、町側のほとんどにおいては「継手」「仕口」等の技術がととの昔に失われており、「金物」や「接着剤」でサイボーグのような木の建築をつくるのが主流となっているため、芯目が詰まっていようとなかろうと頓着ないのが現実である。これは、長い間「米松」が幅を効かせていたための、負の遺産であろう。しかしその米松もアメリカからはすでに失われ、輸入先がカナダに移行し、そのカナダからも伐り出せなくなったため、今度には北欧やロシアの森に頼らうとしていると聞く。

経済優先の安直なモノづくりが、寿命（サイクル）の短い家をつくり、海外的な自然環境を知らず知らず破壊しているのではないか。例えば輸入材でも、日本固有の技術を用い、鉋をかけ、仕口などをしっかりと組み、あらわしで用いれば、寿命の長い、美しい価値のある家になろう。しかし現実はそのではない。安く仕入れた輸入材は、安物らしいぞんざいな扱いしか受けられないこと

になる。素材に無関心であるということは、その素材の生まれた森に対しても無関心なことを証明しているようで、日本の商社が、その森の再生に必要な代償までをきちんと支払っているとはとても思えない。木の建築は、山つまりは環境と密接である。それが日本の山であっても海外の山であっても私はあくまでも、「地域の素材を使い、日本固有の技術と知恵を活かしたもののづくり」の道を模索したい。それが、日本で生まれ育った人間として最も自然な営みであると思うからである。

木を見極める

「モノを見極める」ということは、モノづくりに関わるどんな職業にとっても無論大切なことだと思うが、特に、木の家づくりにとっては、「木を見極める」という行為こそが「木の文化」そのものであり、木の家に関わる全ての職能に、本来、要求されることである。

例えば、「製材」に関わる職人にとって「見極め」とはどんなことだろうか？ 山から4mなどに玉切りされ下りてきた材は製材にかけられるが、その製材の目的、つまりそのパーツが建築のどの部分に使われるかによって、製材方法は違ってくる。構造材を挽くのか、板を取りたいのか。丸太の段階で、その木にふさわしい行き先を決めてやらねばならない。木には「元・末」（根元か先端か）、「背・腹」（山の斜面の山側か谷側か）、「表・裏」（板の面が芯側か外側か）があり、これら基本を間違えると、材料として即、欠陥をきたすことになる。

製材された材が、すぐに建築に使えるというわけではない。ある一定の水分量となるまで「乾燥」が必要となる。木は、水分の安定した状態になるまでの間に、「ねじれ」「曲がり」「割れ」を起こそうとする。それらを起こすことなく乾燥させることが技術であり、歴史的にも数多くのノウハウがあるが、要は「時間」をかけることがその基本である。

近年、「製材」と「乾燥」の分野には、大型機械化やオートメーション化

が急速に進んでいる。さまざまな実験結果なども提示され、それらは一見、素晴らしい進化を遂げているかのような印象を受けるが、ひとつひとつを確かめていくと、随分と疑問に感じる部分が多い。つまりは、「経済性」「合理性」「省力化」において素晴らしいのであって、建築素材としての性能は、はつきりと落ちるのである。そもそも、一本一本が違う「木」という素材を「一律」に機械にかけるというのでは、昔からのやり方には勝てない。この木は、こういうくせがあるから、このぐらいの手加減を加えよう、というような微調整が必要なのだ。機械を用いる場合においても「木を読む」という行為は決しておろそかにはできないはずである。

こういった「木を読む」という行為は、おそらく理論のみでは教えることができない。古来からの智慧は、代々の職人らが身体で覚え、受け継がれてきた。しかし、今、一本一本、木の目を読んで製材できる職人は急激に減っており、昔からの製材所も廃業するところが増えている。「木を読む」ことをないがしろにした時、この国から、真の木の建築は姿を消すことになるかもしれない。

「一本一本を見極める」ことが、建築において、誰の眼にもあきららかに視覚化されるのが「木取り」である。例えば、標準的な規模の住宅において、だいたい一〇〇本の柱が必要であるが、この一〇〇本のそれぞれの四面、計四〇〇面を、その家の棟梁は頭に入れ、どこにどういう向きで使うかを考える。もちろん柱だけでなく、梁などの構造材、床材などの板、全ての材について、トータルなベストバランスを考えるのである。意匠的に大事なところ、構造的な要所、水がかりなど耐久性的に厳しいところなど、木を読み、用途の目的にふさわしいものを選び、適切な技術で組んでいく。そうした建築は一〇〇年経った後でも、それを指揮した棟梁の思考を読み取ることができる。「木」という均質でない素材の一本一本を見極める眼が、棟梁の原点から木の建築を考えることのできる思考力を支えている。

設計者にとって、モノを見極めるとは、どういうことだろうか？ 例えば、「ここに白い壁が欲しい」と考えた時、それが、プラスチックボードにペンキ



塗りの白なのか、漆喰の白なのか、和紙の白なのか、大理石の白なのか、そこから更に、漆喰の配合、大理石の表面仕上げ、和紙は袋張りなのか地獄貼りなのか……などと、素材のテクスチャー、クオリティー、興行きに、そこでの生活を重ね合わせながら、具体的に思考を馳せることではないかと私は感じている。そして、何より、「時間」「歳月」に思いを馳せるべきである。日本の雨、そして湿度の中、建築がどう歳月を超えるのか。設計者に、そういった「素材の見極め」が足りない時、いかにその設計のイマジネーションが素晴らしくとも、結果、テンポラリーなバラックに成り下がってしまう。また、設計者主導の建築の多くが、素材感を覆い隠し抽象化への道を進んでいることにも、私は疑問を感じる。実際、「練り物」だけに囲まれた抽象的空間に身を置くことは、「生き物」として果たして快適であろうか。日本人のDNAには、「木」や「和紙」「畳」「土壁」等、呼吸する素材に包まれた心地よさが記憶として刻まれているのではないかと思われてならない。

私は、「現代建築」と「伝統建築」の双方から、多くのことを教えられた。



写真(上下とも)一石縁のある家/高知・安芸の90年生の杉材で軸を組む。

そして、その二つがかけ離れているとは、今でも思えない。つまりは、「素材に向き合い」「時間(歳月)に向き合う」時、両者は融合するのではないかと思う。私自身は、「伝統の技術を普通に活かしながら」、常に新しい建築を探っていききたい気持ちがある。最高の建築をつくるためには、日本の「木の文化」を無視しては、とても到達できないと思うからだ。将来、地域の木を使って、地域の小学校などが造れたら、最高におもしろいだろうな……と、思いを馳せている。

六車誠二／むくるま・せいじ
 建築家 六車誠二建築設計事務所主宰
 一九九二年、京都工芸繊維大学住環境学科卒業。日建設計(東京)、藤岡建築研究室(奈良)を経て、二〇〇〇年、六車誠二建築設計事務所を設立、現在に至る。
 主な作品に、「石縁のある家」(住宅建築)二〇〇四年二月号)などがある。

平原 匡／ひらはら・ただし

勸国際技能振興財団佐渡支局・佐渡文化財研究所 支局長

二〇〇一年、芝浦工業大学工学部建築学科卒業。〇三年、同大学院修士課程（建設工学）修了。学生時代より参加していた佐渡職人塾がきっかけとなり、国際技能振興財団へ入り佐渡を生活の拠点とする。

岸本 耕／きしもと・こう

大工・吉川の鯨

二〇〇一年、芝浦工業大学工学部建築学科卒業。榎真木工作所に入社。社寺・民家・昭和初期の住宅改修などの仕事に携わり大工修業ののち独立。吉川の鯨というグループを結成して、町家移築工事が進行中。

伝統つて何？

若い世代は、伝統をどう捉え、どう取り組んでいるか

北村 佐絵子／きたむら・さえこ

主婦・北村建築設計事務所代表

一九九六年、近畿大学工学部建築学科卒業。九八年、早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。古民家改修を多く手がけるかわかみ建築設計室（松本市）を経て現在に至る。

司会 II

中谷 礼仁／なかにたに・のりひと

大阪市立大学工学部建築学科専任講師

一九八七年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学院修士課程修了後、清水建設設計本部を経て、九五年、早稲田大学大学院博士課程満期退学。九九年より現職。「大阪市北区菅原町旧長屋群実測調査」歴史的連鎖としての現代都市・居住空間の研究」など近世・近代の都市・建築をフィールドとして多彩な活動を展開する。本誌編集委員。



中谷（司会） 今回は研究にもまだなっていないような生なテーマを扱います。「伝統って何？」というくだけたタイトルですが、きょうお話しただく方々は二〇代から三〇代前半の方々です。当然ですが、団地とか新興住宅地に住まわれていた方が多いわけです。そうなってくると、「伝統」というものが単純に昔からあるものを保存するというものではなく、彼らにとつてはまったく違う領域に入っていくという意味が「伝統」にはある。そういう意味での伝統的なものに果敢に飛び込まれた若い人たちの話を聞くということで、ある種の世代論がみえてこないか、と思っっています。

「伝統」という言葉は非常に広い意味をもっていますから、まずは自分が伝統と思うものを挙げていただいて、その活かし方、将来へのつなぎ方を、それぞれご提言いただこうと思っっています。

平原匡さんは、国際技能振興財団と協力関係におられて、伝統に「はまった」典型ではないかと思うのですが、あれよあれよという間に佐渡のある場所にずっと居ついているという方です。

岸本耕さんは、平原さんとは同級生なのですが、伝統建築を扱う著名な工務店でたたき上げ、いまは独立されて、ある町家を移築再生するお仕事で「吉川の鯰」というグループをつくっておられます。

北村佐絵子さんは主婦兼設計者ということになっております。民家再生の第一人者のお弟子さんの事務所に在籍され、その後独立されて、結婚後も設計を続けているという方です。



第一回職人塾の様子

佐渡の「伝統」にはまる

——佐渡の伝統建築を舞台に職人塾を主宰する

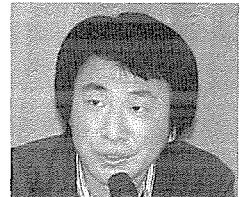
平原 匡

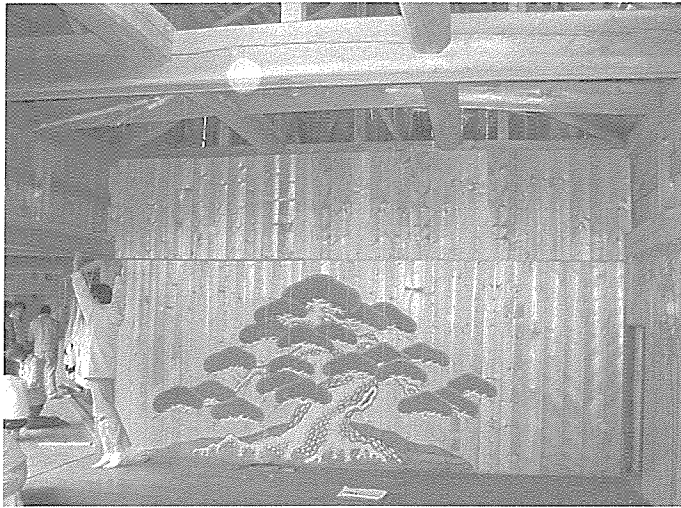
佐渡職人塾とは？

国際技能振興財団の佐渡支局を去年の六月に開設しました（支局といっても名ばかりの、僕一人でやっている支局です）。佐渡には多くの歴史的建造物があり、「佐渡職人塾」という名前で、それを修理するということを講習会として行なっています。佐渡の人だけではなく、島外からもいろいろな方呼び、ワークショップ形式の活動を続けております。佐渡職人塾はこれまでに三回行なったのですが、最初の二回は学生として参加し、佐渡支局を開設して佐渡に移って、三回目は僕が企画して運営する側になってしまったといういきさつです。

佐渡は伝統芸能が非常に盛んで、鬼太鼓、佐渡おけき、民謡も非常に盛んで、能舞台が多くあり、「佐渡職人塾」は、佐渡じゅうにある能舞台を含めた古建築を修理しようというところを行なっているのです。能舞台はすべて屋外の神社の境内にあります。かつてはお寺にもあったという話も聞いているのですが、どんどん減ってしまっって、現在では佐渡ヶ島全体で三二棟になっています。

「佐渡職人塾」は二〇〇二年三月から、国際技能振興財団の理事長でもある内田祥哉先生に塾長になっていただいて開催しています。ただ修復するだけではなくて、修復することをオープンにして、みんなで寄ってたかってやろうということが一つにあります。島内外の建築職人に呼びかけて参加を募るといのがテーマで、島内の職人さんも優秀だし、外の職人さんも優秀だ





写真一2 古松を描いた鏡板。



写真一1 会場となった加茂神社の能舞台。



写真一5 修理完了。



写真一4 修理中の様子。



写真一3 傷んだ束を外して加工。

し、それを集めて同じ場でいろいろな技術を伝え合うことができる。交流事業になればいいなということです。島内の歴史的建造物に一つひとつ直接ふれていくことによって磨かれていくものもあるのではないかと期待してやっています。

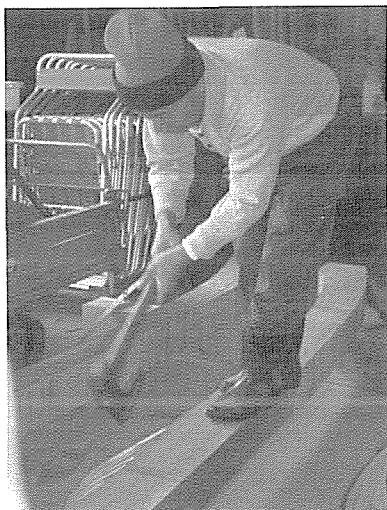
第一回目と二回目を二〇〇二年の三月と一月に行ない、能舞台を一棟ずつ修理しました。修理とはいっても、文化的な非常に手間のかかる仕事を長い時間やるということではできないので、どこか一部分に限って仕事をやって、それを技術を伝える場にしようということです。

足まわり―束の修理をした第一回目

第一回目の加茂神社の能舞台は、もともとは茅葺き屋根だったのですが、改築されて瓦屋根になっています。

伝統建築にふれるということで、とにかく建っている建物を調査しようとして、日本建築セミナーのプロデュースで行なわれた佐渡職人塾立ち上げに際し多大な支援をしていただいた静岡の設計者の増田千次郎先生のもと、調査をしました。このとき僕はまだ学生で、ひたすら図面を描いていましたが、松板があり、中も非常に立派で、使っていないのが不思議なぐらいでした。

束が貫の通っている部分で二つに割れてしまって、半分がとれていました、それを貫をいじめないように、表側を新材で取り継ごうということをやりました。熟練の大工さんから若手の大工さんまで一〇人ぐらいで寄ってたかってやるという、仕事として考えると効率が悪いものだったかもしれないですが、講習会ということで、指導にあたってくださった棟梁は丁寧な教えてくれました。油圧ジャッキで一度上げ、新材に取り継げるように残っている部分を加工しなければいけないということで、一度外しました。このときの理念は、地貫をいじめないで束だけを替えるということを、増田先生のコンセプトのもとでやったわけです。これをやるのに丸二日かかりました。お金に換算したら大変だなと思うんですが、非常に丁寧な仕事をしてもらいました(写真一〜五)。



写真一七 佐渡のベテラン棟梁が豪快に斧（よき）を振る。



写真一六 軒先に足場を組んでジャッキで上げて修理。



写真一九 折れて下がった軒先の様子。



写真一八 会場となった氣比神社の能舞台。

第二回職人塾の様子

第二回目は一回目以上に大工事で、真野町の氣比神社の能舞台の軒先の部分が折れて下がっていました。雨の問題もあると思うのですが正面側の軒先をかつこよく出すんですね。そうすると、軒先に荷重がかかって、耐えられなくなっていくか折れてしまったのではないかと思うのですが、実はよくあることらしく、三二あるなかでも幾つかこういう前に荷重がかかった状況のものがあるようです。これを直すとなると、普通、茅葺きの屋根を取っ払って直さなければいけないと思いますし、葺き替えるということなんです。今回は応急修理をやってみようということで、かなりアクロバティックな工事になりました（写真一六と一七）。

壁のない建物なので、差鴨居もたわんでいます。ここは「茅負（かやおい）」というらしいのですが、軒先にベニヤ板をあてまして、足場から油圧のジャッキで上げて、軒先の荷重を減らしておいて材木を取り替えるという仕事で、これを計四日間でやりました。

外してみると、外に転んでいますので、相当な力がかかったのだなということがわかります。新材にしななければいけないので、抜き取った茅負から型板をとるのですが、細い棒を使ってカーブをつけていくという作業です。埼玉で文化財関係を専門にやられている宮大工の棟梁にきてもらって講師を務めてもらったのですが、幾つかのチームになって、なるべくいろいろな手が触れられるような講義体制をとりました。

面白かったのは、型板は一個しかできないんです。それをどうやってコピーするのかとみていたら、釘を横にして打って行って、この上にもう一枚ベニヤをはめて、上からローラーをころころ転がすんです。そうすると、上のベニヤに釘の頭が刺さって、そこに点々と線がついていく。こういうコピーのやり方をこのとき初めて、「人に教えないんだよ」といいながらも教えてくれました。

埼玉の宮大工がやっていたら、俺もやりたいということで、佐渡の熟練の

プロ中のプロの仕事を見ることができた第二回目

佐渡職人塾

写真—10
第三回
職人塾
参加者
募集
スタート。

第3回参加者募集!

佐渡の歴史文化財の修理工事に伴って、伝統的建造物の修理工事に必要な職人の育成を図ります。本塾では、伝統的建造物の修理工事に必要な知識・技術を習得し、実践的な修理工事に従事できる人材を育成します。

◎開催 2003年10月18日(出)～10月22日(休)

◎場所 佐渡郡佐和田町 二宮神社境内

◎対象 18歳以上25歳未満の若年層(高校卒業程度)

◎費用 参加費無料(食費・交通費は各自負担)

◎修習内容

- 18日 修習内容①「文化財建造物の修理工事と活用」
- 19日 修習内容②「文化財建造物の修理工事・木工基礎」
- 20日 修習内容③「文化財建造物の修理工事/家屋修繕」
- 21日 修習内容④「修習内容④」
- 22日 修習内容⑤「修習内容⑤」



写真—11 会場となった二宮神社の能舞台。

第三回職人塾の様子(写真—10～15)。

棟梁が出てきて、いまはあまりやらない斧(よき)で製材し始めたんですね。足に当たってしまおうのではないかと心配になるぐらいの豪快な振り方だったのですが、昔やっていたということ、懐かしがってやっていました。「いまはなかなかやる機会はない」という話でした(写真—7)。

伝統的な道具ということを手斧で粗く製材するんですね。皆さん懐かしがって、楽しんでやっていました。このあたりは濃密な空間で、皆さん眼差しが真剣で、なかなか入っていけない状況でした。上(裏甲)と下(茅負)で緊結して、この設置面がきれいにいくかどうかチェックし、取り付けます。これもまた大変な作業で、とても素人が近づける状態ではなかったです。非常にきれいに納まっていると思います。

一回目、二回目は以上のようなことをしていました。ごらんになっておわかりのとおり、非常にプロの世界なんです。文化財の修理を何回もやって熟練しなければいけないようなプロ中のプロの仕事を公開してくれて、みんなやったわけです。

地域への定着を目指して第三回目—薪能を開催

ここまでは僕は大学生として参加していました。二〇〇三年六月に佐渡にいきまして、一〇月に第三回佐渡職人塾を私の企画でやるという話になり、プロ中のプロでなくても参加できて、何か活躍できれば面白いなと思いました。それで、「職人塾の地域への定着」という形にして、歴史的建造物の活用をテーマにしようと考えました。直したままで終わってしまうのではなく、夕暮れに薪を焚いてやる薪能をやって、地域の人たちにも佐渡職人塾で直した舞台で能をやったんだよとPRすることにしました。

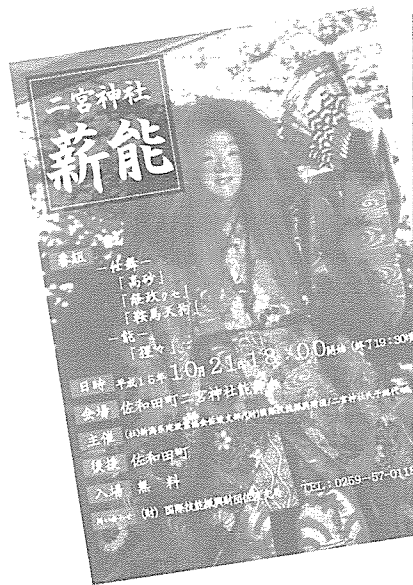
そして島内の職人さんをもっと重視しようということ、これまでも職人塾に参加してもらっていた地元の熟練の棟梁に教えてもらおうという形になりました。そして、建築系の大学生をもっとふやそうということです。みんな何も知らない大学生ですけれども、もっと参加できる場をふやそうということ掲げて始めました。

今回は二宮(にくう)神社です。明治の終わりか大正ぐらいのものだという話でした。建築年代は確定できていません。橋掛りもひどく荒れている状態で、とても能の摺足ができるような板ではないです。足元も簡単な継ぎ方で直していきまして、これまでに大修理といわれることはやっただろうけれども、非常に曖昧なやり方をしています。

屋根も、茅葺き屋根はむくりがつかなければいけないのですが、茅が減ってしまつて逆に反りがついている状態でした。中も壁が少ないのでトラスを入れていきます。下屋は荒れて、ほこりをかぶっていました。

これをなんとか職人塾で直そうということで、佐渡唯一の茅屋根職人の中川さんにお願しました。足場も伝統的なものを組んでくれと頼んだら、やってくれました(13頁写真参照)。

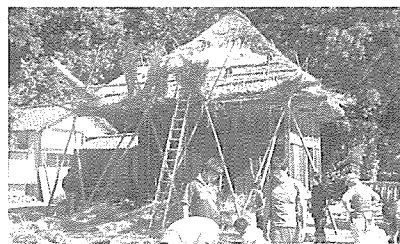
ただ、文化財関係の人にみせたら、「建物に対して足場を立てるとは何事だ」という話にもなり、板をあててフォローしました。非常に面白い組み合わせです。全部葺き替えるには茅が足りなかったもので、格好をつけて正面だけきれい



写真—12 修理が終り薪能の開催を待つ能舞台。



写真—14 茅葺きの修理の様子。



写真—13 伝統的な足場を組んで屋根を修理。

にしようということでもやりました。栃木県の株式会社・茅葺屋根保存協会に若手の茅葺き職人三人衆が参加してくれました。今回、その代表の方が「ぜひ職人塾に参加させてあげてくれ」といって送り出してくれたのですが、非常にありがたかったです。彼らの活躍でピッチも上がりました。中川さんも、佐渡では若い人は葺かなくなっているのですが、職業にしようと思ってる人がまだいるんだということでも非常に感動していました(写真—13、14)。

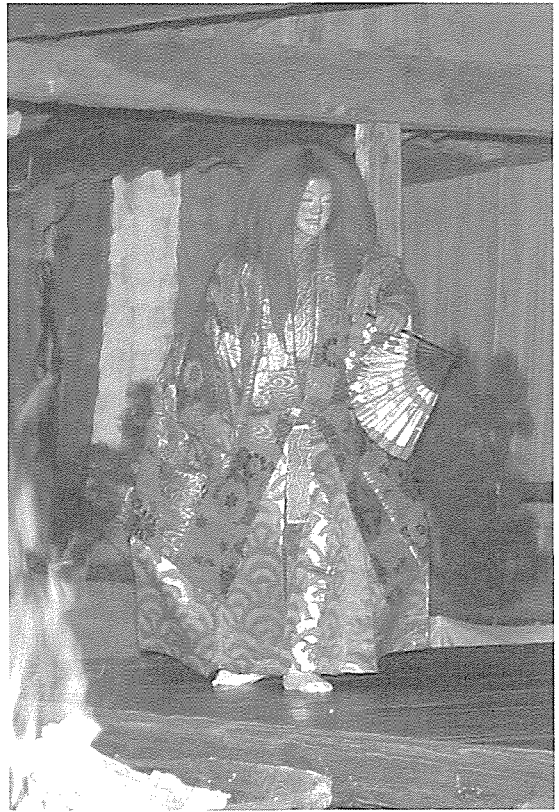
木工事のほうにいきますと、以前の修理で変な継ぎ方をしていたのですが、それを継ぎ替えようという作業です。油圧のジャッキをあてて取り外したらなんとホゾも何もない、載っているだけ、元は通っていた地貫をとってしまつて木でふさいでいるというありさまで、地震がきたら一発でアウトだったなと思うのですが、ひどい工事でした。

この状態で墨付けを行なつて、もう一つ新しい材を継ぐための加工をしました。ここは川上さんの独壇場で、「川上さんがやっているところは手が出せない。やっぱりすごいね」という話を他の大工さんたちがしていました。それでも学生は川上さんの手元役をしていました。そういうふうは大工さんの生の声が聞けるということ、そして大工さんたちにとつても、熟練の棟梁さんと一緒に仕事をするという機会も減っているみたいなんです。現代の建築現場ではなかなか仕事がオープンにならないということがあって、こういうのも試みとして面白かったです。

なかなかみる機会がないし、やる機会もなくなっているということで、「時間はかかったけど、楽しかった」という話で、職人さんが楽しかったと言うのでよかったです。工期に追われるとなかなかできない仕事です。

薪能は、看板も神社の関係者に書いてもらつて、迫力のあるものになりました。舞台らしくなってきたなという感じですが、提灯も借り物です。松の絵も借り物で済ませました。東京の能楽堂ではみることができない手づくり感がでて、提灯をぶら下げる吊り木の設置も学生がやりました。

心配だから地元の高校生にリハーサルで踊ってもらいました。少しぞうきんがけをしただけで床も見違えるように光り出しました。



写真—15 職人塾への理解と定着を願って薪能を開催。

地域から頼られる職人塾へ

このような活動を第三回でやったのですが、第一回、第二回とかなり評価が違って、地元の人に非常に喜んでもらえたというのと、職人塾の名前が少し認知されました。それで、束を一本、茅負を一本直すのよりは少し効果があるかなと感じ始めたところです。

今後、地域から頼られる職人塾になりたいということで、佐渡の方々の要求をもっと聞いて、地域の要求に応えるということをやっていききたい。そのコーディネート役をやればいいなと思っています。

佐渡への観光客も減り続ける一方なんですけど、佐渡は能の大成者の世阿弥が流された地ということもあって、ゆかりの地もたくさんあるので、来てくださる方を歓迎する仕組みの一助になればいいと思います。そして、島内外の交流をもっと進めたいです。皆さん熱心ですし、技術がおりるので、そのへんをもっとPRするということです。

佐渡は大学がないもので、一八歳から二四歳ぐらいまでの若者人口がござりいない。東京に出ていって帰ってこない。だったら、たくさん若者を呼んで、職人さんたちが健在なうちにいろいろなものを吸収しようと。佐渡の

職人塾によって、伝統的なものにふれながら地域を掘り起こすということを、大学生たちの力を借りてやればいいなと思っています。

大工の技にはまる

——建築家志望から伝統に関わる大工の道へ

岸本 耕



大工への道

東京育ちで、機械住まい育ち、なぜここに座っているのかなというぐらい、伝統というものにはかかわってきませんでした。大学に入って一年、二年のころまでは、いまだきのオシャレな建築家が好きだったんですね。そのうちにフランスの建築家、ジャン・プルーヴェを知ったのがきっかけとなり、日本にもそういう人がいないのかなと探しました。ジャン・プルーヴェはアーノルド・ポールの鉄工所で育って、小さいころは職人をやっていたわけですが、そういう人がやがて金属を自在に操って建築を建て始めるわけです。

雰囲気はだいぶ違いますけれども、それが後に僕の親方の親方になる田中文男さんという人だったわけです。金属ではなくて木を使うわけですが、丸太があれば何でもつくっちゃうという雰囲気がかっこよくて、さっそく訪ねました。田中さん自身は、僕が卒業するころには、設計の業務のほうに専念していたので、田中さんに教わった人たちが続けている工務店を訪ねました。「卒業したら大工をやりたい」という話をしましたら、すぐに「わかった」

というんです。あまりにも即答だったので、本当かなと思ひまして、ちょっと心配になって一年間アルバイトで通いました。その間は掃除をして、建てている現場をひたすら磨いたり、拭いて回るわけです。そういうことを学生の間には体験させてもらって、卒業してからその口約束は守られて入りました。最初の半年ぐらひは、また同じように掃除などが続いたのですが、半年後に始まった現場が埼玉にあるお寺の新築工事だったんです。この建物はすべて板倉になっています。柱と柱の間に板を落とし込んでいって、その板同士を一尺ピッチでダボでつないでいくわけです。建物全体の墨を付ける人が一人ではとても追いつかない規模でして、その板をひたすらつくり続けるというのが僕が初めて担当した仕事でした。

初めて担当するにはちょうどいい仕事で、横の長さで縦の高さだけだと仕事が進んでいくわけです。そのとき、建物をつくる時には必ず心の寸法があって、そこから柱の寸法を引いて溝の分を足す、必ず心から寸法を追うのだということに初めて学びました。

そして、失敗するまでは気づかなかったのですが、みんなは必ず「馬鹿棒」と呼ばれる棒をつくり、そこに心墨を書いて、幾つ足して、幾つマイナスというのを木に定規として書き込んでいくわけです。それをすること、必要以上に多くの目盛りをみないで済むから、間違いないわけです。始まって一か月ぐらひそのことすら知らないでやっています。計算機で足し引きをやっていたんです。機械で同じ寸法に一気に切っていきますから、膨大な量を間違えました。なんとか周りに助けられ事無きを得たんですが、その失敗で学んだのが馬鹿棒をつくるということです。

二年目になりました、初めて墨付けをする仕事をもらいました。お施主さんが蘭の花が好きで、その展示場をつくる仕事でした。

ここのお施主さんはちょっと変わっています、常に自分の敷地に職人がいるのが好きなんです。これも趣味のうちのひとつでして、普通の建物では面白くないので、板を落とし込むという条件が一つと、金物類をいっさい使わないという条件がありました。

普通、敷居、鴨居というのは、建物を建てて最後に造作仕事で取り付けるわけですが、この仕事は全部建込みでやっています。先に刻んで、上棟式の日にはほぼ完成しているようなものをやろうということです。建てるときも、ある程度組んでから起こしていくわけで、ほとんどそれで終わるので、プレファブなんです。

すべて四寸角のスギ材でやるという条件もありました。それを満たすためにぎりぎりといえはぎりぎりの構造でして、それを解消するために、野地板を斜めに張っていくわけです。基本的にこういう広いものは真ん中から屋根がたんでいくわけですが、それを野地板で外に力を分散していくようなやり方です。

ついでに縁台をつくるなどの施主との関わりあいがある現場で、こういう現場を「旦那場」というのですが、このとき初めて知りました。

このあと、新築を一棟、次の年には戦前の住宅の改修仕事を担当しました。

独立―出桁造りの町家の解体・移築に取り組み

その後会社を離れ、しばらくは、文化財の民家を解体・実測し、記録に残すという仕事をしていました。

やがていまのお施主さんから連絡がありまして、「家を建てようと思うのだけれども、取り壊す話が出ている同僚の家があるので、それを一緒に見にいってほしい」ということで、いきました。

それが埼玉県の吉川市にある建物で、その通り沿いには幾つか同じような建物が立っていました。出桁造りで、関東地方によくあるような雰囲気です。

この通りと並行してすぐ裏に中川があり、基本的には街道で栄えた町というよりは、水の輸送のほうが中心だったようなんですけれども、川沿いに街道のようなものがあります。その通り沿いにこういう町家がいまも幾つか並んでいます。そのへんのことを古い人に聞きますと、ほとんど関東大震災で一度なくなり、いまのは震災後に復興して建っているものだと思います。

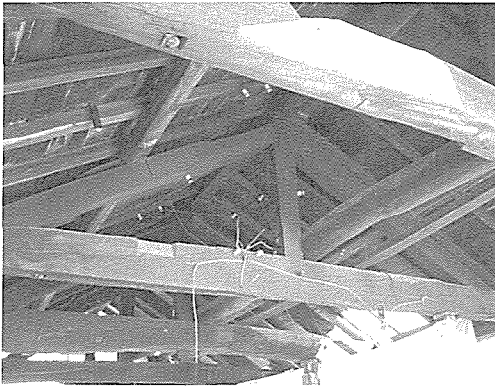
解体費用は二〇〇万円ぐらひという見積もりが出たんですね。そんなに負



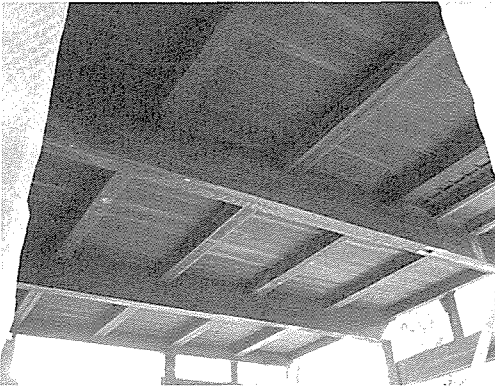
写真一16 移築中の町屋。正面四畳半、奥行き二間半の町屋。



写真一17 吉川の町並み。中川沿いの通りには出桁造りの町屋が残っている。



写真一18 小屋組。天井を剥がすと骨太のトラスが現れた。



写真一19 二階の床板が一階の天井である、根太天井。

担してまで解体・移築する価値があるのかという問題がありまして、後に天竜の石川木材さんに協力してもらいまして、材の価値を計算をしたわけです。この建物が良かったのは、主要な構造材がケヤキだったことです。一間ごとに通し柱が立っていて、せいが四五センチで幅が二四センチある胴差が、正面四間半ある端から端までありまして、そのへんの価値に期待して計算してもらいました。ケヤキは立米単価では出せないといわれたのですが、お願いして、少なくともこれぐらいはするだろうという金額です。マツもいま流通しているような材料に比べてかなり長さも材寸も太くて、ざっと計算すると八〇〇万円という金額になりました。

普通の住宅を建てるのに、材料費に八〇〇万もかけないんですけれども、二〇〇万の解体費で、それだけの価値のある材料が手に入るということです。「吉川の鯨」というのはお施主さんが考えたグループ名です。今回、工務店とかは特に入っていないくて、お施主さん自身が工務店のオヤジみたいなことをやっていて、自分でお金を計算して、施工する人間を選んで、設計する人間も選んでいます。初めて見に行った日に鯨を食べまして、名前の由来となりました。

これをつくった大工さんは端から端まで一本で通すというのが好きみたいで、関東大震災のあとで、反省があったかもしれないが、短い方向も一本の材料で梁が通っています。出桁造りの町家といえますと、当然、和小屋を想像していたのですが、外からみて母屋が斜めになっているのがわかって、天井をめくってみたらトラスだったわけです。いかにも大正時代に建ったような雰囲気があります。この中のつなぎも一本物で実にいいと思います。

材がすべて通しになっていますから、建方も解体も苦労するんですけれども、建ってしまえば確かにしっかりはしているだろうという感じはします。

この建物を解体し終わるころに地鎮祭をやりました。工務店を入れていないので、設備がないんです。体一つでやるにはどうしようかなと悩んで、自由に使える土地は移築先の現場しかないのです、まず下小屋づくりから始めました。住宅地で仕事をすること自体、苦情の処理やら何やらかなり難しいで



写真—20 解体の様子（正面）。商家の正面を飾る櫓の胴差。

す。

今回、頭を継いだ柱もあります。木目がわからないので、苦勞のいかいもありません。埋め木の作業をやっています。古色はいろいろやり方があると思うんですが、この建物の場合は墨汁の黒と朱墨と水でやっています。空拭きするとかなり光ってきまして、なかなかいいです。

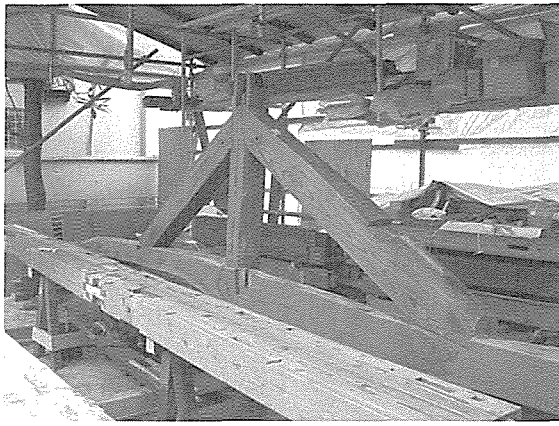
こうした工事の場合、押入れとか壁が多かったのを無くしたいという要求が出るのですが多いのですが、ここでもやっぱりそう要求されました。そうすると、貫穴がたくさん出てしまいます。埋め木をするとはほとんどわからなくなるんですけども、洗ったり直したりするのにどれだけ手間がかかるかという、今回の場合は洗浄するのに二〇人工、一般的な人工は二万円ぐらいだとすると、四〇万円かかっているわけです。埋め木して継いだり、色を塗ったりという作業に四〇人工かかっています。ですから、一般的な金額でいうと八〇万円ぐらいです。直すのに一二〇万円ぐらいかかるんです。建物をそのままの大きさで使うのであれば、決して高くはないと思います。

工事は、解体が今年始まったばかりです。もう少し完成していく様子を話すことができたらよかったのですが、事例の紹介はこれで終わりたいと思います。

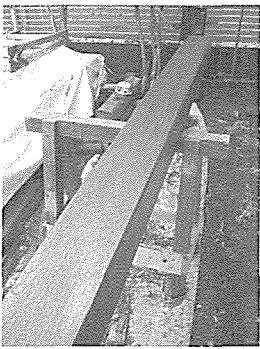
いまがはまりどきの戦前建物の改修

こういう活動を通して幾つか考えたことをお話しします。一つは、最近、戦前の建物の移築なり直しというのはよく聞くのですが、とてもいい題材だなと思っていて、古すぎず新しすぎないといえますが、特別に重要な文化財にもまだなっていないくて、かといって戦後のようにレベルが落ちてくることもなく、直したりするのはちょうどいい題材だなと思っています。ちょうどいま改修時期のようでした、当時の建物を直すという話は聞くんですけども、それでもやっぱりどんどん取り壊されていくようです。やる人はいるんでしょうが、周りにいないということだと思っています。

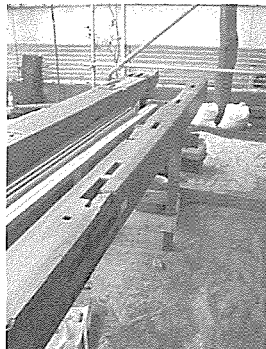
じゃ、そんなに特別な技術なのかなと僕なりに考えてみたのですが、いま



写真—22 トラス。実測のためにトラスを仮組みする。



写真—24 埋木処理をした後。



写真—23 柱の貫穴。壁があったところを無くすると、多くの貫穴が現れる。



写真—21 解体の様子(側面)。多くの通し柱で構成されているのがわかる。

やっているメンバーは、何十年もやっている人間ではないわけです。もちろん、何十年もやっている人はやる仕事も違いますけれども、それはどの分野の仕事も同じことで、決まてこういふ古いものを直すこと自体、特別に難しい仕事ではないと思います。どの業者であつてもやれるのじゃないかと思うんです。ただ、おそらく損をしたくないから慣れない仕事をやらないのだと思うんです。直そうと考えた人がそれなりの理解をもつていけば、それなりの手間も払えるわけで、なんとかさういふ方向にいかないかと考えています。

普通、請け負つて幾らということですが、今回の仕事は「かかり普請」でやっています、かかっただけ請求して支払ってもらうんです。だから常に気持ちに焦りがありません。手間が決まっているわけではないので、落ち着いて仕事ができる。お施主さんの要件に応じて変えていくことも可能です。これはなかなかいいなと思っています。

ただ、一方でデメリットがあり、お施主さんがリスクを負わなくてはいいないんですね。ひよつとしたら僕が完成させることができないかもしれないのですが、そのへんのゆとりがあるのが今回のお施主さんです。かといつて昔の大旦那のように「幾らかかってもいい」というわけではありません。目標となる金額と工期を設定して、それを達成できるようにみんなをやつていこうと、そういうちょっと変わったグループでやっています。

古いものと新しいものの間の壁をなくしたい

最後に、「伝統」は僕にとってどういふものなのか。大工を始めようとしていたころは、どちらかというと新鮮にみえて、最先端に感じられました。で、いまは、みんなが当然もつていべき知恵であつて特殊化してはいけないのかなと思っています。新しいものをつくつていてる人であつてももつていべき知識でしょうし、逆も同じことがいえると思うんです。古い木造をやっている人は同じ建築家のなかでもほかの分野の人とはあまり話が合わないというか、設計と施工の間もさうですけれども、大工と設計者はなかなか話

が合わないことがあるわけです。何か大きな壁があるのだと思うのですが、古いものと新しいもの間とか、設計者と施工者の間とか、なんとかそういう壁をなくしていくのが今後の自分の目標です。そんなことをいままでの仕事を通して考えていました。

「伝統」を知らずにはまっている

——民家に魅せられ、民家再生の道へ

北村 佐絵子



民家にはまるまで

私はもともと広島出身なのですが、民家再生をやりたくて、その第一人者である長野県安曇野の降幡廣信先生の事務所の門をたたきました。先生にはふられてしまったのですが、その弟子の川上先生の事務所（かわかみ建築設計室）に置いてもらえることになり、五年半ほどお世話になり、去年の夏に結婚退社して家庭に入りました。いまは主婦の仕事をしながら、かたわらで図面を描いています。

まず、「伝統って何？」というテーマについてですが、「伝統を担う若者に意見を聞きたいから何か言え」といわれまして、なかなかピンとこなかったのが正直なところです。私って伝統的なことをやっているのかな？と。身の回りには職人や同じ立場の設計士に聞いても、自分たちは伝統的なのだと意識している人のほうが、案外少ないのではないかと思います。民家再生などの仕事に携わっている人間は、小さいころから伝統にふれ、昔ながらの伝統とか習慣、古い町並みに親しんできて、自然にそういう仕事に就いているのだと第三者の方からは思われがちなのですが、私を含めて若い設計士さ

んはもともとそういうものにふれることなく育っているんです。だから、伝統的な基盤が希薄な人が少なくない。

私も広島の高陽ニュータウンという、当時、日本で最大級のニュータウンに育ちました。二戸連という当時すごく流行った設計の家ですが、同じ平面の建物が回りに八〇軒も建っています（写真125）。ニュータウンの中に小・中・高校が並んで建っていて、そこを順当に進学し、子どもの頃の私の夢は、ニュータウンのいちばん中心街にあるスーパーのレジのおばさんになろうということでした（笑）。

その後大学の建築科に進み、鉄、ガラス、コンクリートの設計を学びました。薄くて軽くて飛んでいっちゃうような建築ばかりをやっていました。それがいちばんだと教わっていました。卒業計画は、丹下健三先生が設計された広島平和公園の中に商店街をつくるという大それたもので、コンクリートの小さな四角い建物を数十個、公園内に半地下で埋め込むという計画でした。当時はそんなことを考えていました。私の周りには同じ世代の設計士さんたちも、たぶんみんなこのような地盤で育ってきていると思うんです。

そして学生時代に嫌々参加した民家調査で、初めて町家に出会いました。これを見てとても驚いたんです（写真126）。伝統的な経験を全くせずに育ってきているので、民家の研究者にありがちな懐古的な思いというのはまったくなく、懐かしいとかそういうことは全然思わなかったですね。技術的なすごさというのも、まだ不勉強だったのでさっぱりわからなかったです。ただ、屋根裏とか押入れの奥とか、まっ暗い吹抜けの、そういうみえないところに

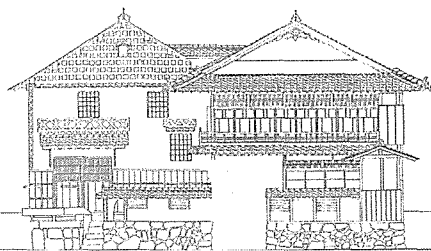


写真126 学生時代に出会ったはじめての町屋。



写真125 ニュータウンの二戸連住宅。

膨大な時間と手間がかかっている、そこから幽霊でも出てきそうな建築です。学校では教わらなかったことなので、これは逆に新しい空間だというふうに感じました。

大学で設計の先生に教わっていたのは、「自分が美しいと思ったものはなぜ美しいのか考えなさい」ということだったので、これがなぜ美しいのか考えようと、これを究めることを志したわけです。こういう建築をそのへんの大工のオヤジがつくったというところがすごく悔しかったんです。だったら自分にもできるはずだと大いなる勘違いをしまして、そのまま底なし沼にまっつきました。

大学、大学院とそのまま民家ばかり勉強していたんですけど、底なし沼の底が全然みえないので、じゃ、日本一民家ばかり扱えるところに就職しようということで、古民家再生の事務所を希望して、そこへ勤めることになりました。

これからお話しするのは、かわかみ建築設計室で勤めていた頃担当した物件を例に、民家再生の仕事をご紹介したいと思います。おにも戦前の民家を修復して元の状態に戻しながら、現代生活に合わせて水回りなどは新しいものに入れ替えるという工事が一般的に「民家再生」と呼ばれています。

民家再生の現場

〈一般的な方法〉

まず「魂抜き」といって、民家にもともと住んでいる神様に工事をするからどいてもらうという儀式をします。私たちの設計ではこういった儀式を、地鎮祭、上棟式も含めてきちんとやるようにしています(写真18)。

以前バブル景気のころは、ほとんどの民家再生の場合は全解体していたんですが、最近では費用にその余裕がないので、壁を全部落とし、骨だけ残して、基礎工事をこの状態のままやるというのをします。土台から畳上端までとても高くできているのが通常なんですが、設計上高すぎるので低く抑えると、土台が土間コンに埋まってしまう状態になることもあります(写真17)。

黒くなった古材は、クレオソートのような薬品を使って落とすのが主流で、ごんごんとすつかり落としちゃいます。

建具も元からあったものをできるだけ使っていますが、写真の家の場合は、親戚の方々が自分の家を壊すときに建具だけ残してあったので、親戚じゅうから建具が集まりました。

この現場では床の間に大きな丸い窓が開いていたはずだと親戚の皆さんがおっしゃるので、痕跡を探したのですが見つからず、設計側で改めて位置を考えて開けました。お施主さんは村のお宮の宮司さんで、儀式のときは恭しくこの窓を開けると、お宮が正面に見えるという仕掛けになっています(写真132)。

お施主さんは先祖代々この家に住んでおられて、家自体は江戸時代のものじゃないかといわれています。明治期に大火で村のほとんどが焼けてしまつて、この一軒だけが残った。そんなことから壊すに壊せないで、どうしたらいいかと悩んで所長のところに話をもちかけてきたのです。

民家再生のお施主さんは、民家の歴史とか価値を知っていて、積極的に残そうと思っている場合はとても少ないです。ご先祖とか親戚の手前どうしても壊せない。しかし、寒いし、無駄に広いし、使い勝手が悪いし、どうしようもなくなつて最後の救いを求めにうちのような事務所を訪ねてこられるわけです。だから、デザイン能力を買われてということではなくて、うちだつたらなんとかしてくれる、助けてくれると思っていらいっしやるわけです。お施主さんにとつての伝統というのは、背中にべつたり背負われているもので、お施主さんには逃げられないものなのじゃないかと思います。

木部の塗装はほとんどオイルステインを使っています。何種類も混ぜて微妙な色合いを出します。家々によってみんな色が違いますし、施主の好みもあります。塗装は、設計上いちばん難しいところで、塗装屋さんとのケンカはしょつちゅうです。今回のシックハウスに関わる基準法の改正で同じ塗装を使えなくなりました。ということは、問題のある塗装をいまままで使ってきたのかなと、初めて意識したのですが……。



写真-29 古材の洗い。

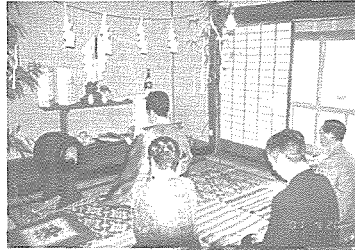


写真-28
魂抜き儀式。



写真-27 土間コンに埋まった土台。



写真-32 お宮を見る円窓。



写真-31 古色塗り。



写真-30 既存建具をできるだけ使用。

左官はほとんどがボード下地で、外部はラスモルタルで、その上に薄く漆喰を塗るといふ「なんちゃって漆喰塗り」(笑)、そういうふうな工事をやるのが通常です。壁にはタイベックも貼りますし、アルミサッシも使います。キッチン、お風呂など、設計士の力量が問われるところですが、ほとんどはシステムキッチンとユニットバスを入れます。それにかけられるお金を別の場所でおおうという考えで、水周り設備はそういうものを使う場合がほとんどです。

ごく一般に「民家再生」と呼ばれている、工事はだいたいこのような形で仕事を進めるんですが、二年前、ちよつと変わったお施主さんに出会いまして、その工事経過を説明します。初めてやったやり方です。

〈始めるの手法Ⅱ昔のやり方でやった民家再生〉

ここはかつては蔵が七つあったといわれているすごく大きな屋敷なのですが、右も左も崖地になっていまして、ある日突然、蔵の一つと主屋を残してそっくり崖下に落ちたそうです。それで、もともとの家族の方々は、さすがに住めないとい逃げ出しまして、でももったいなくて壊せないで、そのままの状態ですり出されていきました(写真-33)。

田舎暮らしを求めて大阪から信州にやってこられた方が、一〇年ぐらい空き家だったこの家を買われて、工事をやることになりました。こういうふうには田舎暮らしに憧れて県外からこられてこういうものを修理するというのは、実は初めてだったんです。

極端に予算が少なく、平面間取りはほとんどいじっていません。歪みゆがを直すので精一杯でした。お風呂・便所部分だけを増築しました。お施主さん自身が無農薬農業やパーマネント・カルチャーの専門家で、自然志向。安全に燃やせない材料はできるだけ使わないでほしいという要望でしたので、合板集成材、接着剤を使わない、壁は土壁、断熱材は羊毛、畳は藁床、塗装は施主さんが柿渋を自分で塗りました。

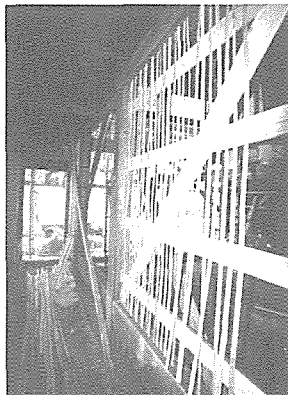
崖に土台ごともっていかれそうになっていたので、一部分だけ基礎を打っています。通常のコンクリートの土間基礎はやりませんでした。たたきの土



写真—36 施主自ら柿波を塗った床。



写真—33 崖の上の民家。



写真—35 ホチキスで止めたなんちゃって竹小舞。



写真—34 基礎工事は一部にとどめた。

間がとてきれいに残っていたので、壊すに忍びないということもあり、どうしても必要な部分だけに基礎を入れるという方法をとりました。

昔あった床組をそのまま使い、接着剤を使わないで床板を張るので、やっぱりギシギシしてしまうんです。それが大工さんは気になって気になって、眠れないそうです。

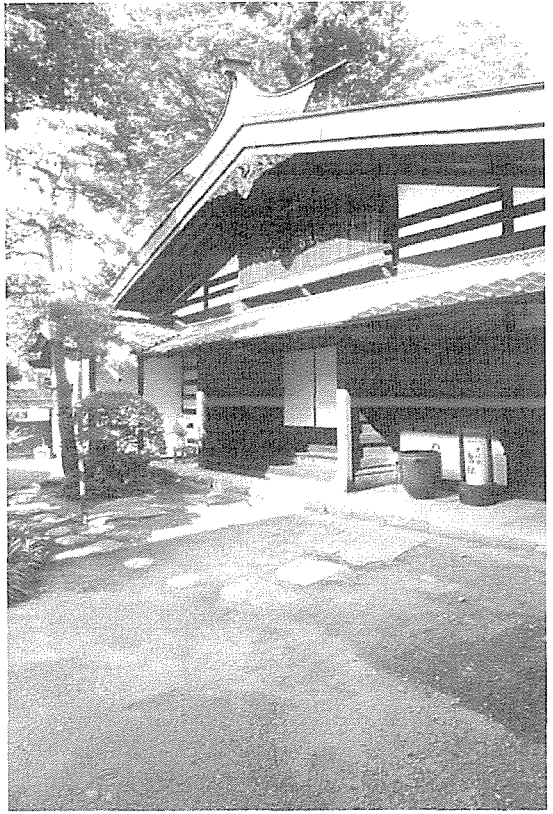
「土壁を、竹小舞で」とお願いしたら、竹をホチキスで打たれてしまいました。あとから聞いてわかったことですが、竹小舞というのは、「信州ではお上がやることで、自分たちはやらないんだ」といっていました。葦を組むのが普通なんだそうです。その上から土を塗っていききました(写真—35)。

職人さんにとって、昔のやり方でやったほうが経験もあるし、実績もあるので、自然志向にも一石二鳥でいいのじゃないかということでした。昔は普通だった」と自慢げに説明をしてくれたりとか、新建材を使うより施工精度が悪いのをずっと気にしていたり、「あの現場は大変だった」と別の現場で愚痴っていた職人もいました。

職人は、「伝統的な工法」というふうにはいいません。「昔のやり方」とみないっています。手間とか精度を考えると、必ずしもいい方法ではないと考えています。ただ、昔のやり方でやると、職人それぞれがちゃんとやらなると納まっていけないので、やり甲斐はあるようです。目つきが違う。職人自身は自分たちが伝統を担っているのだという意識はほとんどないように見受けられます。私はこういう職人の手の中にすでに宿っているのが伝統なのではないかというふうに感じるんです。

信州には「本棟」という伝統

民家再生の工事、設計をやる事務所は、とかく民家再生ばかり取り上げられがちで、それ以外にやっていないように思われるのですが、民家を直すのが五〇%、まるっきりの新築が五〇%と、だいたい半々ぐらいはやっているわけです。



写真—37 信州特有の民家の形「本棟造り」。

五年半、かわかみ建築設計室で働いたんですが、新築の場合、どうも設計方向にある一定のルール、どうしても無意識のうちにある伝統の意識というものがあるのではないかと最近発見したのです。それについてご説明します。

「本棟」といわれる、特に松本平に多い民家の古いやり方があります。妻入りで妻方向がとても大きく、八間×八間などの大きい平面に一発で屋根をかけたまま、緩い勾配で、太い破風と、「すずめおどり」という棟飾りを付ける習慣があります。なるべく屋根を大きく、妻を大きくみせるというのが信州ではカッコいいとされているやり方です（写真—37）。

新築であっても、やっぱりその面影があります。たとえ桁よりも梁のほうが長くなっても、妻入りの大屋根をかけようとするとするんです。川上所長は、先祖代々信州人なんですけれども、「松本平の山や空には本棟がいちばん似合う」といっています。その証拠に、信州の方が、横浜で成功されて、「横浜で本棟を建てたい」とおっしゃったんです。「本棟は松本にないとだめだ」というのが川上所長の持論で、猛烈に反対してやめるように説得していました。

茅葺きでもきれいな民家であっても、「おじいちゃんの遺言で、どうしても本棟に改造したい」といって本棟に改造したということもありました。本棟が信州にたくさん建った明治時代に、茅葺きの民家を本棟に改造するということが多発していたということも聞いています。

現代でも信州人には、すずめおどりの形については非常に細やかなこだわりがあって、角度とか羽の広がりぐあいとか、設計段階でもこっぴど度何度もスケッチをおこしたりします。広島育ちの私としてはとても理解に苦しむところで、別になくたっていいのじゃないかと感じるのですが、信州人のこういう気持ちや伝統のじゃないかと思うんです。土着的で身近なものというふうに感じました。そういうふうになると、私たち設計者の無意識の部分のなかに、実は伝統を担っている部分があるのじゃないかと感じます。

古民家に住んでみて

私は民家に住んだことがなかったので、お施主さんの気持ちを体験しようということもあって、一〇年空き家だった民家を、結婚を機に借りることにしました。戦後につくり加えられた部分をみんな取り、予算がなくてできなかったところは知り合いの大工の卵と建具屋の卵に頼みまして、直してもらいました。屋根の一部は自分で葺きました。ただのせているだけなんですけれども、これがなかなか大変でした。左官も自分でやったのですが、やっぱりとっても難しかったですね（写真—38、39）。

実際に民家に暮らしてみようと思ったのは、すごく寒いですし、土・日の休みは雨漏りとか家や庭の手入れでほとんど終わってしまうという生活になってしまします。でも、それはそれほど大きな問題には感じられません。やっぱりいい民家は時間とか四季とか、そこに美しい一面があり、そういうのが生活をしていても楽しいですね。

ただ、もしこれが借家ではなく自分の家だったらと思うと、とても怖いんです。自分も、先祖も未来も、ずっとこの土地と家にしばられているという不自由感。伝統ってその家にとりついているもので、とても重いものなのじ

やないかと思えます。でも、肩の力を抜いて、あるときは利用して、あるときは改めて、そういうふうにつき合っていければ、伝統というものも毛嫌いされないで、うまくつき合っていけるのではないか。古い家に暮らしてみても、そんなふうに感じました。



写真—38
私が借りている
古民家。



写真—39 自分で瓦葺きも。

デイスカッション

中谷（司念） 「伝統」は非常に柔軟な言葉のようで、さまざまな意見、さまざまなアプローチが出てきたと思います。話のとっかかりとして、それぞれの方のお話しに対するご意見、ご感想をまずいただいて、そこからキーワードを幾つか拾い出してみたいと思います。

平原 能舞台というのはパブリックなものなので比較的にかわりやすく、僕はそれを題材にさせてもらっているわけですが、住まいづくりに関しては、

佐渡では地元の職人さん、工務店さんがやっておられますので、北村さんがやられているようには、なかなか入っていないところがあって、住まいづくりは楽しそうだとは思いますが、技術的にもなんとなく違うような気がしますね。

能舞台の場合はそれほど細かい設備があるわけでもないですし、納まりがどうこうという話もそれほどないわけで、いま私たちは「昔の技術」を楽しんでやり始めているところがあって、基礎的な知識を得るには能舞台が非常にいい題材になっていると思うのですが、北村さんも、岸本さんも、お施主さんがちゃんとして題材になっているのはすごくうらやましいとは思っています。

岸本 平原さんの職人塾で、三回目から薪能をやるようになったことはものすごくいいなと思いました。建物を修理するだけで終わらなくなってきている。佐渡じゅうからすごい人数が集まるんですね。小さな建物一つであれだけの人間が集まるのはすごいなという印象をもっています。

北村さんに関しては、僕がいる地域と比べて、建物の量と質がいいというのはうらやましく思いました。設計者として考えているところと僕が考えているところとずいぶん違うなと感じたのは、古色についてのことで、いちばんもめる大事なポイントであるということだったのですが、僕がやっている現場では古色は個人に任されていて、ちょっと黒いかな、ちょっと赤いかなといったながらやっている感じなんです。カラーサンプルがあるというものはなくて、まさにそこが大きな違いを感じたところです。

北村 平原さんの佐渡職人塾は、最初は大工さん中心のすごく細やかな技術であつたり、それに対する追究をかいま見るとい塾。二回目、三回目と回を重ねるごとに、学生や一般の方、建築に対する知識のそれほどない人たちが集まってきて参加しているということ、なおかつそれをとても楽しんでいくというところは、とても新鮮で力強いものを感じました。建築に全然関係のない人も、伝統とか、技術的なことに巻き込んでいいのじゃないかと感じました。

岸本さんの町家の再生も民家再生といっていると思うのですが、私たちが長野でやっている民家再生はちょっと画一的なところがあって、同じようなやり方を繰り返している。きょう岸本さんのお話を伺うと、伝統的な建物を直していくという技術だけでも個性があるのじゃないかというふうに感じました。私たちとはやり方が違うし、私たちとは注目が違う。それをみせていただいて、すごく新鮮でしたし、勉強になりました。

中谷 まず、いちばん面白かったのは、伝統というものが皆さんにとって「新しかった」ということですね。そういうふうに考えていいですか。

岸本 僕はそうですね。

平原 基本的にはそうですね。

北村 まったくそのとおりです。

中谷 そうなってくると、伝統というものが単に昔のものを守っていく以上の存在であったということがわかるわけです。皆さんの話から、三つ重要なテーマが出てきたと思いますので、それぞれに関してご意見をお聞きしたいと思います。



まず一つは、平原さんのお話にあったような、共同体とか地域の問題にどのように取り組むかが重要であるということです。

それから、岸本さんのほうは、技術の問題が非常に大きかったと思います。つまり、伝統技というのはすごく難しいものだというふうな性格化がはびこっています。実際にはやってみると簡単だったり、あるいはまったく別のやり方がある。そういったことまで含めて伝統といえるのではないか、という話があったような気がします。

北村さんはアグレッシブ（攻撃的）なのですが、伝統などというものはむしろ日常的なものであり、無意識の型のようなものではないかということですね。つまり、伝統というほどのものでもない、日常性というか、でもそれはとても大事なことなんだよ、ということ最後におっしゃられていたような気がします。

そういったことで、〈共同体・地域〉〈技術〉〈伝統の日常性〉、この三つに關して論点をふくらませていってみたいと思います。

〈共同体・地域の力〉

「旅のもん」が頑張り、地元の力を呼び覚ます

平原 共同体・地域の問題。能舞台が使われなくなった背景はまさしくそこにあるわけです。能舞台は神社の境内にあって基本的にはお祭りの神事としてやるわけです。神様への捧げ物として能をやるわけですが、それは能をやっている人だけでは守れなくて、「能をやろうや」と言う人が



いないとだめなんです。能をやっている人が「能をやろうや」と言っても、敷居が高くなって、能をやっている人たちと普通の共同体の間には微妙に差があるんですね。地域リーダー、地域のオピニオンリーダーみたいなものが昔はいたのだと思いますが、いなくなってしまうようですよ。

能をやる演じ手だけではなくて、神社の氏子総代さんクラスの方が芸能好きで毎年「能をやろうや」と言っているところは続いているわけです。僕は職人塾で建築の技術論の話をしたのですが、それよりも共同体・地域のほうが大事なんじゃないかと最近思い始めて、建築にとっぴり寄るのではなくて、地域の伝統的な共同体を刺激するような活動に変えているところです。

北村 「やろうや」という声掛けの立場の人は、地域の中からという場合もあると思うのですが、外からということも……。長野もそうなんですけれども、外からくるとわりと嫌がられがちなんです。それをどういふふう佐渡では受けとめられているのでしょうか。

平原 佐渡では、外からきた人を「旅のもん」と称します。非常にオシャレな呼び方だと思うんですね。「よそ者」といわれるよりは、「旅のもん」といわれたほうがいい。佐渡は島国で昔からどちらかという閉鎖的ではあったのですが、幕府の直轄地であり海運業が盛んでしたから、外からくる人は多かったはずなんです。能も、世阿弥が流されたというのも意味があるかも

しれないけれど、おそらく江戸や京都の趣味人が持ち込んだもので、それが民衆に広まったのだと思います。外からくる文化というのは、佐渡の人たちも、「旅のもん」というぐらいですから、新鮮に感じて、毎回外からくる人に対して意見を求めるところもあるのだと思うんですね。

今回の職人塾の場合は、僕を含めた佐渡支局が「職人塾」という名前を使って薪能をコーディネートしたのですが、今回はまさに「旅のもん」がやった仕事ですね。

で、僕はいまのところは、外から刺激をして、中の人たちが「そんなものじゃないだろう」ぐらい押してくるのを待つというのがいいのじゃないかと思うんです。たぶん刺激を与えないと、復活ということにはならないと思います。それが正直なところですよ。

岸本 もともと地域の人たちはどちらに興味があるわけですか。「あそこの能舞台が壊れそうだから、直してほしい」という意見が多いのか、それとも「最近、能をやっていないなくて寂しいね」と、どちらのほうが中心なんでしょう。平原 その話僕が実感している問題で、能舞台に関して要求がどこから出てくるかというと、舞っている人から出ます。能をやっている方はやっぱり使いたいんです。地元の目の前にある能舞台がさびれていくのは非常に困るし、それが復活してくれば、自分たちはそこで練習できるわけで、能をやっている方たちは薪能をやりたいんですね。

いままでは趣味をもっている人が披露する場がなかったから、地元の人たちからも「みたい」という要望が出てこなかっただけで、職人塾で薪能をやったあとは、「今年もやって毎年の行事にしたいね」とやっと住民のほうからも声がきたという形です。

中谷 一回目、二回目の職人塾では、一つの建物を直すということに関してそれは素晴らしい技術だといっても、閉じていた感じがしました。しかし三回目になると、「学生がやってもいいか」みたいな線になってきましたよね。これはすごい重要なんじゃないかという気がしたのですが、どうでしょう。

平原 一回目、二回目のプロデュースは日本建築セミナーがやったんですね。古いものを残す、残すからにはもとのまま残す、もしくは昔のものに復元する、新しい材料は極力使わない、古い材は埋め木してでも使う、というのが文化財のセオリーだと思うのですが、そのテーマを追いしました。しかしここにこだわりすぎると、埒が明かなくなると、あのようなイベントにはならなかったと思っているんです。

誰でもできるというのは言い過ぎですが、学生さんたちは結構器用で、場だけ用意して、「ここをやってください」というと、職人さんにくつついてもやるんですね。興味のあるものが目の前にあると、案外みんなやるんです。すごく元気よく活動していました。そのへんを引き出せただけでも面白かったと思うんです。そういう形で、なんだかわからないけれどもやってみたい、という人を集めていくのも、伝統の裾野を広げて守っていく、何か続けていくための手段なのじゃないかと思います。

〈技術における伝統の問題〉

見た目だけ伝統的にするのはルール違反

中谷 伝統技術には、非常に専門的なもののほかに、一般的な日常の技術もあって、両方必要だというふうに考えるべきだと思いますか？

平原 そうです。

中谷 たしか田中文男さんが「堂をつくる技術・小屋をつくる技術」という文章を読みましたよね。

三浦（こうだ建築設計事務所）田中文男さんは、「技術には二つの系譜がある。その一つは、掘建ての技術から始まった小屋の技術で、ごく普通の素人の人たちが家をつくっていくために必要な技術。もう一つは、それがどんどん高度になって貫などの技術が発展して、プロの職人集団が加工してつくっていく技術。そういう二系統がある」ということをおっしゃっています。それはどちらも並行して伝統として日本の技術体系のなかでは伝



承されてきたと田中さんは論理を進めていって、その二系統の技術で技術体系の通史をつくらうとされているのです。

ただ、小屋の技術というのがあるとき突然途絶えてしまう。それはちょうど近代になったからかもしれないと思うのですが、代表的なのは「結」なんかの技術、そういう共同体でつくっていく技術があるとき突然途絶えてしまったという解釈をする。最後に残っているのが丸太の技術で、田中さんと建築家の安藤忠雄さんが隅田川で「唐座」という仮設建物を足場丸太の技術でつくったのが最後かもしれないのですが、そういう二つの技術系列からとらえているんですね。

そういう観点からすると、同じ伝統のなかに、一つは、大工さんのしつかりした技術として伝承しなければいけないものと、もう一つは、そうではなくて、隣り同士でやっちゃおうよという非常に気楽な技術があると思うんです。いまその二つの技術がごっちゃになりながら「伝統」ということが語られているのではないかと気がします。

中谷 岸本さんにつなげようと思ひまして話を振らせていただきましたが、専門的な技術のほかに非常に日常的なものがあって、そういったものがすべて混濁化している状況で、エンジニア大工としての岸本さんは、それをどういうふうに整理していくかといったことをお聞きしたいと思います。

岸本 小屋をつくる技術と堂をつくる技術というのは、正直なところ、僕自身もごちゃ混ぜになっているかもしれないです。日ごろ仕事をしていてあまり差は感じないんですね。たとえば民家を直しているときとお寺の仕事をやっているときと、明確な違いというのはあまりわからないというのが正直なところですよ。

中谷 逆に、これまで岸本さんが教わった大工さんの技術の考え方と、岸本さんが違うようなところはありませんか。

岸本 違うということではないですけども、いま一つ思い出したのが、仕事を始めたところに、田中さんが教えた人ですけども、僕が前にいた会社で棟梁を張っていた人の言葉ですごく印象に残っているのは、「お寺のほうか

簡単なんだ」という話だったんですね。僕はお寺をたくさんつくった人間ではないので、正確には理解していかないのかもしれませんが……。まとまらないのですが、そんな話を覚えていきます。

北村 私は設計の立場として職人さんの技術に関わっているんですけども、職人側からすると、高度な伝統的な技術を、どこかで置いてきちゃったようにみえるんですね。だから、一般に注文される技術というのは、昔の技術は別に必要なくて、結局そういう技術を忘れそうになっているところがあるんですね。

「昔のやり方で、棟梁が親方から教わったやり方でやってくれ」というと、俄然やる気を出すというか、はたからみても、職人さんが楽しい、面白いと感じてやっているのじゃないかと思うんです。つくっているほうの人間として、そういう技術的なところを、現在の在来工法でそこいらに建っている建物の技術と、伝統という技術と、現場にいてどういうふうに感じるのでしょうか。

岸本 伝統的な技術を「堂の技術」という言葉でわざわざ差別化しているような感じもするんです。いま一般的に行なわれている技術が簡単なかという点と、あまり変わらない点と、大きく違うのはかける時間だと思っただけです。たつぷり時間をかけるだけの環境をつくれたかどうかの違いにすぎないかと思っただけで、わざわざ閉ざしてしまう壁のようなものはないほうがいい。

中谷 では、簡単な例を出して皆さんのご意見を伺いたいと思うのですが、岸本さんの手がけられている吉川の町家で大正期のトラスが使われていましたよね。僕は民家にトラスが使われていた状態は「伝統的な技術」といいと思うのですが、どうでしょう。

岸本 僕も初めてあの小屋組をみたときには、新しいものだとは思わなかったです。ものすごく時代性を感じた。あれをつくった人は、出桁造りで町家をつくりたいのに、トラスを使ったわけですね。なぜトラスの要求が出てき



たのか……難しいですね。伝統的だとなつてくるのがどの程度の時間が必要なのか……。

三浦 田中さんの仕事、たとえばさっきの埼玉のお寺はいかにも伝統的な雰囲気をもっているわけだけれど、あれには板倉が入っています。板倉はよく考えてみると、技術としてはさっきのトラスと同じように、昔からあった技術ではない。けれども、いかにも伝統的です。

それで、田中さんの仕事は、非常に合理的な、ある意味ではプレファブリケーションをやっているような仕事で、最先端の生産システムをとっていると思いませんか。さっきその質問をすべきだったと思うのだけれども。

岸本 できあがったものが伝統的であつても、実際につくっていく過程というのは、たぶん想像している以上に現代的であると思います。そうすると、できあがったものが伝統的だと感じるのはなぜなのかというのは、ますますわからないんです。

中谷 北村さんのお話で、竹小舞をホッチキスで打ちましたよね。あれは伝統的という感じはありますか。いや、違うと思いますか。

北村 あれは竹小舞のふりをしていただけ、やつぱり「なんちゃって竹小舞」なんですよね。伝統的なふりをする、伝統的なことを真似ようとしているところが伝統的じゃないと思うんです。積極的に竹小舞よりいいと思つてやつていけば、それは伝統的だと思うのです。

平原 僕が能舞台を修理していて思うのは、当初つくった人の意思をまず尊重する。「伝統」というとまた難しいのですけれども、そこは真摯に受けとめる、ということですよ。

「伝統的建造物」というのも何か名前がおかしいんですよね。やつぱり「歴史的建造物」なんです。どこの時代も歴史も歴史なわけですし、そのほうが言いやすいですし、出桁とトラスが一緒になつてきているというの、あるとき設計者の思いとその歴史が合わさってきたものだと思うので、そのときの人の思いを真摯に受けとめるということがまず伝統の始まりかなと思います。

中谷 僕は実は正反対のことを考えていて、つくった人がどう考えたかというの、推測はできるけれども、最終的にはわからないですね。むしろそういった訳のわからないことがいっぱいある状態を、現在の限りある場所からなんとかしてわかるようにしようというのが伝統的意識だと思つたんですね。

結局、その新しく使われる技術が昔のものに合うか合わないか、要はマッチの問題なのじゃないかという気がするんです。つまり、出桁にトラスを載つけるといったことが構造的に、普遍的にこれは妥当なものだというのがあるから、みんなそれが伝統的にみえるだけであつて、竹小舞にホッチキスというのは、普遍的なセンスとして良くない。いかがですか。

北村 要は、美しいか、美しくないかということがあると思つたんです。ホッチキスで止めた竹小舞に土を載せていくと、最終的にはラス下地でつくった漆喰の壁と同じようなできあがりを見せるわけです。見栄えはほとんど変わらないですが、それがどんな風雨を受けて時間がたつていくと、やつぱり本当のやり方、昔から伝えられてきたやり方でやるほうが理

かなつていくところがあるんです。

やつぱりラスボードでつくった土壁というのは、一〇年もすると壁のチリから雨漏りが始まっちゃうんです。それは土じゃないから雨漏りがするんですね。本当に竹を組んで土でつくると、土が水を吸うのでそういうような失敗はないわけなんです。だから、そういう失敗を時間をかけて繰り返してきているわけで、その表面的な結果がいま伝統的技術として私たちに伝えられてきているのだと思うんです。だから、それを考えないで表面だけを、見た目だけを伝統的にしていくかどうかというと、やつぱり無理が出てくると思つし、建築をやつていくうえでルール違反なのじゃないかと感じます。

「伝統における普通さ、日常性の問題、あるいは無意識の型」

「美しい」かどつかが鍵

北村 伝統というものが身近に、日常的にあるということですからけれども、住



まい一つつくるときに重要なのは、私たち設計士とか大工さんではなくて、それを建てようとしている施主側に非常に重いところがあると思うんです。

だから、施主がもっている日常的、土着的な伝統感みたいなものが裏側にはあって、それが最終的に設計士の伝統になり、技術者の伝統になっていくものだと思うんです。だから、建築の関係者だけで済むものではなくて、施主になるような方々にもこういう意識をもってもらいたいと思います。

中谷 平原さん、そういうったものは佐渡ではまだ残っていますか。

平原 佐渡で一年生活していると思うのですが、そこはかとなく残っているという感じがあって、新能をやったときに、シテの方が舞台上に登場するときに、控室から幕を上げて橋掛りに出てきた時点で拍手をしなくて、本舞台上に足がかかったあたりで拍手をしたおじいさんなんです。僕は出てきたときに拍手してしまったんですけれども、何人かのおじいさん方が本舞台上に上がろうとしているタイミングで拍手をしたというのをみて、おや？と思ったんですね。あとで話を聞いてみると、「それが昔からある見方だ。残っている型だ」という話でした。

体に残っているものがあって、しばらくの間見る機会はなかったけれども、体から出たんだなという気がしまして、そういう一つひとつの動作が面白いんですよ。

中谷 佐渡の方がもっている型というのは、選択的にやっているのですか。自然とやっているのですか。

平原 今回は一〇月にやったのですが、東京の能楽堂でみるようなスタイルじゃなくて、敷物を敷いてお酒を飲みながらみるような感じでした。本来は神社の祭礼に合わせ、生活の節目にちゃんとあるもので、もう少し形式的なものだったのかもしれませんが、そんなラフなものではないと思うんですね。能をやるうとすると、周りのおじいちゃんたちから、「あそこの設備が足りない」とかなんとか始まるんです。それは昔経験しているし、興味があることだし、自然と出ているものだと思います。

中谷 岸本さん、いわゆる大工の動きといったもののなかに、無意識に残っ

ている型みたいなものは多いのですか。少なくなっているのですか。

岸本 ほかの職業と比べると、いろいろ残っていると思います。いちばん多いのは道具の扱い方に関することです。基本的には職人は道具さえあれば生きていけるわけですから、その扱いについてはちゃんと残っています。

あと、いま話を聞きながらふと思いついたのが、プレカットの仕口です。いつも面白いなと思って試みているのですが、機械で回転する刃物で刻んでいくわけですが、そのできあがりがあると納まったあとは昔と同じなんです。蟻が切つてあつて、鎌になつていて。その機械を開発した人に聞いてみないとわからないのですが、なぜわざわざ蟻にして、鎌になつていてのかいつも不思議で、どうしてもあれは残つた形なのかなと思つていっています。

中谷 意識的な伝統というこれまでのあり方より、むしろ無意識なものにどういうふうにつき合うかといったことのほうが大事なのではないかという感じが出てきているのですけれども、そこに関しまして、会場からご意見をいただけないでしょうか。

土居（ものづくり大学） 僕は、今日のお話を聞いていて、民族学が直面している「民族」という言葉の議論に似ているなと思ひながら伺いました。

法律的にも「伝統的工芸品」とか文化財の「伝統的街並み」とかが定められていますし、そういう意味では、伝統といったところのものと定義化できるものとしてあるのですが、きょうの三人のお話で、無意識のところをすくい出そうというあたりが共通しているかなというふうに伺いました。

にもかかわらずちよつと気になったのは、なんだかんだいっても伝統らしきものははっきりしている。というのは、歴史的に新しくないものがまず伝統である。新しければ、「それはちよつと待てよ」と保留がついて、新しくても美的センスに合致すれば、まあ伝統に入れてもいいかなというお話の流れになっていますよね。

実はこの美的センスというのが意外と大事で、共同体の話にも絡むのです



が、結局、自分がピンときていいというレベルよりも、ある程度領き合うところがないと美的センスというのはいないわけです。ですから、きょうのお話の流れで、美的センスあたりが最終的問題になるのかなという気がしています。

「新しい」と感じたのが皆さん共通だというのがきょうのお話の振り出しだったのですが、それはとりもなおさず皆さんそういうものから断絶していたということですよ。でも、そこに何か新しいものを感じて、たぶん共通して「美しい」を感じたんだと思うんです。ですから、「新しい」ではなくて、「美しい」を伝統的なものを感じたエピソードをお聞かせいただきたいと思っています。

中谷 きれいなまとめをありがとうございます。それでは、自分がいまやっていることを活性化させる、いわば自分が食うためにはどうすればいいかの腹案も併せて教えていただければと思います。

平原 まずはじめに「新しいもの」というふうに感じたのも確かですし、「とにかく能舞台はきれい」というのも感じました。三十幾つもあって、全部回ったのですが、朽ち果てそうなものもあります。とにかく使わないのもつたいないというすばらしいロケーションにあるのも多いんですね。それだけきれいで、神社の境内にひっそり建っているというのが非常に魅力的ではまってしまったところもあるのですが、「美しい」と感じたのは確かです。じゃ、これをネタに食べていけるかという話ですが、おそらく無理だと思っただけですね。もう少しこれを地域との共同事業にしていく。地域の要望とか要求、地域が抱えている問題とかを僕が聞き役になって拾い上げて、それを解決するために何か手段を考える。

佐渡の歴史的建造物を取り巻く状況が向上すれば何か継続していけるというか、生きていける道があるのじゃないかと思って模索しているところです。まだ一年なものですから。

岸本 就職先を考えていたころの話に戻るんですけども、丸太があつて、それを四角くして、刻んで仕上げるという過程を一步ずつ踏んだ結果を創造

している人がいて、そのほうがかつこいいと感じたわけです。そのかつこいいという感覚が美意識に近いのかなと思って聞いていました。

今後のことですが、非常に危うい状況でして、いろいろな壁がないほうがいいな、なんとかやっていきたいなと思っただけでも、それでもやっぱりつくることから考えることまですべてを一人ではできないので、次はパートナーを探しかなと思っています。

北村 大学時代に現代建築を勉強していました、それと同列のところに民家という建築があり、それを「美しい」と感じたんです。現代建築と同じように民家も美しいと。まだ誰も知らないから、こつちを勉強しようと思つて、こつちの世界に入つていってしまふわけです。

でも、現代建築と民家の建築にもすごく大きな壁を自分でつくつていような気がしました。伝統的なほうにいるほうが楽は楽なんです。いままでやつてきている人がいるし、そのとおりにやつていけばいいから、そうすれば自分がみた美しい建築と同じような美しい建築が自分にもいつかつくれるようになるのじゃないかというふうに感じていたのですが、きょうのシンポジウムを通じて、そこから原点に戻らないと、昔の大工のオヤジたちには勝てないと思ひました。もう少し「伝統」を特別なものではないというふうに考え、積極的に新しいものをつなかりをつくつていけるようにやっていくのが、先輩たちと違うことをやつていけることになるのじゃないかと思ひます。中谷 きょうは意外にも「美しさ」という話にまで飛んで、とても良かったと思ひます。三人の方がコチコチの伝統原理主義者ではなかったこと、もしかすると過去と現在を統括できるのが「美しさ」ではなかったか、という結論はとてもよかつたと思ひます。

「伝統」という字は、「伝える・統べる」ですから、実はここに伝えられてきたものを統括する、美的にまとめるといった言葉の「統」という字が入つております。そういうことをもう一度踏まえて、さらに柔軟な伝統を考えてみたいと思ひます。きょうはどうもありがとうございます。

民家のたなごころを探る

—— 伝統にはまった研究者の軌跡

堀江 亨

始まりはタコ公園だったかもしれない。タコ公園とは子どもらしい勝手な通称で、タコの形をした複雑な形状のすべり台を中央に据えた公園だ。幼少の頃、これにはまった。タコの足の部分がからみあって中が迷路状になっている。登って、すべる、のではなく、この中を壁に頬をべったりつけて、ときにはなめ回すようにして徘徊した。

もうひとつは、これもまた私が勝手に網屋と名づけていた崩れんばかりの仕舞屋で、父が内職でつくった昆虫採集に使う網を納めにいく家だった。父の漕ぐ自転車後ろに乗って網屋に出かける。網屋の床はうねっていて、それが床なのか土間なのか、それとも蚊帳のような塊がおびただしく置いてあったのか、定かではない。というのもその家の中は昼間だというのに恐ろしく暗かったからだ。

どちらも鍵は空間性である。宇杉和夫氏がその著書の表題に「スペースオロジ」という言葉を使っておられたが、それに近いかもしれない。私の場合、民家の裡のもっと触覚的というか、どんよりした部分が対象である。庶民の暮らしを支える器である民家の空間には、裏側にひだのようなものがい

くつも折り重なっているように感ずる。民家を調査させていたとき、その構造の全貌を明らかにするため、奥へ奥へともぐり込む。納戸へ。屋根裏へ。私にとって家の中で最も奥まった場所とは、奥座敷とか屋根裏ではなく、生活空間と屋根裏との間の、建築史研究において名づけられることのない薄暗い影の部分だ。それは土間の上部に幾重にも組まれた太い煤けた梁組の傍らにあたり、また急峻な勾配の茅葺き屋根のふところにうずくまるような小空間であったりする。これらの、計画的には無用の、名前の付かない、構造体の中の余禄のような空間を訪ねて歩くのだ。

天井裏でクモの巣と泥と汗と

写真はおびただしく撮る。一棟の民家で百枚〜百五十枚くらい。というのも、いわゆる絵になるアングルだけでなく、また特定の部材を接写するだけでもなく、外周壁面は連続写真で、各室は展開図よろしく四方向を全部撮る。まだある。民家特有の梁が架構された空間についても大光量のストロボを使ってくまなく撮りまくる。薄暗い影の空間をストロボで照らし出すのは、矛盾する行為だとは思っただけでも、自身の専門である架構法を立体的にスケッチした野帳（現場で採取する図面のこと）を、調査後、再確認するのに写真は不可欠な資料になる。

この架構図の野帳取りと写真撮影が、なんともしんどい作業である。

その一、汚れる。普段使っていない天井フットコロや小屋組の深部に入り込むので、クモの巣と泥と汗が混じり合ったものがまとわりつきドロドロになる。真夏の密閉された小屋組は地獄だ。しかしいったん登った以上、責任をもってすでに描いてきた下部架構との位置関係を合わさなくてはいけない。それは作業者としての務めなのだが、あるところを境に、暗部の構造を解読する悦しみに転倒してしまう。蒸し風呂のような過酷な環境で、流れ出る汗をぬぐうこともできず（手にはめた軍手がすでに泥まみれなので）、眼前にうずくまる架構をスケッチしているとき、アタマの中がジーツと生暖かい蟬の音のようなものに浸されてくる。そのときには、時間も、肉体的な辛さも消え、少し自分が空間に溶け出していったかのような感覚になる。

その二、足場。関西の大和天井や北陸などの簀子天井ならば足場が面としてしっかりしているから小屋組でも動きやすい。

関東や東北の民家は、小屋梁のレベルに簀子を敷かないものもあって、しかも居室部の部屋境の土壁が小屋組までそそり立っている。すると、ひとつの天井フトコロから次の天井フトコロに移動するために、下屋の追い

扱首の小鬘のところ三角に空いた小さな隙間から、カメラをもった身重の体を入れ替えてもぐり込む。くぐり抜けた先にまた違った暗室が現われる。この界壁を東北ではクモ壁と言うら

しいが、東北の民家は全体に大振りで梁組がすっきりしている。やはり圧巻は東関東の幾重にも折り重なった梁組だと思ふ。下から見上げて観賞するのではなく、たなごころにすべり込むのだ。ある家では、天井裏の薄暗闇で井伏鱒二の山椒魚よろしく身体がはまりそうになった。顔面数センチのところには竿縁天井があり、踏み抜けば即、破損そして転落という現実がある。そんな時どこからそんな知恵が湧いたか数本の竿に身体の一部を別々にあずけて等分布荷重にしながら、そろりそろりと体をかかわして抜けたことがあった。

その三、迷路性。これはむしろ魅力でもある。北陸も若狭地方の民家が絶品である。この地方は富山辺りから続く最も急勾配の茅葺きの地帯で、家の中央に立つ高い上屋柱と周辺に立つ低い下屋柱との落差が大きい。そして中心と周囲を結ぶ低い地梁に大引、根太を並べてあちこちに中二階が取り付き、中二階のないところに小暗室がちりばめられる。広大かつ天井の高い土間の



民家のクモ壁とその小鬘（この隙間をくぐる）。

上には雪国特有の太い梁が井桁状に組まれ迫力ある架構を見せている。地元の人のお話だとこの梁組を「クモテ」（蜘蛛手か？）というのだそうだが、実は見えている土間の薄暗がりの部分だけでなく、見え隠れになっている中二階や天井裏にも同じような曲り梁が這いずり回っている。ひとしきり調査を終えると、全体として中心の太い柱から蜘蛛の手のように四周に伸びている様を感じ取れたりする。

体内ナビがきかない民家もある

この胎内巡りの間、決して自分の居所を見失わないように、体内ナビのようなものをしつらえている。方法は単純で、大戸口と座敷の位置により座標軸を決め、表、裏、下手、上手の四方向を決めるのである。実はこの理屈は全国の農家の多くが、平側すなわち長辺方向に入口を設けた平入りという形式で、しかも一番メインの入口である大戸口を必ず左か右のいずれか偏った位置に設けているということに拠っている。当たり前のように見えるこの事実は案外平凡なことで、民家建築に「奥」と感ぜられる空間性を賦与している。それはさておき、右から入る右勝手も、左から入る左勝手も、基準点を大戸口に置き、座標を決めてしまえば、あとは表―裏と下手―上手の関係ですべての位置把握ができてしまう。これは調査時にクモ壁一枚向こうにいる相棒と声を掛け合う時から、報告書の作成時まで広く応用の利く、民家空間の基本条理なのだが、一度この体内ナビが麻痺したことがあった。それが先ほど挙げた若狭の家なのであった。これは右勝手でも左勝手でもない、平側ど真ん中から入る家なので、下手―上手の方向概念そのものが無い。で、迷子にこそならなかったけれども、中心の太い二本柱を核とした同心円状の蜘蛛手の梁組が行く手にサブリミナルに繰り返される。なんだか調子が悪く、間違えばかりした。たかだか数十坪の茅帽子のような物体の内に、得体のしれない空間性がある。生活空間優先の何でもありの現代の住宅とは違う、土間・広間・座敷の空間配列に律せられたものが民家の体現している一般的空間だが、こいつにハマりすぎた私は、唯一に近い回遊型の例外に惑乱されてしまったのである。

民家園から全国へ、調査はひたすら移動

足掛け一〇年で三百棟余りの民家を調査した。この中には重要文化財で公開されているような著名なものもあれば、昭和四〇年代をピークに全国の行政単位で行なわれた民家緊急調査報告書にわずかに紹介されている程度の普通の家もある。

学生時代は、八大学による在来構法の調査団の一員として、気仙、能登、南紀などの特定の集落の民家調査に同行させていただいた。卒業後もその味が忘れられず、会社の有給休暇で諏訪、土佐などの集落調査にお邪魔した。単独で動き始めたのは一九九五年の日本民家園が皮切りだ。日本民家園の十数棟が東日本のもに偏っていることを知ったとき、身体の中からムズムズ衝動が湧き起こってきた。もっと見たい。匂いを感じたい。

九五年の晩秋、リュックを担いで西日本の民家に初めて出かけた。宿も足も機材も段取りが甘かった。ペースがわからず移動中の満員電車であたたねをして疲弊のあまり洩れ出た呻き声に通勤客が不審の眼を向ける。しかし、この中途半端な単独視察のさなかに、ココロの中に芯ができた。民家園としては出色といわれる四国村の入口のかずら橋のたもとで、このような美しい風景に感じ入っている場合ではないのだと思った。自分は観光客じゃない。と。まだ民家の何を調べるのか、わかっていなかった。しかしその頃の感情のうねりが一番烈しかった。

下調べが必要だ。まだ東洋書林から各県別調査の報告書集成が出版される前だった。県の教育委員会に照会状を出し、大学の建築史研究室を尋ね、またコピー枚数が制限されている都立中央図書館には何度も足を運んだ。比喩ではなく、一枚ずつコピーを取るその瞬間に、もう旅が始まっている。書物の中の図面や写真から語りかけてくるものがあるのだ。

九六年に車を買った。それぞれが遠く離れた残存民家を、機材と人を携え効率的に訪ね歩くには、移動手段として車を使うしかない。たとえば二週間のうち十何軒の民家を調査して廻るため、漠然と旅行気分ではなく、綿密に事前計画を立てる。

スケジュールはすこぶるタイトだ。普通の人は県単位で漠然と地図を思い描いているのだが、全国の民家調査で、時間と距離がずいぶん身体化した。

しかし東北の「広さ」は身に沁みた。五月に咲いた弘前の桜を嘗でている暇なく、辺境の千人風呂と言われる酸ヶ湯温泉にも落ち着いて入っていられない。最も観光と違うのが、夜、距離を稼ぐところ。翌日の朝一番の民家のために、日暮れに調査が終わったその足で、次の目的地の最寄りの宿まで、延延と走る。かつて伊藤ていじ氏が二川幸夫氏とともに山深い秋山郷あたりを踏査した余話から読み取れるおらかさと比べると隔世の感だ。青森県黒石市のコミセのある町を六時に出発し秋田市内の旅館を目指した日はマイッタ。高速がなく、途中で宿の夕食をキャンセルし、十時に腹ペこで着いた先から風呂にすぐ入ってくれと言われ、湯上がりの秋田市街で、のれんを仕舞おうとしている居酒屋に飛び込んだ。

私はしかしあの真つ暗な国道をひた走っていた時のことが忘れられない。後部座席には、昼間の曲芸師まがいの実測に疲れ果てた調査隊の学生が、検竿を抱えて息も立てずに眠りこんでいる。静かだ。目的地があり、ただそのためだけにひた走っている移動の本質を裸のままの感覚で感じた。

これが昼だともっと眼ががり上がってくる。約束の時間に合うために急いでいるのに、忘れ物をしただの、道を間違っただの、車内は喧々譁々。作家の色川武大氏が、来客を待つときアポイントはとりたくない、自分の知らないところで客が遅れまいとしてやつきになってこちらに向かってくるのを想像しただけで、会う前からヘナヘナになってしまっていると、我が調査隊の形相はそれはもの凄いのだろう。

和み・癒しの感覚がまさる当世気質からすれば、私の民家調査はさぞかし「すさまじ」と見えるだろうけれど、稀に肩の力の抜けた紀行となることもある。鳥取、島根の一般道を築地松の村々を縫って走ったときだと思う。きっかけは、或る民家で伊藤ていじ氏が訪ねてきたときのことを語ってくれた家人に会ったからだ。正確な言葉は忘れてしまったが、その口吻から、また会いたいな、長くおつきあいたいなと思わせるものが伝わってきた。調査者と住まい手の垣根が気持ちいいくらいに取っ払われている。

同じようなことを写真家の的場基雄さんも言っていたような気がする。民家の写真をライフワークのように撮っていた人で、東工大の八木先生を介して知りあった。民家行脚のきっかけが日本民家園であったこと、会社をリタイアしてから始めたことなど、お歳ははるかに先輩だが、妙に自分と共通点がある。

的場さんの腰の低さには驚かされた。それからよく調べている。写真といえど什器の位置からライティングに至るまで、我々の調査とは気遣いのレベルが違うけれど、全然神経質なそぶりがなく、穏やかな人だった。覚えてるのは、たとえ狭い室内であろうと必ず三五ミリレンズを使う、広角レンズは絶対使わないという的場さんの言葉だ。私は空間を捕捉したいあまり、二四ミリ、二〇ミリと嬉々として広角に走った。それがなんだか逆に自分の死角を咎められている気がした。ただ、自分と同じく民家を旅し、その記録を丹念に取っていくこうとする人の中に、全く違う世界があることを知ったのだ。的場さんは志半ばで亡くなり、念願の写真集を出すことはできなかった。

論文には決してならない、「生きられた空間」

最後に山陰の古家を訪れた話を。そこにはきれいな白髪のご当主が居て、同じくお歳を召された奥様が付き添っておられた。この家は江戸初期という格段に古い遺構なのだが、住まいながらにしてこれほど当初の状態が残されているものかと息を呑んだ。化粧天井はおろか簀子天井さえ張らない、小屋組まで見渡せるほどに広がり渡った空間の片隅にひっそり暮らしておられた。この空間は決して「開放的」とは感知しえない。穴蔵のような「閉鎖的」とも違う。篠原一男氏が理知的に喝破した「非開放的な」という言葉で、この原初的ともいえる空間を形容していいものなのかどうか私にはわからない。代々住み継いできた生活の堆積とでも言った方がいいのだろうか、下の方から漂い積もった濃密な空気をまず感じ、一方で、荒々しい梁組が、生活する空間のあらゆる隅々まで覆いかぶさっている様に息苦しさを覚えた。

小屋裏に上がることを意外なほど簡単に許可していただいた。そこで私はじめてご夫婦が居所に使う茶の間の真上が棟までまったくがらんどうであ

ることに気づいた。梁の上をそろりそろりと伝う足元から、わずかずつこぼれ落ちていく積年の埃が、霧のようにたゆたい、ゆっくりと老主人の白髪の上に降り積もっていく様を幻視し、私の足は止まってしまった。

茶の間に降り、お茶をいただいているときだろうか、それまでかいがいしく傍らに寄り添っていた夫人が不意に言うのだった。この家にお嫁にきたときには、それは怖かったものでした。夕餉の支度をしていると、西から強烈に射し込む夕日で、ふだん黒々とうずくまっている梁がそのときだけ真っ赤に染まるのです。

この光景は何だろう。妻を真西に向けた屋敷構え。入母屋の木連格子。遮るもの一切ないがらんどうの空間。それだけだろうか。老婦人がくり返し視た、燃えるような光景は、この人だけの、生きられた空間なのではないだろうか。それは民家というものを、永続する構造物という前提で見ている生まれぬ視角なのだと思う。この家を建てた大工も構想することがなく、代々この家で生れ育ってきた家督相続者も無感覚であるところの、まるで違った環境から連れ込まれ、この家で生き続けることを誓わされた者だけが感得した固有の感情である。この、刹那的で、物語的な、論文には決してなり得ない感情をもてあそぶのが、調査に疲れた身体を癒す、私の密かな悦しみなのである。

堀江亨／ほりえ・とおる

日本大学生物資源科学部森林資源科学科助教
一九八四年、東京工業大学工学部建築学科卒業。
八六年、同大学院修士課程修了(建築学専攻)。
民家の架構法に関する研究、近代都市集住形態としての下宿屋研究などを研究テーマとする。
著書に、『住まいの建築学』、『住まいを探る世界旅』(ともに共著、彰国社)などがある。NPO
木の建築フォーラム「古民家再生塾」幹事。



調査中の著者近影。(抗夫のようないでたち)

宿命と保存

——大工の家に生まれ、文化財保存を職とする

西澤 正浩

追想をまじえて

大学を卒業して初めて赴任したある文化財のお寺の修理工事現場でのことである。軒廻りの解体調査において斗や支輪の裏面に人の名前が書かれてあるのをいくつか発見した。部材どうしがびったりくっ付いていて建立後初めて表にさらす面にも書いてあったから、三百数十年前の新築工事の際に書かれたものである。工事に携わった大工が記したものであろうことは予測できたが、よく見ればそのような部材は非常にいくつもあって名前にも数種類あった。名前は原則として一つにつき一人であったが、例外としてよく似た二人の名前が寄り添うように並んで書かれているものがあつた。他と比べると心なしか字も少しだどしく見え（それでも学生時にくずし字辞典で見た例のようで、私よりはずつと達筆であつたが）、まだ一人前でなかつた兄弟が二人一緒に書いたものかと思えてならなかつた。私の勝手な妄想は次々に広がっていく。昔は今に比べると若年でも一人前とされる場合も多く、そうす

ると本当に少年の域を出ない職人であつたのだろうか。字は寺子屋みたいなところで習つたのか、それとも親方からか……。真偽は別として何らかの仮説を一つ立てると物を調べる方向性が一つは増える。建築生産的に見たとき、名前の種類だけその斗を加工した職人がいるとするとそれだけ仕事の手の違い（技量や個々の道具の違いなど）があるのだろうか、手の違いが発見できないとすればその名前は加工者というよりも据付けした人間によって書かれたのだろうか、それとも……といった具合に。

そんな話はさておき、何にしても特にこの二人一緒の名前を見たとき大変感動したことを覚えていいる。その面を開いたとき遠い昔の彼らが刹那にそこで蘇つたような親近感を覚えると同時に、自分がこの現代に文化財建造物を中心とする伝統の保存行為に携わっているその根本のようなのを感ぜずも再認識させられたためである。

おそらく本人がこの世に生存している時代には二度と見ることもない、そしてすなわち誰も見ることもないところになぜ名前を書くのか。当然、建築部材の化粧面に堂々と名前を書けないからというような物理的制約は度外視してだ。また名前などは一切書かず、建立当時の年号や修理の行なわれた年号のみを書き記した部材がこういった現場でたびたび見られるのは何を意味しているのだろうか。

宿命と運命

建築であるから、建つた瞬間から、あるいは建つ前から、それは耐用的・機能的にいつかそのままの状態で存続できないことが約束されている。

避けることのできないもの、いわば宿命であらう。

日本の伝統的建造物、特に文化財の指定を受けているものなどはさまざまに災害・兵火・社会的制限などからそれこそ奇跡的な確率で生き残ってきたものである。ただしそれは破損や老朽化のためあるいは宗教的や使用上の変更のため、修理・改造・増築・移築といった建築行為がその時々技術や材

料をもってなされてきている。その建物固有に受けた運命の結果としての姿である。

例えば奈良時代の建物が、雨仕舞の改善のため鎌倉時代に野小屋を設けて屋根勾配を強くされ、室町時代に機能拡張のため柱間を一間増やし平面を広げられる。さらに江戸時代に動線の変化のため建物の側面に新しい玄関を設け、明治に増築の付属屋が接続したとする。時代による様式や工法の混交したこの建物に対して文化的価値を尊重した保存修理を行なうにはどこまでの復原を考えた修理をすればよいのだろうか。それにある程度の機能的必要性をすり合わせる必要がある場合に、どのような決断をすればよいだろうか。

明治三十年に古社寺保存法という本格的な制度が整って以来、実際に大変な数の歴史的建造物保存修理がなされてきたが、それは多かれ少なかれある種の価値判断をとらなかつた行為が確実に含まれている。さらに明らかに後世にまづい改造を受けたことは分かるが旧規が失われていて本来のものが判然としない場合や、元来から構造的・仕様の欠陥をもつ建物に補強が必要と判断された場合などに、また頭を悩ますことが増えてくる。

このように、これらは非常に難しい問題であるため、建物個別に慎重に考え保存修理の方針を決めることが必要なのであって、マニュアルというものはないのも同然である。何にしてもその時々々の精神のあり方や知識などを含んだ文化の歴史自体をもつたえすべく、これもまた伝統を守るために必要なはずなのである。建物によりよい運命をもたらすため修理に携わる人間には、どのような努力が要求されるのだろうか。

「なぜ今、伝統」なのか。現代において伝統を扱う仕事の意味と今後の展望などを、現場を経験している立場から書いてみてはどうか」。

このようなお題を事前にいただいた。ここで少し話を変えよう。誰でも一生涯の職業を決めるときには何らかの理由か、明確なそれがないとしても何らかのきっかけがあるだろう。刹那的なきっかけでなく人生経験を積みながら徐々にまわっていった想念がその方向性を決めることもあ

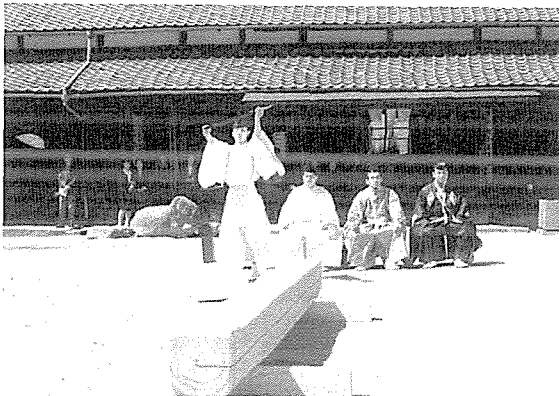
るだろう。私の場合そのようなきっかけは何か考えてみると、それは間違いなく生まれ育った環境であったといえる。

例えば社寺建築の設計施工・修理を家業とする家に生まれて三十年余、環境から受けた影響はどうしても大きい。幼少時から親父に連れて行ってもらったところとしては国宝・重文の神社仏閣や仕事の現場があつたし、買ってもらったプラモデルはお城や塔が多かつた。アルバイトをしようと思えば親父たちがやっている木工事の現場へ行ったりもした。ただし、長期間まとまってじっくり大工仕事を修行することはついになかつたから、もちろん私は腕の技術で食っていくことはできない。

小柄な年配の職人さんやお腹の出た壮年の職人がいとも簡単に丸太を持ち上げたり軽く身をこなしていく作業が、自分はどうしてもぎこちなかつた。体のもつていき方にどういうコツがあるのか、かがみ込んで材料の鑿加工をしばらく夢中でやると、気が付けばもう腰が痛くて立ち上がれなくなっている。ふと隣で同じ仕事をしている弟を見やると淡々と作業をこなしている。

「口ばかりで先に体が動かない」とは耳の痛い言葉であつた。私も実は、とある新築工事の現場で斗の加工をしていて、その下端だったか自分の名前を書いた記憶がある。冒頭で述べた、解体現場で斗などに若輩らしい職人の名前を見つけたとき自分とだぶって感動した原因の一つでもある。

屋根工事で野地板を釘留めする作業をやってみる。日本家屋、とりわけ社寺の屋根は軒先ではまだ何とかが体が自由になつても大棟の辺りでは屋根勾配もかなり強くなつて大変だ。



高校時代、お寺の起工式にて槍鉋をふりかざす筆者。

変な角度で体重をささえる足首などはもう痛くて痛くてわずかの時間も同じ体勢でいるのが嫌になる。さらに釘の打ち方も経験が少ないものだから、何十本何百本と打つうちに疲れて肘が固定できなくなり、ぶれ始める。そうすると加速度的に上腕が疲れてへろへろになり、とにかくもう休憩なり日暮れなり待ち遠しくてしようがなかったものだ。ようやく休憩になってふらふらした足取りで降りていくと、施主さんや檀家さんや見物していたお年寄りが「まあ、大変な仕事を。ご苦労さん」などと言ってお茶やお菓子を出してくる時、未熟でありながら文化的で、人に感謝もされる仕事にたずさわる一員になった気がして、そこはかとなく嬉しくもあり誇らしくもあったものである。不思議と体もシャキッとした気になったことを覚えている。

これらの経験を比較的日常に味わえる環境が生まれる前から決まっていたのは、私にとっての宿命だったのであろうか。

どうかこうにか文化財建造物保存のための設計監理を主とする現在の職業に就いて、この春五年目を迎えさせてもらった。

現場の日々と「視る」こと

俺は今忙しいからお前ちょっと、どこそこの何々を見てきてくれ、と現場所長に言われて一人で現場に行く。現場に行くといっても常駐しているのだから、工事の素屋根に隣接している現場事務所を出て一、二分後には目的の場所にいる。今日は自分一人だから何一つ見落とすまいと私はそれなりに材料や工法、痕跡をまめに野帳にとり、実測を済ませて記録写真も撮り、事務所に戻って報告する。別段忙しそうにもしていなかった所長は、「で、どうだった?」と聞いてくる。だから今説明した通りと言いながらもう少し丁寧に説明し直す。しかし、「それで?」とまた聞かれ、私は黙り込んでしまう。自分は今全部説明したぞと思っていると、「お前、本当にちゃんと見てきたのか?、どこかでサボってたんだらう」とニヤニヤする始末である。「よし、それじゃ一服したら俺も一緒に行くからお前、もう一度来い」となって私は

半ば憤りながら付いていく。そしてその結果、自分が大事なことを見落とししていたことを思い知らされ、愕然としたことが一度や二度ではなかった。

「技術者ならば、もつと物をしっかり見ろ、その時々テーマをもって大きく・小さくいろいろな見方をして、その上でもつとしっかり考えろ」と事あるごとに言われてきた。ここで実際に体験した単純な例の一つ紹介させてもらおう。

ある作業中、古い千本障子を数枚見つけた。「これをもし復原するならば、どこにどういう使われ方をしていたのか調べてみよう」と所長が言った。間口・内法や仕様から使われていた場所は推定できたが、上下左右ほぼ対称で右勝手なのか左勝手なのか、どちらが天でどちらが地なのか判らなかつた。縦框に肘壺金具等を取り付ける四枚開き式の千本障子であるから、摺り棧は通常の建具のように下端が磨耗していない。そのうえ風化も手伝って全体に判然とせず、金具痕跡も傷みが激しく、判断材料が乏しくて悩み込んだ。復原するならば、見つかったものが左右どちらの何番目の位置に使われていたのか忠実に示した上で、欠失した方を補足しなければならない。現状を元に復原するときは、安直な推測等で進めることはできないのだ。金具痕跡の位置から辛うじて開き勝手を判断できたので、あとは天地の判明によって建て込み位置も推定できるところまで来たが、そこからお手上げだった。所長にその旨を伝えると例によって、「本当に見たのか?」である。私は今度こそと思いい、自信をもって「見た」と答えた。

しばらく千本障子を見ていた所長は、「お前やつぱりちゃんと見ていないじゃないか、組子格子のところをよく見てみる」と言う。血相を変えて凝視してもピンとこない私に、所長は最後にとうとう教えてくれた。どちらが上でどちらが下か、組子の上端には埃が溜まって湿気を呼ぶ。ある程度まめに掃除など行なわれていたとしても、何十年、何百年と経てば微妙に違いが出てくる。物の道理とその部材が経過してきた年月の長さ、それを軽んじてものを見るから、この微妙なふやけ具合の差に気が付かないのだと。

考えてみれば至極当然のこと、何だそんなことかと思われるであろう。し

かしそれは、この知識を初めから念頭に置いて見なければ認識できないような微妙な違いであった。

歴史的なものを守るということは、自分が生きてきた時間の数十倍、数百倍の時間を認識して敬意をもつこと、そしてものを考えるためにはしっかりと「視る」こと。さらに「視る」と「識る」は一体的なものであつてこの仕事で不可欠だということが、これらの貴重な経験をいくつか得て現段階で私が思い知ったことである。

一年目の秋、現場に接近した大型台風によって所長ほか現場スタッフで事務所に泊まり込んだ。もし何か起こったとしても我々が何をできるものでもない。ひたすら台風情報をラジオで聞きながら夜を明かす苦痛を経験した。ただ、今なら修理を通じて逆に自分を育ててもらっている我が道場のような現場とともに、じつと我慢ができるような気がする。

伝統と「今」「未来」

飛檐垂木と栝木を緊結する吊り金物に刻まれた建立年号を発見した。棟札も失われていて、その建物の建立年代が確定できる唯一の部材であつた。

もちろん貴重な資料であるから、記録写真も撮り、摺り本なども作成した。組み立て直すとき、この唯一の資料を使われていたように元に戻すと所長から聞いたとき、心の中で葛藤が生じた。鉄であるから次の修理でこれを外したときにはもうこの字は残っていないかもしれない。また、建立年代を示す唯一の資料を誰の目にも触れることのないところへ戻すのは惜しかったのである。ここで私は文化財の保存修理とはやはり難しいものに思え、ジレンマを感じていた。

奈良のお寺などに行くと、貴重な資料部材が多く並び、訪れる人びとに通常見られない歴史的材料を披露している。私もそのようなやり方もいいと思つてきた。そのような扱いを受けたほうが部材の保存もより長く効く。しかし、破損して使えない部材ならともかく、本来使われるべくして造られたも

のをその場所から切り離して一種の人間のエゴともいえる扱いをして伝統を保存したといえるだろうか。あるいは建物が口を利けるなら果たしてどちらを望むだろうか。

「伝統」というものをガチガチに考える必要はあるまい。昔に建てられたものを現代可能な限りの技術をもって現代の価値判断で考えればいいだろう。先人たちが建築というものに、伝統というものに注いできた精神を断絶させないためにどうするか、細心の注意を払うのであれば。しかしこの現代の価値判断はどうあるべきかを答えることが実に難しい。そしてその答えは私にもわからない。ただ現在までの僅かな経験の範囲で重要だと思ふことは、その建物が最もいきいきとした時代の姿を想定して、その状態を後世に伝えられるような努力をすることである。

伝統を守るといふ仕事は過去にも未来にも責任を負うことが求められる。過去の文化と未来の未知の文化、それを踏まえた上で伝統の保存を今に行なうことはやはり、文化を理解した現代の人間が現代の文化人を代表して行なうのでなければ本来でない。視て、考えて、それを未来の後輩に堂々と示せる文化人たる努力をしなければならぬ。

建築部材を解体したときに初めて表面に出た名前や年号の墨書は、単なる記念のためだけとは到底思わぬ。書かれたメッセージを見ることができるのは何十年・何百年先の、それも修理や解体に携わる人間である。ある建築行為をして歴史を出発させた、あるいは文化を、伝統を伝えたという自負と責任が、そこに込められている気がするのである。

西澤正浩／にしざわ・まさひろ

財団法人財建造物保存技術協会 技術職員

早稲田大学理工学部土木工学科及び建築学科

卒業。二〇〇〇年、同大学院理工学研究科修士課程（建築史）修了。財団法人財建造物保存

技術協会入社、現在は本部修復設計課技術職員。

大学時、規矩・木割等の日本建築技法を

研究テーマとし、中世和様仏堂を主とした軒

の設計方法に関する規矩的考察で平成一二

年度日本建築学会優秀修士論文賞を受賞。

「伝統技術」の魅力と可能性

——一軒の家づくりから村づくりを考える

畔上 順平

伝統は「宝物」

私が「伝統」に直接触れるきっかけとなったのは、大学院のときに指導教官であった三井所清典先生から、福島県館岩村における村づくりの研究をしてみないか、と声を掛けていただいたことだった。館岩村では平成一〇年度に国土交通省(旧建設省)の「地域住宅(HOPE)計画策定事業」の指定を受け、平成一一年度から三年間の「地域住宅(HOPE)計画推進事業」を行なう予定になっていた。三井所先生の主宰するアルセッド建築研究所ではこのHOPE計画の「住まいづくり研究会」のコンサルタントを行なっており、我が研究室ではそのサポートを含めた村づくりの調査研究を行なうこととなった。

私はこれまで日々更新され続けている都市的な環境や建築への興味が強く、中山間地域という未知なる環境での調査に抵抗を感じていた。今後自分が「伝統」の世界と関係を持つようになるとはまったく予想することができな

かった。

館岩村は福島県の南西端、南会津地方に位置し、周囲を一五〇〇m級の山に囲まれた山岳地帯である。冬季には最低気温がマイナス二〇℃になることもあり、積雪も平均で一・五mという厳しい生活環境を強いられている。近年では人口が減り続け、現在二四〇〇人を下回り、高齢化率三四%という非常に危険な状況に陥っている。こういった状況を踏まえて数年後には近隣の四町村が合併し、新しい町になることが決まっている。このような状況下においてHOPE計画への期待は大きく、またその役割は今後の館岩村の進むべき道を示す、重要なガイドラインとなるべきものと位置づけられた。魅力ある村づくりを行なうことで、観光収益および住民の増加(若い労働力の確保)につなげていくことが目標として定められた。

我々はまず、村の住民との話し合いの中で新しい村づくりへ活かせるような資源に着目した。美しい風景、広葉樹の森、透き通った清流、共同温泉浴場、中門造の民家、伝統的な大工技術、神楽の舞、田舎そば、山菜料理など、昔からあるものや受け継がれてきたもの、いわゆる「伝統」的なものが、村の資源であると考えた。あたりまえのように思われるかもしれないが、村民にとっては灯台元暗し。鈍く光る宝石のように、改めて観察しないとその輝きに気づかないのである。マスメディアが取り上げる情報の多くが、その土地ならではの風土から生まれてきたものであるように、伝統的な村の資源は、外部からの目を引きつける魅力がある。昨日今日できたもので、一時的に注目されたとしても継続されるものはほんの一握りである。「伝統とはかつて前衛的なものであった」とある職人さんから聞いたことがあったが、まさに偶然現れた前衛が長い年月を経て洗練され、生き残ったものが伝統になったといえる。このように冷静に考えると、これらの資源は村にとって、かけがえのない「宝物」なのである。

その中で最も私の興味をひきつけたのが、村づくりのキーポイントになる伝統的な大工の技術であった。

未来につなげたい技術

館岩村にはいわゆる曲家と呼ばれるL字型平面の巨大な民家が点在している。南会津地方では特に「中門造り」と呼ばれており、通常の曲家と違って母屋から飛び出した馬屋の先端に「トンボウグチ」と呼ばれる出入口が設けられている。また、構造にも独特の特徴がある。最も積雪荷重が掛かると思われる曲りの部分に、大きな「日の字」型フレームがある。二本の太い大黒柱と大梁、差鴨居、足固めの三つの横架材が伝統的な仕口によって強固に組まれ、構造のコアとなっている。豪雪地帯にもかかわらず開放的な間取りを望んだ昔の人たちの知恵と工夫によって生み出された構造であると思う。この民家は一八世紀の半ば頃から建てられた形跡があり、豪雪地帯のこの地方にとって利便性のよい形態として長く使われてきた。一〇〇年以上経っている民家も少なくない。

しかし現在では馬を飼うこともなくなり、現在一部の保存地区を除き、高齢化率の高まっている館岩村では昔のままの大きな民家を維持していくことが難しい状況にある。それとともに大工の仕事も民家をつくるような伝統的な家づくりから、金物を多用するような簡易的な家づくりに変わってきている。残念ながらこういった状況は全国各地で起こっているものと思われる。首都圏では伝統的な仕事ができる大工が減っている中で、この村では誰もがその技術を持ち合わせているにもかかわらず、その腕を振るうことができない現実にもどかしさを感じた。何とかこの技術を次の世代につなげていく方向性はないものだろうか。

不易と流行

過去の経験になるが、伝統の世界が希望に満ち溢れていることを私に教えてくれた出来事があった。大学の四年間、あるメンズショップでアルバイトしていた私は、各シーズン目まぐるしく変化していく流行のファッションを

追いかけていた。レディースに比べると華やかさに欠けるメンズファッションだが、建築界に比べれば非常に早いスピードで目まぐるしくコンセプトが変わっていく。常に生産と消費を繰り返しているこの業界で、私は特にスーツスタイルに関心を持った。その当時は大人の男の象徴として、スーツスタイルに強い憧れを抱いていたのだと思う。

日本人の多くは「スーツ背広」として決まりきった形式を想像するが、なぜあのスタイルになったのかを知る人は少ない。スーツスタイルを生み出し、発展させた地は、イギリスのロンドンにあるサヴィル・ローという小さな通りである。余談であるが日本ではこの発音が訛って「背広」になったといわれている。現在も多くの有名テラーが軒を連ねているこの通りは、一九世紀前半頃から店が集まりだした。多くの貴族や資産家によって腕のよいテラーが鎗を削り、素材と技術にこだわりの本物のスーツをつくり続けてきた。そのスタンスがいつの間にかサヴィル・ローの名前をスーツの代名詞のように扱うようになったのである。しかし、時代の流れとともにその要求とこだわりの薄れ、徐々にその勢いは下火になっていった。各地で発展していった伝統的な工芸品や技術は、非日常の物として、特別、高級、といったイメージを植えつけられ、我々の目の前から姿を消していったのである。

しかしサヴィル・ロー通りはここ数十年でまた活気を取り戻しつつある。ファッションの歴史を振り返れば、それまでロンドン中心のブリティッシュ・トラディショナルであった流れが十年ほど前からパリ・ミラノ中心のモードへと大きく変わった。当然ブリティッシュ・トラディショナルの中心であったサヴィル・ローは更なる衰退を強いられると思われたが、まったく予想外の展開を見せた。現在パリ・ミラノコレクションなどで活躍している若手デザイナーの多くは、サヴィル・ローのテラーで修行時代を過ごし、その伝統的なスタイルを叩き込まれているのだ。そこで身につけたこだわりと技術を基に、彼らは各地で最先端の流行を発信し続けている。形が変わったり素材が変わったとしても、洋服を作る技術や姿勢は変わっていないのだ。この流れが逆輸入効果をもたらし、サヴィル・ローが再評価されることにつな

がった。まさに伝統が日々進化し続けていることを証明している。

時代によって求められるものが変わるのは当然である。しかし、その仕事に対する本質は変わらない。よい技術は必ず必要とされ、残っていく。実際、サヴィル・ローのテーラー技術は機械では絶対にできない立体裁断であり、微妙な手縫いによる風合いは、着る人の体形を美しく演出する。きつと長く着こなすことのできる一着になるのだろうか。「不易と流行」という言葉があるが、まさにそれを教えてくれた出来事である。

伝統技術の可能性

そのサヴィル・ローの出来事のように館岩村の大工技術が周囲に認められ、結果として地元で根付かせることはできないのだろうか。そんな希望を抱きながら私はこれまで仕事をこなしてきた。ここでは現在進行中の住宅を通して、伝統技術の可能性を考えてみたい。

「那須の山荘」

この住宅は栃木県那須町の別荘地に計画中の平屋建て木造住宅である。施主は現在埼玉県に住む五〇代後半の夫婦であり、定年後は永住するつもりであるが、今のところは別荘として使用したいと希望している。住宅のイメージは民家でありながら、モダンな雰囲気にする。田舎の雰囲気をもちながらどこかにスタイリッシュさを感じる家であって欲しいと願っている。都会の人ならではの感性である。材木は地元の八溝材を使用することにした。自治体の補助金や運送費など、地元材を使うことでのメリットは大きい。もちろん職人も地元から集める準備を進めている。この地域では伝統的な仕事をする職人がごくわずかになってきている中で、こちらの意向を汲み取り、昔の仕事を思い出しながら協力してくれる職人が集まっている。話をすればすぐに内容が伝わるのも伝統技術の魅力の一つである。標準語のような全国共通技術といえる。

建物は四間×六間のシンブルな田の字型プランで、中心の構造は会津の民家に見られるように、通し柱に足固め、差鴨居、梁を組み合わせた強固なコアとしている。そのコアに左右の桁から登梁を渡して全体を支える構造としている。なるべく部材数を減らすことで、コストパフォーマンスをあげる努力をした。また、継手・仕口の種類を限定したり、部材寸法を揃えていくことで、仕事効率を上げるような計画としている。どうしても大工手間のかかる伝統的構法の住宅では、複雑になりがちな構造を整理し、シンブルにまとめることが全体の金額や工期を抑えていく重要な鍵となる(平面図・写真参照)。

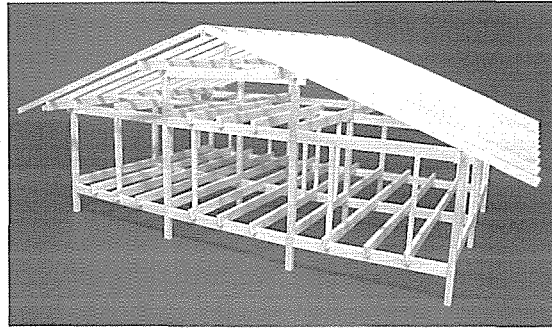
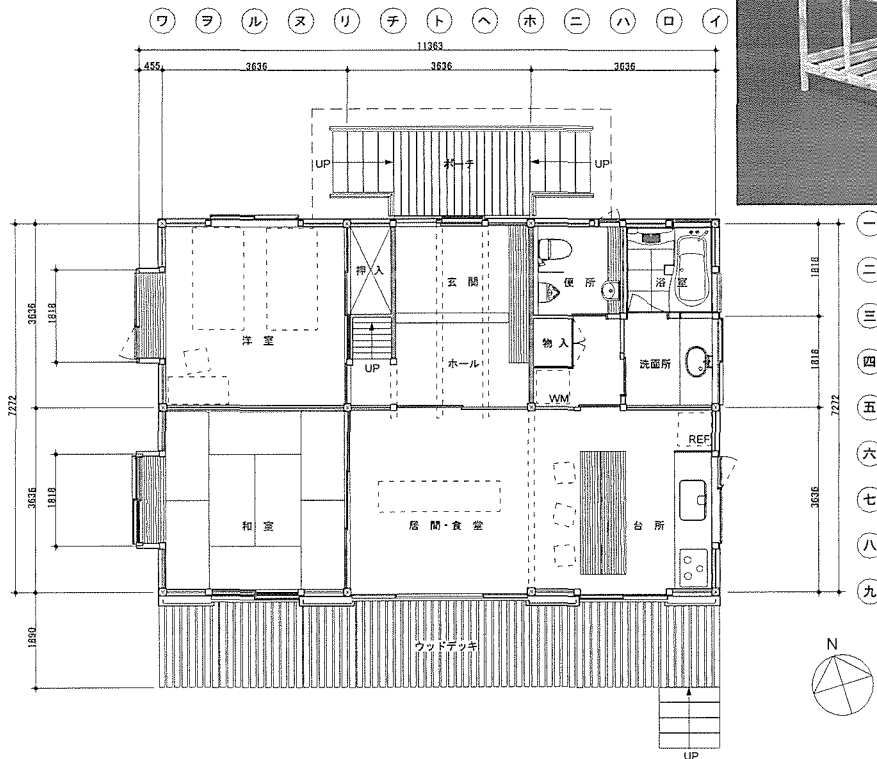
この地域にもかつては多くの民家が存在し、材木の製材技術や大工技術のレベルは高かったという。古い町並みには趣のある民家が立ち並んでいる。それが高原のリゾート開発が進むにつれ、早くて安くつくれる簡易的な別荘に主流が移ってしまった。当然手間のかかる伝統的な住宅は徐々になくなりつつあったのである。しかしここ数年、環境のよいこの地に終の棲家を求めて移住してくる人が増えている。今回の那須の山荘もその類であるが、彼らに共通していることは早くて安くできる家ではなく、快適に長く住み続けられる家を欲しがっていることである。こういった傾向が職人の仕事や技術に与える影響は大きい。環境やライフスタイルを大切にしている時代になったが、建築制限の少ない地域に木をふんだんに使った住宅ができていく可能性は高い。時代の要求と施工面での工夫がうまく合致すれば、古い技術を活かしながら新しい環境に馴染む、美しく素朴な現代民家が増えていくかもしれない。

都市部から新しく入ってくる人びとが、その地域の民家を逆輸入することで、地域にどのような影響を与えていくのかが楽しみである。

おわりに

今後、伝統技術を取り巻く状況がどのように変化するかは定かではないが、正しい伝統技術が残っていくためには、少なくともつくり手側の努力や

「那須の山荘」の平面図と構造模型写真



熱意が必要であることは否めない。しかし、伝統的な技術を使った家づくりの最大の魅力は、住まい手だけでなく、つくり手にも喜びがあることである。もちろん予算による制約はあるものの、やりがいのある仕事に携わっている職人はいい仕事をしようと努力する。建物の多くの部分を職人の手づくりに委ねる工法ならではの魅力である。もちろん設計者にも同じことが言える。家づくりの中で設計者の役割は、職人の能力を引き出し整理することと新しい提案を投げかけることである。つまり伝統技術に付加価値を与える仕事である。どんなに綺麗な図面を描いたとしても、それだけでは決してよいものにはならない。施主と職人と一緒につくりあげていくやりとりの密度が大切なのであり、そこに面白みや魅力がある。こういった喜びが、伝統技術を支える原動力となっているのかもしれない。

こうして考えてみると、自分は決して伝統にはまったわけではない。自分が魅力的に感じている仕事の中に伝統の技術が生きているだけである。その伝統を尊重して新しいアイデアを付加していきたい。いつの時代もそうやって新しいものがつくられてきたのだ。そしてこれからはもっと日本人に自国の歴史、文化、生活などに対する理解を深めていかなければならない。まずは伝統に対する既存概念を取り払う必要がある。そして日本の家を見せてほしい」といわれてもすぐに見せられるような家を広めていきたい。近い将来、岩村の大工と一緒に伝統的構法の住宅を村内に少しずつ増やしていくことが、私の小さな希望である。それが結果的に持続可能な村づくりにもつながっていくものだと思う。

呼上順平／あせがみ・じゅんべい
 けやき建築設計代表。
 一九九八年、芝浦工業大学工学部建築学科卒業。二〇〇一年、同大学院修士課程修了。松井郁夫建築設計事務所を経て、二〇〇四年、けやき建築設計事務所を設立。持続可能な生活環境を目指し、材料や構法を活かしたスタンダードな家づくりを実践。

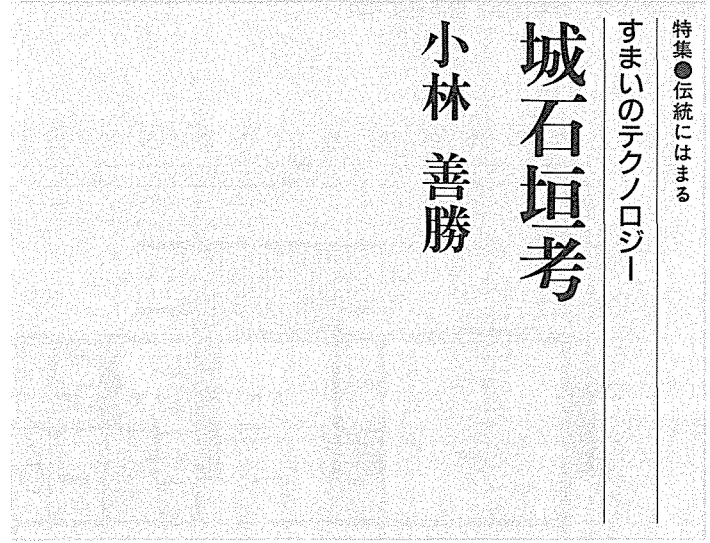
城石垣考

小林 善勝

古城の石垣の上に枝を張る松ノ木。
空にかかる月。

この心象風景は、日本人の多くが共有している。
そして歴史へのロマンを誘う。

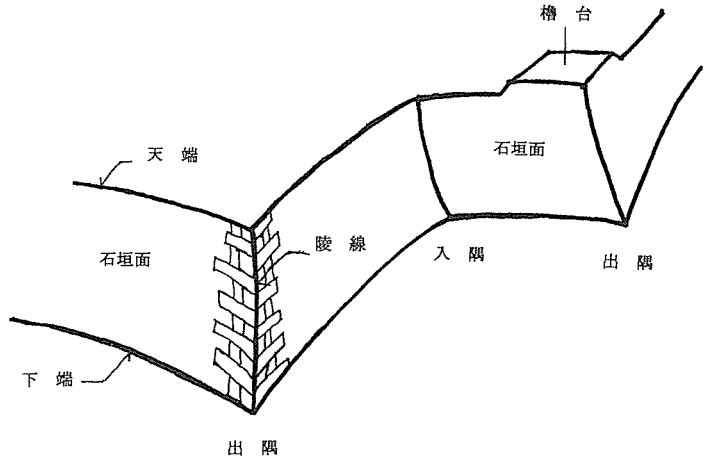
確かに城石垣の持つ魅力は人びとの心を捉え、
全国各地で環境整備の一環として城石垣の修復・
復元工事が行なわれている。ここ数十年、城石垣
の修復・復元工事の現場で、石工事を担う者の一
人として実践し、目指してきた事柄について述べ
させていただく。



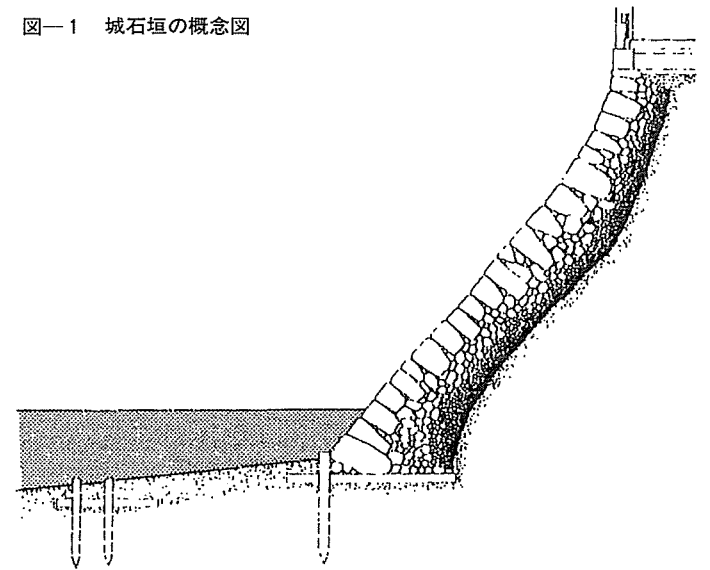
その前に、日本の城石垣について、既にご存知
の方もおられるとは思いますが、簡単に説明しようと
思う。ただし、私は歴史家ではなく、埋蔵文化研
究者や造園家でもない。ましてや建築家でもない。
土木技術者としての自負を持つ一人の石工として
のとらえ方である。

日本の城石垣

城石垣が造営された時代や地域により、それぞ



図一 城石垣の概念図



図二 石垣の断面図

れの石垣は、使用された石、石の加工技術、石の
組み方、石垣の築造された場所（山地や平野）、
石垣の大きさ（高さや長さ）、等によって、全て
異なった特色を持っている。その全てを記すこと
はできないので、やや概念的な説明を試みたいと
思う。

図一は、城石垣の一般的な概念図である。城
石垣は幾つかの石垣面で構成されている。石垣面
と石垣面との出会うコーナーに出隅と入隅が形成
される。このコーナーの角度は、必ずしも直角で

表—1 石垣の調査

1 歴史的調査	①築城の経緯 ②立地条件 ③縄張りの変遷 ④石垣の修築経緯 ⑤利用形態(用途の変遷)
2 埋蔵物調査	①発掘調査 ②地中レーダー調査 ③堀・井戸・水路などの調査
3 土木工学調査	①地質調査(ボーリング・造成と客土) ②気象(温度・湿度・水)調査 ③材料(石材)調査……採石場所・劣化度 ④構造(積石と裏込め/算木等)調査
4 技術調査	①施工方法(積み方)調査 ②道具の調査 ③加工技術調査 ④運搬技術調査
5 意匠調査	①形態(平面測量・断面測量)調査 ②石の大きさや仕上げ方法調査 ③石積み方法調査 ④隅石と天端石調査

はなく鈍角の場合もあれば鋭角の場合もある。出隅には稜線が出現するが、この稜線を含めて出隅部分は、後述するように、その城石垣の特徴が顕著になる箇所である。石垣面の最上部は天端石によって納められ、天端線が形成される。この天端線も必ずしも水平ではなく、傾きを持つ場合も多くあり、出隅に向かって跳ね上がるように高くもなれば、出隅に櫓や楼閣のある場合は段差を持つて高くなる時もある。石垣面の最下部は次に述べるが、地中に埋まっただけで表面上は見えない。石垣面が土と接するところが下端線である。下端線も水平であるとは限らない。山城の石垣の場合であれば、むしろ水平な下端線などあり得ない。

図—2は、石垣面の一般的な縦断面図である。地山をカットした面や盛土の突き固めた面と石垣の背後の間には裏込め石が装填される。裏込め石は割栗石である場合が多いが、現場で発生した碎石を用いている場合や礫石を使用している場合もある。石垣の最低部には根石が置かれている。根石の置かれている地盤が岩盤である場合は問題ないが、そうでない場合は地盤を補強するための算木や杭が施工されていることが多い。

城石垣の石積み方法は通常「空積み」といわれるもので、石積みの裏側に接着媒体としては何も詰めずに石を組み上げる方法で、現代において多用されている石積みの裏に生コンやモルタルを詰め込む「練積み」とは異質の積み方である。また同じ空積みでも、何も手を加えない自然石を使用した「野面石積み」、半加工された石を用いる「打ち込みハギ」、完全に加工された石を使用する「切り込みハギ」の概ね三つに区別される。城石垣の縦断面には「テラ勾配」ともいわれる弓状のそりを持つものが多い。石垣の側面から見ることもできる。また城石垣の横断面にも、糸通りに対して「しわり」と呼ばれる僅かな曲りが、石垣の背後方向にある。石垣の天端線や下端線を上部から鳥瞰するとそのことが窺い知れる。これらは、石垣面の高低差を利用したり、捻りを加えることによって、巧みにつ

城石垣の修復・復元

城石垣の修復・復元をするためには、大きく分けて三つの過程を踏むことになる。第一は城石垣の現況・事前調査である。第二は修復・復元の計画・設計図の作成である。そして第三は実際の施工である。順を追って説明したい。

一、現況・事前調査

現況・事前調査項目は多岐にわたる。解体前に調査すべき項目と解体と平行して調査する項目とがある。表—1は調査項目の一覧表である。

表—2 石垣調査の詳細項目

<p>1 事前調査・試験</p> <p>(1)石材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スミ打ち ・実長採り ・写真測量 ・破損石材調査など <p>2 解体時調査・試験</p> <p>(1)石材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法量調査 ・破損石材調査、岩石試験(物理試験、一軸圧縮試験)など <p>(2)裏込め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現況において試験…現場密度試験、粒度試験、三軸圧縮試験(CD条件)、室内透水試験 ・修復において試験…碎石配合試験、現場密度試験、粒度試験、三軸圧縮試験(CD条件)、室内透水試験 <p>(3)盛土</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現況において…物理試験、一軸圧縮試験(乱さない、乱した試験) ・修復において…物理試験、一軸圧縮試験(改良材配合試験) <p>(4)地山</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩盤コンター調査…ボーリング調査(標準貫入試験)、簡易貫入試験 <p>3 修復時調査・試験</p> <p>(1)石材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法量調査 ・岩石試験 <p>(2)裏込め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現場密度試験、粒度試験 <p>(3)盛土</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一軸圧縮試験

- ①歴史的調査…これは主として文献による調査になるが、現場にもその遺構が残されている場合も多く、事実関係を正確に把握する必要がある。
- ②埋蔵物調査…対象となる城石垣が文化財としての価値を持つ場合、文化財調査として別の角度からの調査がなされる。純粹に城石垣の調査としても、埋設されてしまった遺構の調査は重要である。
- ③土木工学調査…近代科学の見地からの調査である。土木工学の領域で培われた調査方法が用いられる。表—2は、東北地方の某城石垣の修

復元工事の際に行なわれた事例の詳細である。この事例では、施工時の調査も含めて記載している。またファイバースコープに拠る石の控え長さや、歪み計による城石垣の動態も調査された。

④技術調査…現場の石工が一番注目する石の組み方についての調査項目である。石の据えられ方、石の納められ方、石が再利用できるか、新補石に置き換えるかどうか、道具の使われ方等、石工自らでないと判断できない内容でもある。また次の意匠調査とも深く関わっている。

⑤意匠調査…この調査は平板測量、写真測量、レーザー光線測量等により城石垣の形状(平面、断面、立面)を調査し、また石垣の長さを実測する。個々の石についても採寸し、石の形状(長さ、角度等)を調べる。特に角石については重要な調査である。

従来、石垣調査において、①歴史的調査や②埋蔵物調査については、比較的行なわれてきたが、

③土木工学調査、④技術調査、⑤意匠調査については不十分であり、特に形態調査については数値化した平面図、断面図が作成されていなかった。この調査は次の修復・復元の計画・設計図の作成に不可欠の項目である。これについては、修復・復元の計画・設計図の作成のところで少し詳細に述べさせていただく。

今までの測量技術の改良に加え、最近ではかなり有効な新しい技術が開発されている。例えば、(株)エマキが開発したMofixはデジタルビデオ技術を応用したもので、長い距離の石垣面を測定するのに適していて、精度の高いデータが得られるとともに、修復・復元時の石の位置を確認するのに有効である。

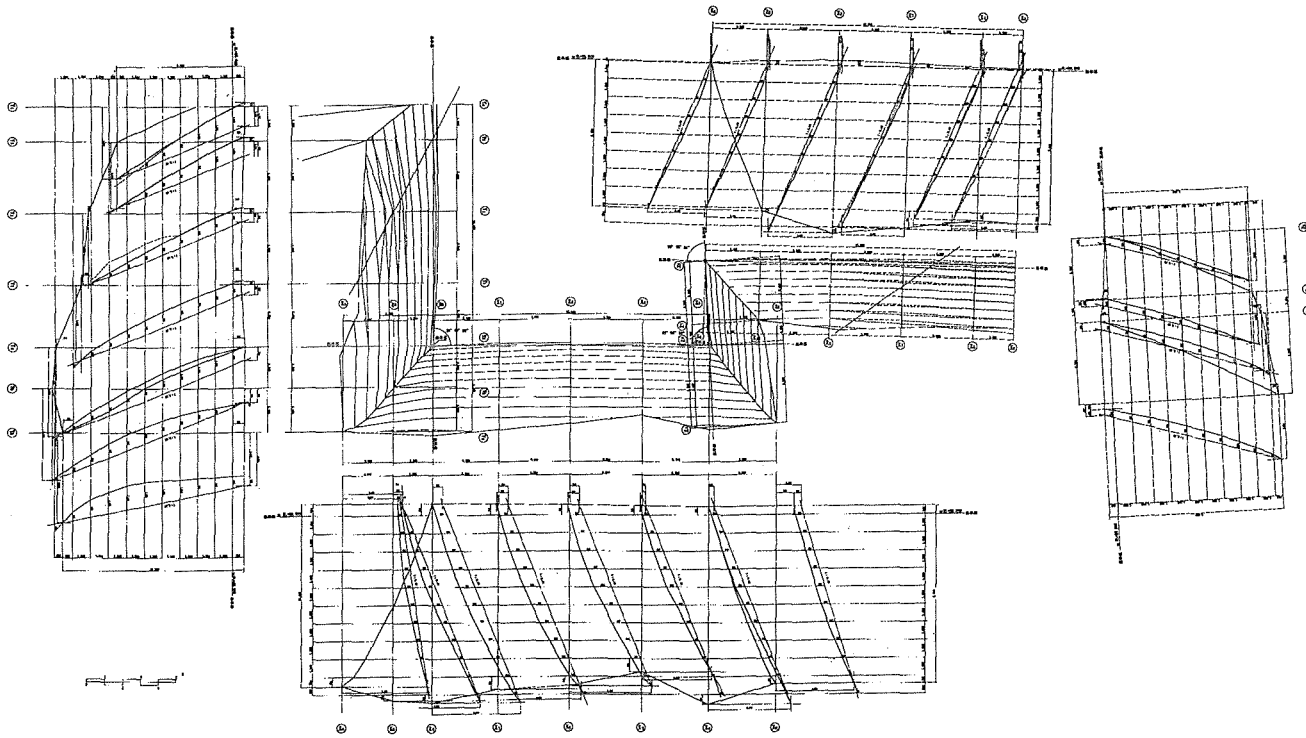
二、修復・復元の計画・設計図の作成

前述したように、城石垣の形態が数値化され、そのデータを基に作成された平面図、断面図、立面図を読むことによって城石垣の何処を修復し、何を復元するかを知ることができる。

城石垣の構造上の性格から、石垣の出隅、入隅、下端線等は比較の変形が少ないことが、城石垣の元の姿を知る上で重要な手がかりになることは、知っておくべき事柄である。

ある城石垣面を調査し修復・復元しようとする時、その石垣面に基軸を設定する。基軸の位置は、その石垣面の両サイド(出隅または入隅)の変形していない部分で、できるだけ天端に近いポイント

図一 3 石垣修復計画図 (参考例)



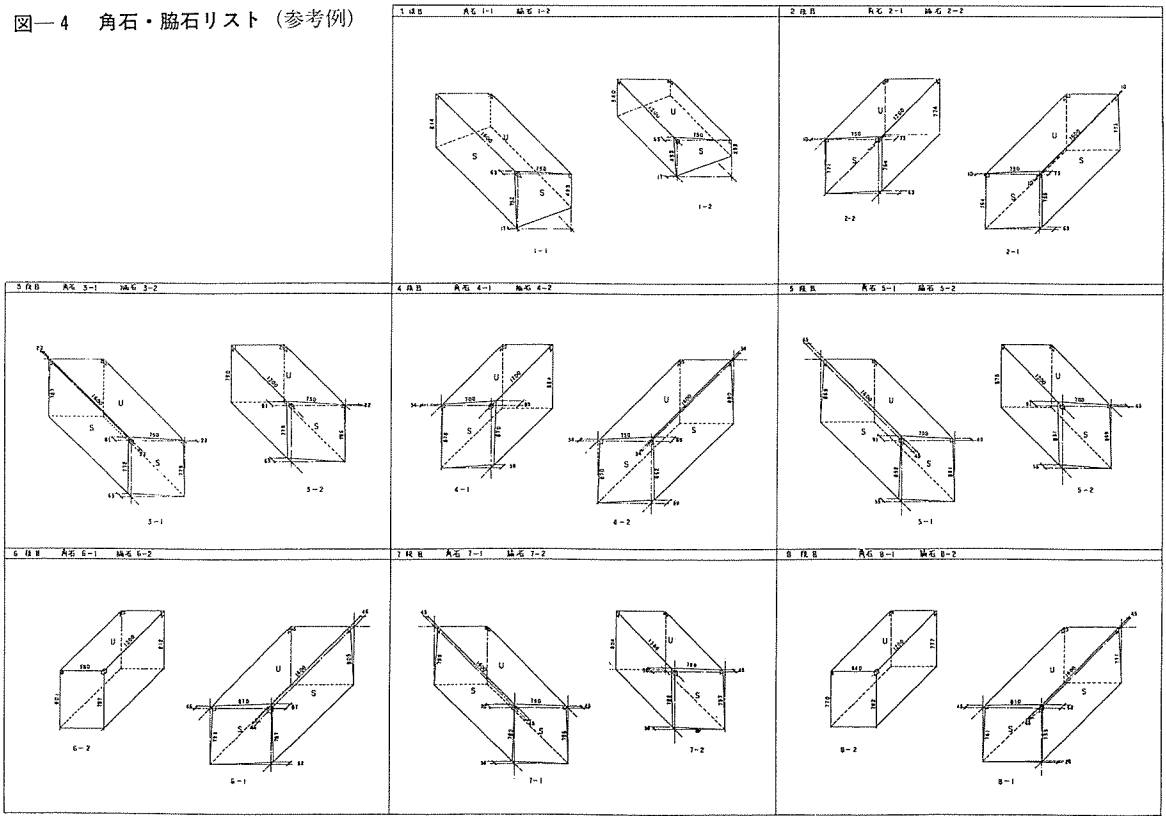
トを選定し、両ポイントを
結ぶ水平線を基軸とする。
その基軸上に垂直に、立面
にメッシュをかける。メッ
シュのピッチは五百ミリを
原則とし、対象石垣によっ
ては一メートルを採用する
場合もある。これらのメッ
シュデータから得られた情
報を各横断面図、縦断面図
として図化する。これらの
作業を通じて、この城石垣
の持つ特徴と、創建後に変
形した箇所、^{はみ}みや陥没し
た部分等を読み解くことが
できる。特に出隅における
横断面線、出隅の突っ込み
角度は大切である。石を積
み直す時の重要な指針とな
るとともに、この城石垣の
形状を決定づけるものだけ
らである。

これらのデータに加えて、
現場で実測した各横断面線
縦断面線の長さ、各個の石
の寸法、角度等を考慮して、
城石垣の創建時の元の姿を
再構築していく。この作業

は決して創作ではなく、極めて必然的な形態へと
導かれていく作業なのである。したがって、石垣
の修復が成功するか否かは、この段階でかなりの
確率で決定される。にもかかわらず、検討すべき
内容のある図面が殆んど提出されないのが現状で、
仮に示されても図面の良し悪しさえも判断できて
いない状況を、残念ながら多々見受けける。そして
また逆に、充分検討された図面を基に設置された
帳張りを、現場で「帳張り検査」と称して個別に
アレコレと勝手に移動させてしまふ「石垣コンサ
ルト」なる者が存在する。何をか言わんやで
ある。「帳張り検査」とは、いうまでも無く、図
面通りに帳張りができているかどうかを検査する
ものである。この「石垣コンサルタント」は、あ
るいは創作石垣とでも勘違いしているのかも知れ
ない。

図一 3 は城石垣の修復・復元の計画・設計図の
一例である。これらをよく見てみると、城石垣は、
その縦断面が単純に一つの断面形状で決められて
いるのではなく、僅かに変化している幾つもの断
面が連続して構成されていることが理解できる。
言い換えれば、繰り返しになるが、石垣面は僅か
な捻りを持っていることが判る。この事例に限ら
ず、殆んど全ての城石垣は一つの縦断面形状で規
定されることはない。まれには、ある法則にのっ
とった縦断面の形状にのみこだわりの持つ人がお
られるようであるが、刻々と変化する断面の形状
は、比較変化率法とでもいふべき法則に当てはめ

図一 4 角石・脇石リスト (参考例)

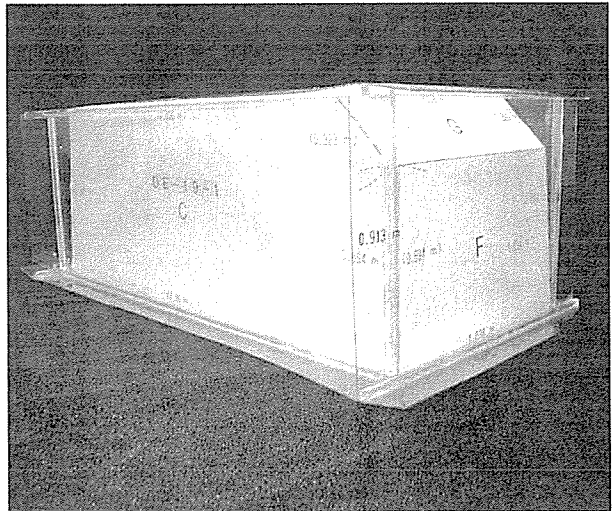


たほうが良いのかもしれない。

図一 4 は城石垣の出隅に用いられている角石の立体図面である。前述した数々のデータを基に割り出した寸法と角度を根拠としている。ここでその詳細を述べるには、紙面が不足するので割愛させていただく。また写真一は、この角石の立体図面を基に作成した、角石の縮尺十分の一の模型である。これらの模型の石を積むことによって、実際の修復・復元工事の前に城石垣の修復・復元完成後の姿を確認することができる。しかしながら、角石の立体図面で加工可能な図面に出会うことはごく稀で、あいかわらず職人任せの現場合わせが多い。そろそろ正規な図面に基づいた施工をするべきであると思う。

近年、図面作成にはCADが用いられることが多くなった。城石垣の修復・復

写真一 1 角石の立体模型



元の計画・設計図の作成にもかなり有効で、城石垣の調査されたデータがもとも三次元であるので、CADにはなじみ易い。作成された図面を三次元として立体的に見ることができるので、修復・復元後の城石垣の姿を見るには重宝である。鹿島建設㈱が開発した城石垣の調査・解析から修復・復元後の姿をシミュレーションするシステムは、このためのシステムとしては優秀である。

城石垣の修復・復元の計画・設計図の作成は、石垣の種類によって変わることはない。その石垣が野面積みであろうと、打ち込みハギであろうと、切り込みハギであろうと必要である。なぜなら、城石垣の構造は、全て基本的に同じだからである。

そして、城石垣修復の命ともいうべき、この図面の作成は、まさに現場を司る石工の棟梁と同じ感性、経験を持ち、ある意味では、石工以上に石垣の特性を知り、本来の石垣の軌跡を見通す能力が無ければできない。私の知る限り、創建当時の石垣に最も近い数値の図面を作成できるのは、建築家外村信三氏を右に出るものは居ない。それは数多くの城石垣の図面を作成し、石から学ぶことを覚えた者のみを知る処でもある。施工時期の段階で、旧石が図面の寸法に寸分違わずピッタリと納まる時の気持ちは、何ものにも変えがたく、現場で作業する者たちにとって、これ以上の安心はないのである。

三、施工

ここまでの現況・事前調査、修復・復元図の作成といった準備を経て、いよいよ実際の石組みの現場に臨む。修復・復元の計画・設計図を基に、各現場における施工図を作成し、帳張りができる。高さが二十メートルを超える石垣や、長さが百メートルを越す石垣はそれほど珍しくはない。帳張り技術それだけでも、修復・復元の成否を握る重要な役割りを担っている。帳張りに沿って石を組み上げていくのと平行して、裏込め石を施工していく。

石垣修復・復元の大原則は、元の場所に元の石を戻すことにある。勝手な変更は許されない。元の石が損傷し使用できない場合、新補石で充当す

ることになるが、そのような場合でも事情は同じである。その上でなおかつ石積み作法を守らなければならぬ。逆さ石や目違いのような石垣の命にかかわるような過ちを犯してはならないし、控え長さの不足や、石の据わりの不安定さに対する補強も確実に施さなくてはならない。また特に角石の施工に関しては、決して大袈裟ではなく、水糸一本の精度が要求される。何故なら手元で一ミリの誤差は、十メートル先で十センチ、二十センチの誤差を生むからである。これらを可能にするのは、石工に蓄積された歴史的技術と現代科学から生まれた新しい技術の融合にある。

このような高度な技術を駆使できる石工の職人軍団は現に存在し、更にハイレベルな技術を獲得することも可能である。

城石垣の修復・復元 今後の課題

以上見てきたように、日本の城石垣の修復・復元には、さまざまなレベルでさまざまな技術と見識が要求される。中でも重要なのは、たとえ技術が優秀でも、城石垣が何たるかを理解する能力がないと何の役にも立たない、ということである。

全国で行なわれている城石垣の修復・復元の現状をみると、発注者側にも受注者側にも、城石垣について深く理解しているプロが、残念ながら、ごく少数しかいないことが歴然としている。したがって今後の課題の第一は、城石垣の修復・復元の

プロを一日も早く養成することである。そうしないと、修復・復元とは名ばかりの目を覆いたくなく城石垣が、次から次へと出現することになる。素人による修復・復元は直ちに止めるべきである。

第二の課題は、全国の城石垣のデータベース化である。その城石垣を今すぐ修復するにしろしないにしろ、やがて来るその日のために、その現況を調査しデータを保存すべきである。それは文化遺産を継承し、次の世代に引き継ぐ我々の義務である。そして、現況・事前調査——修復・復元の計画・設計図の作成——施工方法、の手順を標準化し、スタンダードを確立しなければならない。

そうすることによって、はじめて全国の城石垣の修復・復元の質が保たれ、後世に恥じないものになるのである。

最後にこの文章を書くにあたって、城石垣の修復・復元の計画・設計図の作成に深く関与している(株)スタジオ・シンプトンの外村信三氏からの資料提供に対し、謝辞を表したい。

小林善勝／こばやし・よしかつ

（株）小林石材工業代表取締役

一九三七年生まれ。中学校卒業と同時に先代

（父）善一に弟子入りし、寺院・造園・土木・

建築等の現場で修業。二二歳の時より職人として働

きながら、先代に代って現場の指揮を執る。八六年、

（株）小林石材工業に組織を改め、代表取締役就任。

八王子城、甲府城、仙台城その他各地の城石垣工

事をはじめ、旭川大休寺一石塔、善光寺敷石

修復工事など、石の下、石垣工事を中心とした石

材全般にわたる研究を行なっている。

深川江戸資料館… 戻るに戻れぬ豊かさ

江東区白河に、深川江戸資料館というのがある。初めてここを訪れたのは、付帯している小ホールで東宝現代劇七十五人の会というグループの公演があったのを観るためで、ほんのちよつと江戸の芝居小屋の風情をたえたそのホールの佇まいに感心しながら、すでに展示時間を終えていた肝腎の資料館のほうはのぞかなかつた。それからしばらくして、大山ノブ代さんとふたりして深川を散策しながら、江戸の面影をしのぶというNHKのラジオ番組から声がかかって、無論一も二もなく

私のすまいろん

応じたわけだが、このとき念願の資料館との対面がなかった。

地下一階から地上二階に吹抜けになった空間に、およそ百五十年前の深川佐賀町界隈の町なみが、原寸大に再現されていて、さまざまな効果音や照明機能によって、朝から夜のふけるまで江戸の一日が疑似体験できるしかけになっている。

堀割りには猪牙船ちよきぶねがうかんでいて、無論船着場や船宿もある。火の見櫓に米屋に八百屋、屋台の寿司屋に油屋の土蔵、それに職人や遊藝師匠の御婦人の住んでいる長屋まであって、町人たちの暮らしのさまが、文字どおり手にとるように実感されるのだ。きくところによると、資材はもちろん、

金釘ひとつにいたる工具まで、すべて江戸時代のものを復元して、江戸時代の建築工法をそっくりそのまま踏襲してつくられたそうで、冗談でなくパブルの最盛期に乱立した超高級マンションを優にしのぐ工費がかかっているらしい。全体に時代の息づかいのようなものがただよっているのも、むべなるかなといったところだ。

NHKラジオ番組の取材ということで、いずれもひとり暮らしという職人と、遊藝師匠の御婦人の、無論共同使用の井戸や便所は別棟になっているこの長屋にありがちませてもらったのだが、九尺二間とはよく言った、暮しに必要なものすべてが、ちよつと手をのばせばとどいてしまう空間に納められている合理性に、感嘆させられたのである。

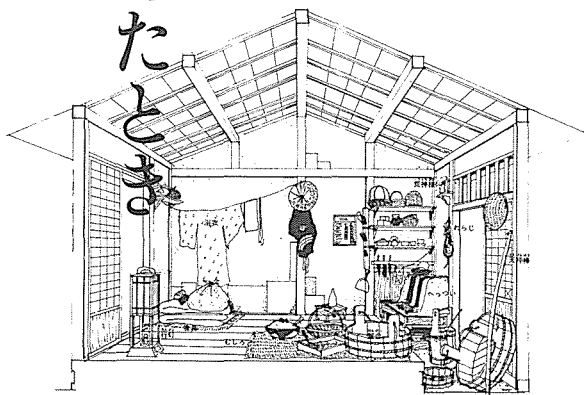
竈と水瓶のあるあがり框から六畳一間を見渡せば、仕事着である半纏は壁にかけられて、押入れや箆箱はおろか小机ひとつなく、商売道具の工具は片隅に置かれている職人の住まいなど、箱膳の上に茶碗と箸とお椀に小皿があって、一方の隅に煎餅布団がたたまれているといった、ただのこれっきりである。ただのこれっきりで、現行日本国憲法の保障している「健康で文化的な最低限度の生活を営む」ことのできる事実を確認するのは、ほとんど感動に近いものがある。

ひとの住まいは、これにつきている。

それでいながら、あらゆるものを石油に頼っているこんにちの社会に、あの長屋を持ちこんで江戸時代さながらの暮しを営むことを試みるなら、

廊下と縁側を失ったとき

矢野 誠一



江戸深川の長屋の暮し：棒手振り職人の住まい。
——江東区深川江戸資料館に復元されている展示資料の解説書より
(56頁写真とも)

それにかかわる手間隙そのものよりも、途方もない経費を必要とすることにすぐ気づく。炭火でもって煮炊きをし、火鉢でもって暖をとる、夏もなれば扇子を用いて涼を招き、蚊や蠅を防ぐための蚊帳や蠅張、情報交換の場でもあった井戸端会議をともなつたかみさんたちの洗濯など、ついこのあいだまでまったくあたりまえのことであったこんな暮しに、いまさらそう簡単に戻ることはできない。

仮りにいままたこんな暮しに過ぎた昔をしのんでみようとしても、それに要する費用を考えるとみれば、そのことがある種の贅沢であり、道楽にすぎないことを思い知らされるはずである。江戸の町人たちの、こうした一見つましい暮しぶりだが、じつは贅沢に通じ、この上もなく豊かで繊細な文化に支えられていたことに気づくのであり、二十世紀の間は便利さと合理性を追求するあまり、石油とコンピューターを用いすぎたことによって、この贅沢で、豊かで、繊細な文化を、暮しのなかから追い出してしまった。

正蔵の長屋… 長火鉢とサイホン

二十三年前の正月に、彦六という隠居名で逝った落語家林家正蔵の住んでいた稲荷町の長屋がなつかしい。仕事がらみもあって、親しくしていただいた師匠だったから、あの長屋には何度となくお邪魔している。

もうその時分の東京でも長屋が珍らしくなっていたから、長屋住まいの師匠ということで、しばしばマスコミにも紹介され、当人もべつにそれを苦にするでもなかったが、ほとんど例外なく棟割長屋と紹介されたのには、いささかつむじをまげていた。棟を中心に、表と裏と背中あわせに割られた長屋が棟割なので、

「俺んとは、長屋じゃあるけど、棟割じゃあねえッ」

というわけだ。もつともいったんそう啖呵を切っておいて、すぐに、
「だからと言って、威張るほどのことじゃあねえ」と結ぶのがつねだった。

それにしても、林家正蔵のいかにも藝人らしい長屋暮しの風景を垣間見ることができたのは、やはり仕合せであったし、いまにして思えばいい体験だったとつくづく思う。その藝人らしい長屋暮しの風景の、最も象徴的なものが、台所と隣接した六畳ほどの茶の間の、そこが居場所とところえる小さな文机を前にした正蔵の右脇に置かれた長火鉢であった。

長火鉢。ながいこと長火鉢がほしいと思っっているのだが、いまだに果たせずにいる。古道具屋をのぞいてみても、いいものには目のたまのとび出るような値段がついている。ついこのあいだまで、どんな家にも長火鉢があったもので、無論私が子供時代を過ごした家にもあった。戦後の生活様式の変化が、たちまち長火鉢を茶の間から追放して

しまったわけだが、いったいどこへ行ってしまったのだろう。

世話物の舞台で見てもわかるように、長火鉢は生活道具であって、暖房器具ではない。春夏秋冬一年を通じて置いておくものなのである。いくつかの引き出しがついているのもそのため、その引き出しにはいつにいつ入るもので、その家の主の暮らしの一端がのぞけるようなところがある。戸板康二に『長火鉢』という随筆があつて、「ぼくの家の長火鉢は、下のほうの大きな引だしに、いつも海苔がはいっていた」という一節がある。湿気を防ぐ、これも暮しの知恵だが、ある時期の東京山の手の生活感がただよっているようだ。

長火鉢のなかに置く湯沸しを銅壺というのは、銅製だからだろうが、端に渡してある板のことを猫板とよぶのは、ただでさえ寒がりの猫が好んでここにすわるからである。いまだきの、ペットとしてもはやされている猫たちには、もつと素敵な居場所が用意されている。猫のいなかった林家正蔵家の長火鉢の猫板には、いつもサイホンが置かれていて、夏でも銅壺で沸かしたお湯で淹れた珈琲をもてなしてくれたものだった。なにしろ落語家で最初にホームスパンのジャケットを身につけたと言われる林家正蔵だけに、長火鉢とサイホンといったミスマッチにもうつつりかねない図に、なんとなく大正モダンリズム調の風情が感じられて、悪いものじゃなかった。

それにしても生涯長屋暮しだった林家正蔵とい

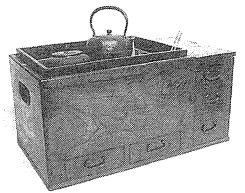
うひとの生活倫理には、大方の落語家とはひと味ちがった、一本筋の通ったところがあった。ことの良し悪しは置くとして、いかにも正蔵らしさに貫かれたその生活倫理は、やはり長屋暮しという背景と、切り離せないものがあつたような気がする。つまり長屋暮しという面をつけて、生涯はずそうとしなかった人間としての筋道で、あくまでそれは正蔵自身が勝手に定めたものである。長屋暮しという面についてひと言すれば、林家正蔵の没した一九八二年当時、この正蔵家の家賃は一万八千円だったそうだ。テレビ出演料が一席三万七千円だったことといっしょに、つい最近になって知ったことである。

地下鉄銀座線を稲荷町でおりてすぐのところにあつた林家正蔵の住んでいた長屋は、いわゆる九尺二間であつたかどうかは定かでないが、「林家」と染め抜かれた紺暖簾のかかつた格子扉をあけると、ほんのかたちだけの沓脱ぎがあつて、左が畳二畳ほどの小部屋で、そこが書庫になつていた。読書家で若い時分樂屋に『中央公論』を持ちこんでアカだと言われたこのひとらしく、おびただしい数の書籍が部屋一杯に雑然と積みあげられていた。長谷川伸の著作だけが一ヶ所にかためられていたように思う。入口にかけられた「小心居」という、それこそかまぼこ板状のものに書かれた札の意味を、文字通り「小心者の住い」だと思つていたが、敬愛していた三代目柳家小さんの心で居たいという思いもこめられていたのだと、

これは正蔵が死んでからなにかで読んで知つた。二階があつて、ここには伊藤晴雨の筆になる芝居噺の道具がしまつてあつたそうだが、私はのぞいたことがない。

その長屋暮しという面をかぶつた林家正蔵流の生活倫理だが、藝人としての則をこえないといふところにつきていた。

寄席のある上野、浅草、新宿、池袋、どこへ行くにも地下鉄を利用した。無論そのため定期券を購入していた。ところがこの定期券、仕事先である寄席や放送局へ出かけるときだけ使用して、私用で地下鉄を利用するときには絶対に使わずに、わざわざ切符を買つたものである。定期券とは仕事をやるひとのために割引になつてゐるのだから、遊びに行くときにまで使うものではないというのだ。タクシーは、晩年までほとんど利用しなかつたが、それでも乗ったときには独自の料金支払システムがあつた。表通りで車を捨てたときには、メーターに表示された正規の料金を支払うのだが、細い路地などにはいりこんだときには、ワンメーター分余計に支払う。自分のつごうで路地にはいりこんだのだから、次の客のひろえるところまで走る分くらい加算してあげないと、運転手に申し訳けがないといふのである。自宅まで新聞記者が



長火鉢。

社旗を立てた車で取材に行くことがある。そんなとき、長屋の前に駐車して待っている運転手のところに茶をはこぶ弟子に、さり気なくその車が新聞社の車輛部の白ナンバーか、ハイヤー会社の営業車か調べさせ、ハイヤーのばあいには、帰りが「交通安全よろしく」などと言いながら祝儀袋を手渡す。白ナンバーのときは、運転手も新聞社の社員だからと、祝儀がわりに名入りの手拭などあげていた。

仕事のギャラをあらかじめきくことは絶対にせず、ただけのものだけ有難く頂戴した。ときに地方へ出かけて思いがけなく多額のギャラが出る、いくらか返してやることもしばしばだった。そんなとき同行した弟子にも、返すように命じたという。「正直言つて、返すのつらいときありました」という弟子の述懐は本音だろう。たまたま同じ日の同じ時間に、仕事が重なつてしまふことがある。こんなときだけ、先方に自分のギャラを問いあわせた。ここで高く出してくれる方に行くなら当り前だが、正蔵は安い方に出かけたのである。高くくれるところは、自分が出かけなくても誰かが行ける。安いところは、自分が断つたら行くひとがいないというわけだ。パーティの誘いなども少なくなかつたが、会費制のものは極力出席するようにつとめ、やむを得ず欠席のばあいは、会費だけ弟子にとだけさせた。「御招待」とあるパーティはすべて欠席というのも、正蔵流交際法の極意を見る思いがする。

こうした独特の金銭哲学に裏づけられた林家正蔵の生活倫理と、それにもなう行動は、このひとが長屋住まいしているからこそ生きて輝くので、住まいというものは、そこに住むひとの生き方の根本に作用するのだからを内包していることを、教えてくれたのだ。

廊下と縁側… 無用と贅沢の喪失

さて、私のはなしだ。

廊下も縁側もない家に住んで、いつの間にか四十年を越してしまった。あの六〇年安保闘争で世のなか騒然としていた時分まで、まだちゃんとした廊下と縁側のある家に住んでいた。茶人だった祖母が戦前代々木八幡に建てた、水屋のついた茶室のある数寄屋造りの、瀟洒な住まいだった。

戦前の日本家屋に廊下と縁側は欠かせないものだった。一九二三年の関東大震災後の東京復興は、世に謂う文化住宅を輩出させたが、家庭の象徴とまで言われた竈を台所から追放しておきながら、廊下と縁側を見限ることはしなかった。

遊びにかまけて、受けた大学の全部に落ち、やむなく試験のなかつた文化学院にもぐりこむかわら、小さな新劇団の演出部に籍を置いて、発表のあてもない映画作家論など書いていた。一九五四年のことで、要するに親の臍などかじりながら無為な日日を送っていたのである。もちろん無為に過ごしていると見ていたのは親をふくめた世間

のほうで、それが青春の充実した生き方だという気負いにはあふれていた。そんな無為と気負いの入りまじった鬱鬱とした時間を過ごすのに、縁側というのはしごく格好な空間であったように思う。こんな、暮しというにはあまりに貧しい日々が、あの六〇年安保の騒ぎまでつづいた。

安保体制打破新劇人会議なる組織の一員として、連日デモに参加して国会をとりかこみ、昂揚する気分というものをほんとうに肌で感じた。ところが樺美智子さんの不幸な死のあった六月十五日以降、運動は急速にしぼんで、新安保条約批准書の交換された六月二十三日、新劇人会議にはもはや動員をかけるからがまつたくなかった。何人かの仲間を誘い、やりきれない気分分で国会まで車をとばした。午前零時。国会を取りかこんだ群衆のなかから、なんとも言えぬ嘆声があがり、ニュースカメラのライトが夜をあざむいて、やがて消えた。ひどくむなしい気分分で家路につき、自分で戸閉りをして、家族の寝静まった気配を感じながら、暗い廊下を自分の部屋にはこんだ足の裏の感触を、いまでもはつきり思い出す。

敗戦後まともに働くことをしなかった私の父は祖母の建てたその家を維持しかねたのだろう。百坪ほどあった土地の半分を売り払い、その金で残された土地に貧弱なアパートと、賃部屋つきの住家を建てた。六〇年安保の騒ぎのあったあくる年のことである。いろいろ私の暮しから廊下と縁側がなくなった。自分でも恥ずかしいくらい気障なこ

とを書かしていたのだが、あの六〇年安保闘争というのには、私にとって貧しい青春最後の輝きで、そして廊下と縁側のある暮しとの別れであった。

いまでもたまたま向田邦子のテレビ・ドラマなど見ると、奇妙に甘ずっぱい感慨に襲われる。向田邦子ドラマの登場人物のみんながみんな、持てる性格の加減にかかわらず、廊下と縁側のある暮しぶりを、どこかその身につけているからである。そのあたりがひどくなつて、せつなくて、もしかしたら日本人は廊下と縁側を思い切りよく捨てたおかげで、とても大切なものを失ってしまったのではなどと考える。

廊下も縁側も、日日の暮しに必要欠くべからざるものではない。なんの役にも立たない無用の空間であるとも言える。だが、意味なくそこに佇んだ無用の時間が、無用は無用として、しごく贅沢で、豊かなものであったような気がしてくるのが不思議である。

とりとめもなく、垣間見た長屋の暮しや、わが身にてらした実感などを書きつづってきたのだが、こんなことで私の「すまいろん」になったかしら。

矢野誠一／やの・せいいち

一九三五年東京生まれ。麻布学園、文化学院に学ぶ。演劇・演藝評論、評伝、エッセイ等執筆。著書に『志ん生のいる風景』（青蛙房）、『都新聞芸能資料集成 大正編・昭和編上』（白水社）、『戸板康二の歳月』（第10回大衆文学研究賞・文藝春秋）、『酒と博愛と喝采の日』（文春文庫）、『三遊亭圓朝の明治』（文春新書）、『エノケン・ロッパの時代』（岩波新書）、『荷風の誤植』（青蛙房）、他多数がある。

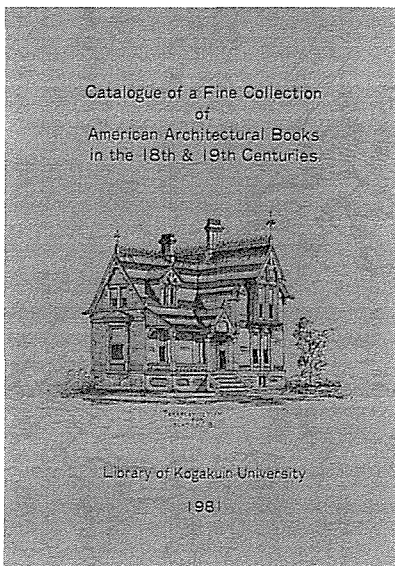
新宿駅から歩いて五分。

不動産屋の広告ではありません。工学院大学の場所です。そんな便利なところに、図書館があります。ぜひご利用ください。

工学院大学は工学系の大学ですが、学園として一二〇年近い歴史があり、工学に關した一般書籍、雑誌の蔵書には誇るものがあります。なかでも自慢できるものに、「ヒッチコック・コレクション」「今和次郎コレクション」があります。「ヒッチコック・コレクション」は、一九七八年に八王子図書館新築記念として開設したもので、故・武藤章先生を中心に、建築学科の協力を得て収集したものです。また、「今和次郎コレクション」は、荻原正三先生のご尽力で、工学院大学の蔵書となったものです。「今和次郎コレクション」については、早稲田大学の蔵書という話もあったようですが、話が進まず、

蔵書探訪・蔵書自慢

の自慢話 初田 亨



ヒッチコック・コレクションの目録

今和次郎先生のご家族や、竹内芳太郎先生、川添登氏、内井乃生先生などのご高配もあり、工学院大学でお引き受けすることになったとうかがっております。「今和次郎コレクション」を開設したのは一九八四年です。私が助手の時、故・今和次郎先生の保谷のお宅にお伺いし、作業の一部をお手伝いしたのを懐かしく思い出します。これらの蔵書は、いまになってみれば、工学院大学の貴重な宝であります。

一八、一九世紀アメリカの建築図書九〇〇冊 「ヒッチコック・コレクション」

インターナショナル・スタイルの定着に務めた、アメリカの建築史家 Henry Russell Hitchcock(1903-87)については、ご存知の方も多いと思います。「ヒッチコック・コレクション」

「ヒッチコック・コレクション」は、彼の蔵書を中心としたもので、一八三〇年から一九〇〇年までの七〇年間にアメリカで出版された、建築関係の図書やパンフレット類など約九〇〇冊の蔵書です。

この頃のアメリカの建築界は、ヨーロッパの影響から脱して、独自の世界を築き始めた時期にあたります。一八五七年にはアメリカ建築家協会が創設され、一八六六年にはM・I・Tに建築学科が設置されており、一八六八年にはアメリカ最初の建築雑誌の発行（フィラデルフィア）がありました。また、一八七一年はシカゴで大火があつた年で、シカゴ派が活躍をはじめた頃でもあります。

コレクションには、大型の建築図版集も多く含まれております。また、武藤章先生がヨーロッパで収集した、ガルニエやラスキン、シンケルなどの貴重本十数冊も含まれています。今年の三月には、横浜国立大学・吉田鋼市先生の編訳によって、中央公論美術出版からトニー・ガルニエの『工業都市』が出版されましたが、この出版にヒッチコック・コレクションが役立っています。

考現学の創始者・今和次郎先生の蔵書、研究ノートなど五六〇〇冊 「今和次郎コレクション」

「今和次郎コレクション」は、今和次郎先生

住総研図書室だより

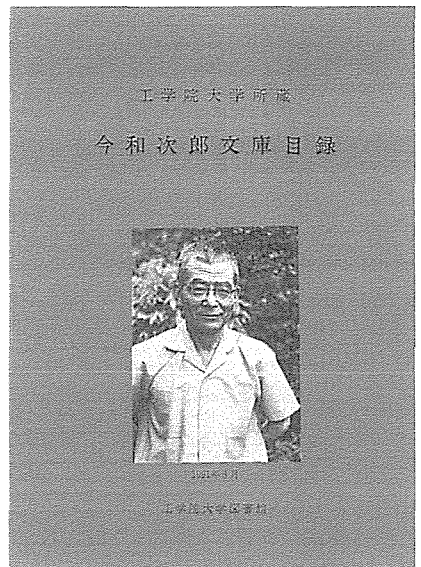
2

工学院大学図書館

の約五六〇〇冊の和洋蔵書と、スケッチ、研究ノートなどからなります。今和次郎先生が亡くなって約一〇年後に、書齋の中身一式を受け継いで開設しております。

先生の業績については多くの方が知っておられることと思います。長い間、早稲田大学で教育・研究を続けられ、民家の研究、考現学の創始、住居論、生活論、家政論、服装研究、造形論など、幅広い研究と評論活動をなされておられます。一九七一年には、民家、住居、生活に関する研究を通じて、人間性に立脚した建築計画・設計への新しい視野を拓かれた功績により、日本建築学会大賞を受賞されておられます。また一九六一年には、工学院大学でも講師として「日本文化史」を講義していただいたことがあります。

「今和次郎コレクション」のなかでも、一九



今和次郎コレクションの目録

一〇年から一九三五年の考現学関係の資料は社会から広く注目され、一九八八年六月の日本生活学会「今和次郎生誕一〇〇年・学会一五周年記念展——考現学は今」以来、セゾン美術館、青森県立郷土館、新宿歴史博物館、三重県立美術館、神奈川県立近代美術館、渋谷区松濤博物館、横浜市歴史博物館、東京都江戸東京博物館などなど、多くの美術館、博物館などに資料を貸し出し、展示しております。

「ヒッチコック・コレクション」と「今和次郎コレクション」の書籍、雑誌については蔵書目録がつくられており、利用しやすいように整理されております。蔵書目録については、作成した時に全国の大学および図書館に配布しておりますので、そちらで見られた方も多いことと思います。

「ヒッチコック・コレクション」および「今和次郎コレクション」の書籍・雑誌については、八王子校舎のほうに所蔵しており、八王子校舎で閲覧できますが、必要があれば、新宿校舎に取り寄せて閲覧することも可能です。大学の図書館なので、自由に誰でも入れるわけはありませんが、私工大懇話会図書館連絡会加盟大学の学生や教職員なら、学生証や教職員証を提示すれば入館できるようになっています。もちろん、その他の学生や教職員でも、大学図書館の発行する紹介状があれば入館することができます。ぜひご利用ください。

初田亨／はつだ・とおる

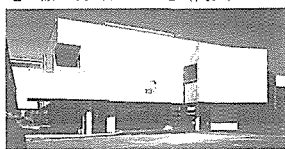
工学院大学建築学科教授、工学院大学図書館長。

一九六九年、工学院大学建築学科卒業。日本近代建築史・都市史専攻。著書に、『繁華街の近代—都市東京の消費空間—(東京大学出版会)、『職人たちの西洋建築』(ちくま学術文庫)、『和風モダンの不思議—(王国社)、『模倣と創造の空間史—西洋に学んだ日本の近・現代建築』(彰国社)など多数がある。

工学院大学ホームページ：
<http://www.kogakuin.ac.jp>



工学院大学新宿校舎(写真中央)。
2階、3階に図書館があります。
所在地：東京都新宿区西新宿1-24-2
電話：03-3342-1211 (代表)



工学院大学八王子校舎図書館。
所在地：東京都八王子市中野町2665-1
電話：0426-22-9291 (代表)

あなたにとつての原風景とは？

私は一地方都市のどこにでもありそうな住宅地で一九年間育った。我が家は親戚から「新宅（しんたく）さん」と呼ばれていた。その後も「新宅」に移り住んだ人たちもいるのだが、田舎から地縁の薄い新興住宅地に移り住んだのは、我が家が第一号であり、その当時の呼び方が今も残っているのだ。

この住宅地は、移り住んだ当時は一キロメートルほどの国鉄の駅まで、道と関係なく一直線で歩いて行けたそう。高度成長期で、農家が畑をちよつとずつ住宅地に変えていく最中で、駅まで家が全く建っていなかったと祖母たちは懐かしそうに言っていた。それも駅周辺から徐々に開発していたわけでもないところが、興味深い。まあ、単に土地勘のない田舎者の祖母たちが営業に乗せられたのか、もしくは駅まで徒歩圏なら安い所ではないかと思つたのか、今となっては知る由もない（現在はもちろん道路を通って行くから三〇分以上要する。しかし徒歩五分の位置に新駅ができた。町は変わっていく）。

話が想い出話にそれについてしまつ

たが、私の原風景はこの住宅地なのだ。畑ごとに無秩序に住宅への転換が進んでいった土地なので、「新興住宅地」の単語からイメージされる大規模な造成の秩序性はない。スイカ畑を潰した砂山の形状そのままなので、真砂・堀割・青山・浦山など地形のわかる住所も残っている。けれども原風景としてよく語られる原っぱで蝶を追いかけた記憶も、公園で遊んだ記憶もない。公園は近くにあるものでなく、休日にわざわざ遊びに行くところであった。まるで東京下町の子どものように、ほとんど車通りのない家の前の道でゴム跳びをしたり、缶けりや鬼ごっこをしたりして遊んだ。地方都市といわれるだけあって都市化した風景であり、豊かな原風景とは言えない。

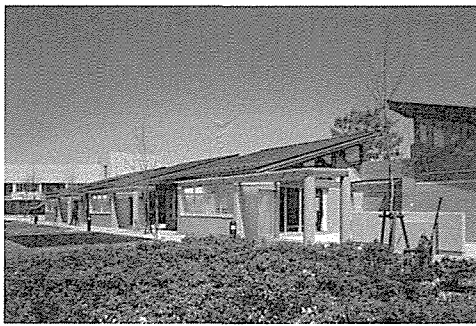
この私の原風景が、「未来に再び我が身を置きたい願望の場所のイメージ」であり、「住まいや環境の理想の象徴」であるとは到底思えない。地方都市の住宅地に育つたものの典型であろう。

しかし、原風景の中に私の理想的な環境の条件が潜んでいることは真理であるという直感がある。だからどこかに

肯定的な記憶を呼び起こし、「真」ではない部分を必死に探しているような気がする。それは原風景と言うよりは想いのアイコンであるのかもしれない。設計事務所での充実と挫折

学生の頃、街づくりに積極的に係わる建物を設計できる事務所働きたいと考えていた。そして中規模の組織事務所にて職を得た。学校、大学病院、駅前再開発、団地計画、動物園から官庁施設など、幅広い業績がある事務所である。

入社してまもなく、あるニュータウ



写真一 ニュータウンの小学校
平屋建ての低学年棟 下屋はクラスボックスと呼ばれる教室ごとの昇降口。

ンの新設小学校の基本計画・基本設計に携わることになった。企画が上がったときからぜひ参加したいと希望していたことなので、とてもうれしかった。このニュータウンの開発コンセプトは「健康」と「環境」を二大テーマにしていた。

○バリアフリーを徹底した道路整備

○地域の歴史・自然環境を取り入れた

緑化計画

○環境共生・地域とのつながりを考えた小学校づくり

○健康生活を支援する公園・歩行者専用道路の整備など魅力ある街づくりなどを他社コンサルタントと共に議論していった。

そんな街づくりの中で、初期に建設される公共施設として小学校は街の景観の牽引役でもあった。街区公園とグラウンドが一体と見えるような整備をすることや、学校林を設け歩行者専用道路にも同じように緑を形成してもらうことなど、学校側から提案し実現したことなども多くある。児童の生活空間として学校も「住まい」であるとの意識から、周辺住宅から突出しないよ

う校舎を二階建てとした。なかでも低学年棟は平屋とし、各教室に昇降口を設け外部空間との一体的な利用を積極的に行なえるようにしたかった。多くの議論を要したが粘り強く周囲を説得し、実現できた。しかし屋上・壁面緑化、教室ごとのパシブソーラーの導入、クラブハウスの設置など、多くの提案がメンテナンスの不安や既存校とのバランスを欠くなどの理由により断念せざるを得なかった。とても残念であった。

それより私にとっても辛かったのは、実施設計に入り詳細を詰めていくことや、工事監理をすることができなかったことである。事務所組織内において計画系と実施監理系の職能を分ける方針からである。基本設計時のコンセプトを損なうことなく完成するのは見守るしかなかった(写真1)。

その後、神戸の高級住宅地における二〇〇戸の民間集合住宅のプロジェクに係わった。これも同じように基本設計までで事務所の方針から完成まで携わることができなかった。その後、いくつかの仕事に参加した。状況は同じであった。全てが幸せな状況で設計ができないことは百も承知であるが、自分の身体感覚を大事にし、空間の心地よさを提供することが務めであると思っているものが、最後の詰め的重要

な部分に携われないことに苛立った。

誰が施工しても同じに出来上がる図面を描くことが設計者としてのプロフェッショナルだと言われたが、基本設計だけでそれが可能なのか？多くの先輩方に聞きたい。ディテールの探求なくして、望んだ空間ができるのか？標準仕様番号を記載しさえすればよい訳ではない。コンセプトが尊重されなかったのは何故原因なのか？詰めの甘さなのか、施工への配慮か？コストコントロールか？……きりがないのでここまでとする。

小学校の設計においても「住まい」としての意識を強く感じたいせいか、良好な街づくりは施設だけではなく、個々の住処の集積によっても可能ではないかと考えるようになっていた。そのような個人住宅やテベロツパーが係わらない小規模な集合住宅などの設計に巡り会う機会は得られなかった。

建築求道へ

上記のような不満を解消するべく新天地を求めて転職した。ここでは商業施設の設計から工事監理まで一つの流れを全うすることができた。前職での計画で終わっていた不満は解消された。この貴重な経験の中で、設計上の詰めめ、甘さを体感したり、逆に出来上がっていく過程で現場検討をしてよりよく納めることができたり、予算・時間の

コントロールの仕方、施工者との戦い方など、とても勉強になった。

しかしその後、企業家の利益を最優先にし、その街にそぐわない計画の設計提案を強いられた。またnLDKとパターン化している住居形式の建物の企画などで空虚感に襲われた。そこで私の目指す「住まい」の形を求めて、建築修行のできる処を探し始めた。私の理想とするビジョンを持った建築家の門をたたいているが、あたっては砕けを繰り返している。決して仕事が多いとはいえないこの時代にその道は平坦でないかもしれない。これが私の「道半ば」である。

理想の象徴としての「むら」

私の原風景は豊かではないと前述したが、「住まいや環境の理想の象徴」はある。それは「むら」であり、「集落」だ。集まって、助け合って住む緑豊かな場所のイメージである。松川集落とか特定の地域ではなく、

象徴としての「むら」である。茅葺きの屋根、焼杉の縦羽目板張り、ちよつと風化して一部崩れた土壁、軒の出の深い日当たりの良い縁側……。そんな日本家屋が、アイコンとなっている(写真1と2)。

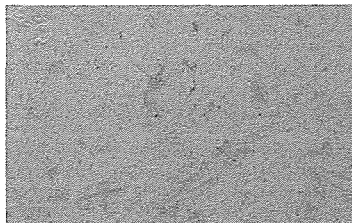


写真1-2 長年技術が培われた味のある土壁。

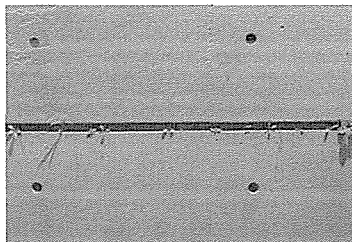


写真1-3 今後技術が培われてこんな環境共生RCが定番になって欲しい。

失われしものを美化する単なるノスタルジーなのか？自分でもまだよく解らない。しかし全く同じものを再生するのではなく、現代にあった身体感覚に密着した親しみのあるもの、その空間が好きでその心地よさを大切に育てていこうと思う自然な気持を湧かせるものが大事だと思う。こうして住み手の環境への愛着度が上がっていけば、時の経過と共に豊かな風景が戻ってくるのではないだろうか(写真1と3)。

同じ「理想の象徴」を持って一貫した仕事を実践してきた人と共に仕事が出来たいと現在アプローチしている。まだまだ道半ばだが以前に比べて道がはつきりしてきた。そんな途中だから、「道中」に格上げか？と思っている。

松川真由美 / まつかわ まゆみ
新潟県出身。一九九五年、千葉大学工学部建築学科卒業。一九九七年同大学院工学研究科修了。建築道中の真つ最中。

最近のいき

平成一六年度事業計画と予算が議決され、評議員が改選される

三月二六日定例理事会において、平成一六年度の事業計画と予算が議決された。この事業計画と予算をベースに、新年度の諸活動を展開することになる。

事業としては、研究活動に重点を置いて実施するが、新年度は特に研究助成枠を増額することにより、若手研究者を含めた研究活動の一層の活性化を促進することと、併せて、他関係団体との交流を図ることになる。

他に、監事・評議員の任期が前期までは一月から始まっていたが、理事同様六月一日からの二年間に変更されたうえ、評議員の改選が行なわれ、六月一日付で一名

の重任と、岡田恒男評議員の後任として村上周一慶応義塾大学教授の合わせて二名が選任された。

昨年度事業報告・決算が承認され、理事が改選される

五月二四日定例評議員会において、終了した平成一五年度の事業報告と決算が承認され、この議題は六月に開催される理事会で議決されることになる。ちなみに一五年度の事業と決算は、概ね年初計画どおりに達成されている。

そして、三月の理事会で議決された平成一六年度事業計画・予算が承認された。

また、三月理事会で議決された監事・評議員の任期時期の変更と、昨年六月の理事会で議決された特定積立金「研究助成基金」の増額についても、併せて承認された。

議決事項としては、現理事の任期満了に伴う理事の改選が行なわれ、六月一日付で

一名の重任と辞任届の出ている前田尚美理事の後任として岡田恒男東京大学名誉教授の合わせて二名が選任され、新しい体制によって当財団は運営されることになる。

日本マンション学会横浜大会で、「小規模マンションの管理」の調査研究報告を行なう

四月二五日に日本マンション学会横浜大会が関東学院大学で開催された。

二〇〇三年四月に、「小規模マンション管理の課題と解決策に関する調査研究」というテーマで当財団内に委員会を立ち上げ、研究者、金融公庫、マンション管理センター、コンサルタント、行政の方を委員として迎え、調査研究を開始した。この研究の特徴は、郵送によるアンケート調査ではなく、首都圏と北海道から九州までの地域から五三軒を選び、委員と各マンション管理組合団体に所属する協力委員により、調査

票に基づいてヒアリング調査を行なったことである。

二〇〇三年一〇〜一二月にかけて実施した調査結果を四つの大項目(マンションの概要/管理規約と管理運営/長期修繕計画と大規模修繕/トラブルの発生状況)に分けて発表し、更に、行政の実施事例二つも併せて報告した。

このテーマはマンション管理の最重要課題の一つであって関心も高く、質疑応答では、マンション管理組合団体役員やマンション管理士などの専門家による活発な議論が交わされた。



日本マンション学会での発表。

2004年

- 3/20 第4回市民フォーラム「市民と専門家をつなぐ、すまいづくり」(共催)
- 3/26 定例理事会
- 3/27 第5回「住まい・まち学習」実践報告・論文発表会
- 4/14 第78回すまいろん編集委員会
- 4/17 第9回世界のすまいフォーラム「ファスト風土化する日本」
- 4/17 第15回世界のすまいフォーラム委員会
- 4/24 第110回研究運営委員会
- 4/26 第16回ハウスアダプテーション研究委員会
- 4/28 第54回住教育委員会
- 5/12 第70回情報委員会
- 5/19 第11回小規模マンション維持管理研究委員会
- 5/23 第162回江戸東京フォーラム「音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉」
- 5/24 定例評議員会
- 6/4 定例理事会
- 6/7 第55回住教育委員会
- 6/18 2004年度助成研究キックオフミーティング
- 6/19 第3回ハウスアダプテーション・コンクール優秀事例発表フォーラム
- 7/9 第24回住総研シンポジウム「和風の誕生」
- 7/14 第17回ハウスアダプテーション研究委員会
- 7/17 第111回研究運営委員会
- 7/23 第163回江戸東京フォーラム「江戸東京に於けるスラムの発生と変容」
- 8/3 第10回世界のすまいフォーラム「出会いの場としての劇場」
- 8/3 第16回世界のすまいフォーラム委員会
- 8/4 第12回小規模マンション維持管理研究委員会
- 10/1 第71回情報委員会
- 10/16 第17回住教育フォーラム

2005年

- 1/27 第112回研究運営委員会

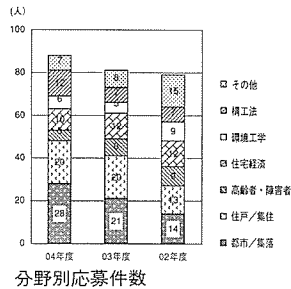
太字のものは記事を掲載しています。

研究助成の採否は情熱が決め手

―二〇〇四年度研究助成三二件内定

第一〇回研究運営委員会が四月二四日に開催された。

研究助成応募件数は、昨年より七件多い八八件で、約一か月に及ぶ査読を経て選考された。二〇〇四年度から、助成額が、一〇〇〇万円増額され、五〇〇〇万円となったため、昨年の二六件から三二件採択することができた。応募ベースで分野別件数を見ると、図のように、例年と同様、都市・聚落、住戸・集住が多いが、本年は環境工学・構工法分野の採択率が例年に比べて高かった。また、大学院生などの若手研究者の応募が漸増しているのが特徴であった。



波多野委員長は選考経過について次のように述べている(全文は住総研ホームページに掲載)。

・研究助成の採否は、その研究にかける情熱が大切で、申請書の中で、研究の意義や発想の独自性、周到な準備状況を審査員にいかにつまみいづくりを伝えるかが重要である。

・当財団の研究助成は、フィールドワークが多いのが特徴であるが、この場合、研究

組織が重要となる。特に、海外調査は、それが日本に適用可能な先進事例か、優れた方向性を示す重要な事例かなど、研究の目的との対応関係を明確にする必要がある。

・ここ数年、若手の萌芽的な研究を採択するよう努めている。成果のリスクを含みながら採択しているが、成果があったとき、審査員の喜びはひとしおである。

・また、若手の研究助成の場合、研究組織のなかに研究を指導できるメンバーがいるにもかかわらず、十分な指導や校閲を経ないままに論文が提出され、最悪の場合には論文としてまともでない例がある。若手の魅力を伸ばすためにも、単なる活動報告に終わらせないための指導が求められる。

報告内容に改善の兆し

―二〇〇三年度研究中間報告について

昨年度より、実施項目だけでなくそこで得られた知見など具体的に記述するよう、注意を喚起してきたことで、研究中間報告内容が昨年に比べて改善の兆しがみられた。しかし、調査の遅れが明らかで、研究のまともが危ぶまれるものもいくつかみられた。また、SARSの影響で、論文提出の一年延期はやむをえないものが一件あった。

委託論文を三氏に執筆依頼

初見学委員の担当による二〇〇五年度住総研シンポジウムに向けた委託論文のテーマが「郊外団地の再生」と決定した。論文執筆者として、角橋徹也氏(立命館大学)、原田陽子氏(福井大学)、曾我部昌史氏(東京芸術大学)に依頼することになった。

イベントだより

市民フォーラム

市民と専門家をつなぐ、住まいづくり

社団法人東京建築士会と晴海デザインセンターとの共催で、第四回の市民フォーラムが三月二〇日に開催された。

フォーラムでは、片山和俊氏(東京芸術大学美術学部建築科教授)から、住まい手がグループを作って、土地の取得や工事の発注を行ない、それぞれのライフスタイルに合わせたデザインで住まいを作り上げていくコーポラティブハウスについて、また、武者英二氏(法政大学名誉教授・建築設計競技審査委員長)と坂本一成氏(東京工業大学工学部建築学科教授)からは、東京建築士会が主催し、二〇〇二年二月に行なった実施コンペティションの概要や実施状況について、実際の住まい手からの意見も交えながら、述べられた。

ライフスタイルが多様化し、それにとまいない、住まいについての関心が高まるなかで、専門家ではなく市民を対象とした、住まいづくりを考えるための貴重な情報提供の場となった。



住まい手も交えた全体討論。

住教育フォーラム

新鮮な事例、共通キーワードで議論も深化

第五回「住まい・まち学習」実践報告・論文発表会を三月二七日に開催した。公募で集まった三〇編から、一〇編の発表を依頼し、九編の発表が行なわれた。

共通キーワードとして、「総合的な学習の時間」、クロスカリキュラム、絵本などの教材や表現の仕方、中学生・大学生の市民意識の育み、NPO・まちづくりセンターなど中間セクターの関わりなどを設定し、発表と全体討論を行なった。学校教諭、研究者、学生、NPO・企業のメンバーなど、発表者の立場も多様で、環境共生などテーマの広がりもみられた。討論では、「住まい・まち学習」は、一方的に伝えるのではなく、取り組みに関わった人それぞれが相互に学び合い、まちを変えていくなどの指摘があり、子どものネットワークが人をつなぎ、「交流」が「感動」につながるという延藤委員長のまとめで締めくくられた。

なお、寄せられた「住まい・まち学習」実践報告・論文と、各論文に対する住教育委員会からのコメント、発表会当日の討議内容をまとめ、「住まい・まち学習」実践報告・論文集5」として発刊する予定である。



議論が活発に行なわれた全体討論。

郊外はファスト風土化する

第九回フォーラムが四月一七日に開催された。講師に三浦展氏（カルチャースタディーズ主宰）、司会に篠崎正彦委員（昭和女子大学講師）を迎え、「ファスト風土化する日本―地方の郊外化、若者の脱郊外志向、都市の再生」のテーマで開催された。

地方の郊外では、車が生活必需品となり車社会が進展した。そして高速道路や国道沿いには大型店の出店が著しい。近年増加傾向にある地方における犯罪の発生地と大型店の立地は不思議と一致している。大型店は集客力が高いため、出店により地方郊外における人の流動性が高くなった。その結果、地域における匿名性が高くなり、犯罪が増加している。

病院や学校などの施設も郊外へ移転したため、地方の中心市街地は衰退し、人口が減り、車を運転できない高齢者が住みにくくなり、コミュニティも崩壊している。大型店の進出や幹線道路の整備により、地方でもモノが入りやすくなった。一方、地方は個性を失い、均一化された「ファスト風土」化された地域になり、寂れて、消滅する問題があると述べた。



郊外の風景。

第一〇回世界のすまい方フォーラム 予告

テーマ…出合いの場としての劇場
日時…八月三日（火）
一七・三〇～二〇・〇〇

講師…平田オリザ氏（青年団主宰）
会場…建築会館会議室（港区芝）予定

全国に公立のホールが乱立しているが、その運営は満足のいくものとはなっていない。まちづくり、コミュニティ形成の視点から考えた時、劇場の役割とは何なのか。演劇の創作現場から、劇場の意味を問いかける。

江戸東京フォーラム

新緑のもと、建築学会長が奏でる「和と洋」

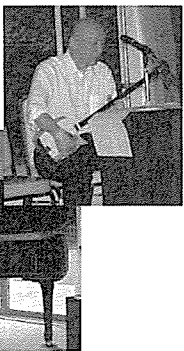
第一六二回は秋山宏氏を講師に迎え、五月二三日に開催された。テーマは、「音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉」、司会は陣内秀信委員（法政大学教授）、会場は東京都庭園美術館大ホールである。

講師は日本建築学会会長である。ピアノは子どもの頃から始め、その後、作曲理論を学んだという。四〇歳台半ばからは三味線を、最近では長唄にも挑戦しているという。専門の建築構造工学の論文を書くとき、その数倍の時間、ピアノを弾くと、迷走電流のように脳裏をかすめる想念が論文を書

くエネルギーを供給してくれるそうだ。

講演では、「西洋音楽は現代世界の覇者である。邦楽は土着の自然の観照に根ざしている音楽である。我が国は、明治以来、西洋音楽にまたたく間に席巻された。邦楽と洋楽を比較すると、和声において、邦楽が自然の立体性や調和を表現するのに適しているのに対して、洋楽は人間の能動的感情表現に適している。対位法では、邦楽は論理体系を持たないが、洋楽は禁則を伴う論理体系を完成させている。グローバリゼーション、モノカルチャー化が急速に進む現代において、鋭い感性に支えられた邦楽は貴重である」と話された。

邦楽と洋楽の違いを、ピアノと三味線の弾き語りで明瞭に示された。そして、邦楽を世界に通用するものとしたと結ばれた。民謡、長唄、クラシック等、全一曲の音色が、新緑を背景にした庭園美術館大ホールに響きわたり、参加者たちの拍手は休日の昼下がりに鳴りやまなかつた。



秋山宏氏ご自身によるピアノと三味線の弾き語り
で、邦楽と洋楽を語る。

次号予告

2004年 秋号

一〇月発行

特集…図面を読むII

吉村順三が住宅設計に残したものの
〈焦点〉

片山和俊（東京芸術大学）

〈ミニシンプोजウム〉

住宅設計―吉村順三が残したものと
益子義弘（東京芸術大学）

藤岡洋保（東京工業大学）

司会：片山和俊（東京芸術大学）

〈図面を読む〉今、同世代の建築家がどう読むか

浜田山の家

小泉雅生（シーラカンスアンドアソシエイツ）

山中湖の山荘他

北山恒（アーキテクチャーワークスショップ）

池田山の家

千葉孝（東京大学）

居間形態と家具配置
榎本英恵（小林和教建築設計事務所）

八代克彦（札幌市立高等専門学校）

〈すまいのテクノロジ〉

ディテールに隠されたもの
永田昌氏（N設計室）

〈私のすまいろん〉「インクビュー」

吉村住宅の居心地

吉村多喜子

〈ひろば〉

作りながら考えさせられた椅子
丸谷芳正（設計工房M&M）

〈すまい再発見〉

軽部岑生の山荘
服部岑生（千葉大学）

〈図書室だより〉

工学院大学所蔵 今和次郎コレクションについて
荻原正三（荻原正三建築計画研究室）

〈任総研ニューズレター〉

タイトルは仮題、執筆者は変わることがあります。

第三回ハウスアダプテーション・コンクール入賞七事例決定!

第三回ハウスアダプテーション・コンクールの入賞事例が決定した。このコンクールの特徴は、ハウスアダプテーションを実施した住宅に、当事者が一年以上居住し、生活改善が見られ、その成果に十分満足していること、また多分野の専門家の連携により取り組まれていることを重視している点にある。書類による一次審査を経て、現地調査による二次審査では、当事者をはじめ、関係する専門家からもヒアリングを行い、関係する専門家が当事者の自立促進・社会参加に、また介護の軽減にもつながっていること、連携して取り組まれた様子などを確認した。

◆優秀賞◆障害者を持つ家族が共に明るく過ごせる家(応募代表者:伊藤裕治氏) / 円い家「形・心・家族・近隣」(応募代表者:橋本彼路子氏(スタジオ3)) / 住み慣れた所に永遠に一本郷町の家(応募代表者:佐伯博章氏(株式会社地域総合設計) / 車椅子の為のマンション改修(応募代表者:中山裕里香氏(手すりの会) / 高齢者夫婦二人が共にゆったり暮らす家(応募代表者:吉島衛氏(吉島衛建築研究所))

◆佳作◆「いす座の家」(建築士の連携による) (応募代表者:徳永栄一氏(フォルム設計企画一級建築士事務所) / 気持ちよく暮らす家(応募代表者:水野眞澄氏(水野眞澄設計室)) (掲載は応募順)

図書室だより

民家に関する図書および外国語(英語) 図書を中心に受入
(二〇〇四年三月から五月)

●民家に関する図書

一色史彦ほか監修『ふるさと住まい探訪 茨城の民家一〇三』常世田令子著『民家移築の記録』吉田桂二著『図説 世界の民家・町並み事典』等

●外国語(英語)の図書

『Apartment Architecture now』『Urban houses』『Homes for senior citizens』(以上三冊住宅作品写真集)『London calling』(二〇世紀の中流階級ロンドン市民の歴史・ロンドン市内の再生)『Urban Villages and the making of communities』(都市計画)等。

図書案内

開室時間:九:三〇~一六:〇〇
(一〇:〇〇~一三:〇〇はレファレンスサービスおよび新規登録受付等係員対応業務は休み)
休 室:土曜日 日曜日 祝祭日 当財団の休日(夏季・冬季の休暇期間、創立記念日(十一月六日))
住総研シンポジウム開催日

利用資格:一八歳以上の方
利用形態:完全開架式(資料貸出はしてありません)
詳細お問い合わせは:
<http://www.jusoken.or.jp/kyosyofront.htm>

新刊だより

住総研『研究年報No.30』

二〇〇二年度研究助成一九編・二〇〇一年度研究助成一編 委託論文三編を収録している。この論文集は我が国の住研究の水準を示すものとして高い評価を得ている。

A4判・本体価格2400円+税
(お申込みは、丸善営業部へ電話03-3272-0521) <

印刷助成 研究No.0018

寄せ場型地域—山谷、釜ヶ崎—における野宿生活者への居住支援

—「自立」支援と結合した居住支援の課題

中島明子(和洋女子大学)

「ホームレス」問題は、雇用、住宅、福祉、医療、教育等包括的な支援が必要であるが、本研究では野宿生活者への「自立」支援を、居住保障論、居住空間論から接近し、居住保障の意義と内実を問い、「寄せ場」を対象とし、地域の変容と再生のプロセスの中で問題の解決を探り、地域資源を活用した居住支援の可能性を示している。

A4判・本体価格1000円+税

(お申込みは、丸善営業部へ電話03-3272-0521) <

お詫びと訂正

二〇〇四年春号の24頁下段、27行~28目「敷地面積から二〇㎡引いて、それに建ぺい率を掛ける」とありますが、正しくは三〇㎡です。謹んでお詫びし、訂正いたします。

「わかちあひ」の購読について

●発刊日は原則として、冬号一月、春号四月、夏号七月、秋号一〇月です。したがって、送付開始は、購読料受領後の最新号とさせていただきます。なお購読手続きには約一週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引き続き購読いただきますよう、お願い申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおこたえております。ご希望の方は、あらかじめ在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確認下さい。

購読料は次のとおりです。

一年間 二〇〇〇円(送料共)
三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法

●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代えさせていただきます。財団からは改めて発行いたしません。

●購読期間中の購読中止による購読料返金はいたしません。

「すまいるん」は次の店頭でも販売しておりますので、ご利用ください。(店頭での予約購読の受け付けはしていません。)

●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21

電話(03)3291-1338

●財団法人住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-18

郵便振替(東京)00101316639

電話(03)3484-5881 FAX(03)3484-5794

池辺陽 もうひとつの最小限住宅

細心の設計と監理で築50年を迎える我が住まい

伊藤 喜久

昭和三〇年に建てた池辺陽氏設計の小住宅は、マラソンやサッカーの国際試合が催される長居陸上競技場から北へ五〇〇mほどの地点、大阪市南部に在る。元々一円の農地だったが、大正期に入って大阪市の発展に伴い住宅地として開けていった。昭和四〇年を過ぎるまでこの家の西は千坪余りの畠で、地主のお百姓が青菜・胡瓜・茄子・トマト等を下肥で作っていたし、大方のトイレは未だ汲取りが当たり前の時代であった。

昭和二九年、私は自分の生活に集中するため専用の住環境が欲しいと考えるようになり、生家の裏庭を両親に使わせてもらい自分で小さな家を建てる計画を練り始めた。

資金については日本電建に月掛で積立てると六か月経過で建築にかかる方法があると聞き、早速、日本電建大阪支社へ相談に出掛けた。担当者との検討の末、坪単価三万円、建坪十坪を目安に計画を進めることになった。

設計はアイデア住宅設計の紹介冊子を参考にした。その中で東大生産技術研究所の設計による実例『ローコスト住宅』とうたったものに強く引きつけられた。基本に流れる合理性に感じたのかも知れない。設計者の池辺教授に手紙を書き直接お願いした。間もなく承諾の返事をいただきこの計画はスムーズにスタートした。

設計者が東京在住のため、監理は池辺先生には先輩に当たる坂倉準三建築研究所大阪支所長の西澤文隆先生に頼んで下さった。施工は日本電建推薦の業者に見積りを頼み、監理の西澤先生が検討の結果妥当と判断されたの

で、その業者に決った。

昭和二九年秋から大阪では電建との契約やその他諸々の手続きに足を運ぶ一方で、東京では設計に入る。打合せは主に手紙の往復だったが、その間に大阪から東大の生研をお訪ねして設計現場を見学させて頂いたり、池辺先生の河田町の御自宅へお伺いして、ご自身設計のモダンな住まいと池辺夫人考案のインテリアを拝見することができた。

監理の西澤先生は、常に設計者を尊重されその意向を確かめながら、現場に合わせて調整して下さった。私も打合せのため度々坂倉研究所に伺い、先生から所員の方々から建築の基本を学ばせていただいた。

昭和三〇年五月末、実施設計に当たった(財)建設工学研究会の担当者北川充昭氏から最終案の図面が届き、六月着工間もなく静かな町に槌音が響き、それは日本の敗戦から一〇年を経て復興から建設への光がさし始めた頃だった。

木造一部二階

一階三三・四㎡(十坪一合二勺)

二階二一・三㎡(三坪七合二勺)

電建との契約は延面積が一五坪近くだったので四五万円に増額した。工事が始まってからの変更は殆んど予算の範囲内で納められたが、池辺先生が設計に合せて作らせた厨房セットやテラスの増設等を含め、工事総額は凡そ七〇万円だったと記憶している。

着工後は工事の進行に従って担当者から、訂正図面、設備図面、内法原寸、建具図面、西澤先生の質問に対する回答、厨房セット設

計図、同見積書等が届き、その間池辺先生も何度か現場に立ち寄られた。

池辺先生による設計上の工夫

- (1) アルミロール葺にしたこと。ピカピカのアルミニウム板で太陽光線を反射させ夏季の室温上昇を防ぐ。錆びないから塗装は不要。
- (2) ビアノ室は靴履きにしたので床材は断熱効果も考えてコンクリートブロックにした。将来リノタイルを貼るための寸法を見込んだ。
- (3) 階段下の空間はパイプと扉を付けて衣袋入を設けた。WC上部空間も物入を設けた。
- (4) 二階寝室南側窓上に物入を設け、庇とパランスさせ一体化した。
- (5) 東西両側内壁と二階寝室の吹抜け側は、音響防止効果も考えてハードボード壁とした。
- (6) 二階床はホモゲルンホルツ使用。
- (7) 厨房下部には一部手持ち既製戸棚を組込んだ。シンクの下は物入二台はキャスト付き。
- (8) ガス台はフレキシブルシートを敷いて既製コンロ挿入式にした。天板は一八・八ステンレス張りとした。

(8) 厨房排気用フードはシャワー室北壁にファンを取付け連結した。等



竣工時の室内と筆者。



現在の南側外観。*



現在の東側外観。*
母屋とつなぐ屋根つき通路がつくられている。

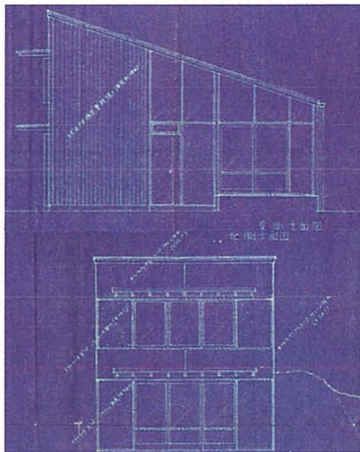


イトウ・クワルテットの演奏風景。

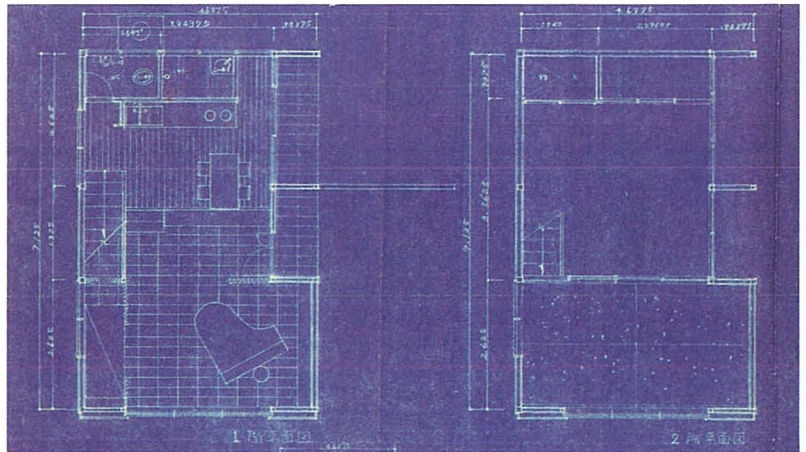
特記なき写真は筆者提供

*写真=松永あつみ

**写真=中谷礼仁



東側/南側立面図



1階/2階平面図(当時の設計図面)

昭和四三年、我々一家は母の希望でこの母屋に転居した。それまでセカンドハウスの存在だったこの家は、日常生活の一部となった。築三〇年余を経た昭和六二年には、木製の北窓と壁が腐蝕してきたのでやむなく一部を撤去すると同時に、天井と内壁に内装

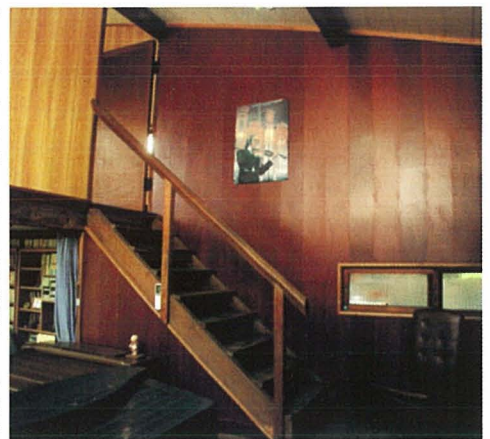
亜鉛鉄板になった。
昭和三〇年一〇月いよいよピアノやベッドと共に居を移し新しく始めた生活の記憶は、夜半一人で聴いたファドの女王アマリア・ロドリゲスの歌う『暗い艇』に始まる。ラジオの深夜放送は始まったばかりの頃であった。さて、昭和三三年までは望み適ったシンプル

な生活が続いたが、同年結婚のために大阪城の西側、大手前之町に住まいが移り、この家には自分の練習と生徒のレッスンに日々通うことになった。建築から何年後の事だったか或る年大きな台風に見舞われた。吹き荒れる風に屋根のアルミ板が一枚飛ばされてしまった。鉛の釘は予想外の風力と風向きに耐え切れなかったのだろう。その後の葺きかえは亜鉛鉄板になった。
昭和三〇年一〇月いよいよピアノやベッドと共に居を移し新しく始めた生活の記憶は、夜半一人で聴いたファドの女王アマリア・ロドリゲスの歌う『暗い艇』に始まる。ラジオの深夜放送は始まったばかりの頃であった。さて、昭和三三年までは望み適ったシンプル

注:海外では既に普及していた、いわゆるシステムキッチンを池辺先生は特注で作らせた。(9)ラワン材を用いた階段手摺りは断面菱形で太く作られ独特のものだが、握り心地よく安全性も抜群。
工事は西澤先生の綿密な現場指導でほぼ予定通りに運び、昭和三〇年一〇月竣工した。完成後の昭和三一年夏、池辺先生御夫妻と夫人の弟様御夫妻それに写真家も加わり、家の出来具合を見に来られた。

二〇〇五年には築五〇年を迎える。その間、日常的なファミリーアンサンブルをはじめ絃や管の達人を迎えての改まった室内楽演奏、年の始めには恒例「イトウ・クワルテット」のひき初めなど、この小さな家は音楽活動の原点から応用篇へと私の初心を大きく育ててくれた。
*
終りに、この紙面をお借りして若輩の私に過分のご盡力をいただいた今は亡き池辺陽・西澤文隆両先生へ、加えて積極的な協力を惜しまなかった両親と夫貞亮氏に、心よりの感謝を捧げたいと思います。
伊藤喜久マツオカ/いとう・きく
一九二八年、現住地生まれ。一九四八年、帝国女子薬専(現大阪薬科大学)卒業。同校助手、転じて音楽専攻ピアニスト。七七年、九六年、勤務薬剤師。

材を張り、母屋との間には屋根付きの通路を設けた。
二〇〇五年には築五〇年を迎える。その間、日常的なファミリーアンサンブルをはじめ絃や管の達人を迎えての改まった室内楽演奏、年の始めには恒例「イトウ・クワルテット」のひき初めなど、この小さな家は音楽活動の原点から応用篇へと私の初心を大きく育ててくれた。
*
終りに、この紙面をお借りして若輩の私に過分のご盡力をいただいた今は亡き池辺陽・西澤文隆両先生へ、加えて積極的な協力を惜しまなかった両親と夫貞亮氏に、心よりの感謝を捧げたいと思います。
伊藤喜久マツオカ/いとう・きく
一九二八年、現住地生まれ。一九四八年、帝国女子薬専(現大阪薬科大学)卒業。同校助手、転じて音楽専攻ピアニスト。七七年、九六年、勤務薬剤師。



現在の室内。**

編集後記

朝日さす片えは消えて軒高き
家かげに残る霜の寒けさ

箏曲演奏家であった宮城道雄（一八九四～一九五六）は、同時にすぐれた作曲家であった。彼は若くして作曲をはじめたのであったが、そのきっかけは弟が傍らで詠んでいた、七首でできた小学読本であった。盲人であった彼は、その歌をまず覚えてから、名曲「水の変態」を紡いだのである。

今回の特集に登場してもらった若い人たちの「伝統」体験と共通のもの、そのより純度の高いプロセスが、この宮城の作曲行為にあると思う。彼は文字だけの全く未知の様相から、その美しさに呼応し、曲をなしたのだから。わたしたちが見つけた「伝統」のもつ新鮮さは、ちょうどこのあらかじめ断絶してしまっていた七首から沸き起る響きに似ている。

また特集以外の原稿に、たくさん心を

打たれた。「すまいのテクノロジー」では、日本の石造技術の本質的ともいえるエッセンスが明かされている。実はもつたいないのでもう少しおいてもらおうと思つておいたのだが、懲りずにまたお願いしようと思つている。「私のすまいろん」では、伝統と呼ばれるものの本質が、日常の積み重ねであることを、淡々としかし鮮烈に教えてくれた。著者の実際のつきあひを通じて知り得たある名言語家の生き方を通してそれが語られるのだ。貴重。また「すまい再発見」では、前々から紹介させていただきたいと思つていた秘蔵の物件を、自ら住まう人の手記というかたちで公開できた。初めてお会いした時、彼女の専門的知識の豊富さに驚嘆した。すまいづくりを通して身に付けられたのだという（もちろんご主人が大専門家であったわけであるが）。いろいろな人が住まいについてさまざまな経験を通じ、知恵を練られている。それをよく知ることができた。ありがとうございました。

（本号責任編集Ⅱ中谷礼仁）

住宅総合研究財団（略称Ⅱ住総研）は

昭和二三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「研究年報」「研究論文」を発刊、また住に関する専門図書室、セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業につとめております。

この「すまいろん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行（季刊）されているものです。ご利用のほど、よろしくお願い申し上げます。

季刊すまいろん 2004年夏号

二〇〇四年七月一〇日

頒価 500円

発行Ⅱ財団法人 住宅総合研究財団
発行人Ⅱ峰政克義

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-18

TEL (03) 3484-5381

FAX (03) 3484-5794

E-mail: jusoken@mx.mesh.ne.jp

URL: http://www.jusoken.or.jp/

編集委員Ⅱ

* 委員長

片山和俊（東京芸術大学建築科教授）*

小林秀樹（千葉大学工学部教授）

中谷礼仁（大阪市立大学建築学科専任講師）

服部宍生（千葉大学大学院教授）

野城智也（東京大学生産技術研究所教授）

● 制作Ⅱ建築思潮研究所

印刷・製本Ⅱ慶昌堂印刷株式会社